
聖痕使い

中間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖痕使い

【Zコード】

Z5887W

【作者名】

中間

【あらすじ】

ジンは神様に異世界を魔物の侵攻から救ってくれと頼まれ自ら異世界に乗り込む。しかし、俺の力だけでは足りない、そこでこの異世界をひとつにまとめ世界規模の軍で戦うことになる。

精霊を操り主人公を中心に世界をまとめ世界を自分好みの世界に作り変える。

主人公が、神様に頼まれて異世界に自ら向う話です。神ではなく、精霊王に力をもらつて戦います。一応主人公最強物です。色々な種

族を出す予定です。

女を助けたり、国を助けたり、世界を救つたり、ハーレムを作る話。
属性多めです。

処女作ですので、拙いですがよろしくお願いします。勢いで書いたので最初の方の五話までの話すごく短くなつていきました。

プロローグ 神様に会つ

田が覚めると白い空間にいた。
「あればいいのかわからずにボーとしていると

「やあ始まつて天使 仁くん」

後ろから声が聞こえてきた。妙に落ち着いているな俺。

「誰だお前？」

「」の世界の神をやつているものです」

後ろを向くと思いつきり腰曲げて神様が頭下げる。
見た目は、笑っていること以外あまり特徴のないスースツ姿の青年だ
った。

「ずいぶん腰の低い神様だな」

「いやあ今日は、お願ひする立場なもので」

「用件は何だ」

「異世界についてほしいのです」

「嫌だめんどくさい」

「ちなみにあなたが行かなければその世界は滅びます」

お願いじゃなくていきなり脅してきた。めんどくさいって言つたら

いなあ

「・・・何で俺なんだ」

「あなたしかできないからです」

「だか「神様の事情です。」 らな・・・」

話す気はないらしい。

「たくさん死にます。老若男女とわずたくさん死にます。赤ん坊も死にます。美少女も死にます。」

俺はしばらく考えた。美少女につられたわけでがない。異世界に興味がないわけではないのだ、まあまだ夢かもしけないのだが真面目に考えてみた。そして

「・・・わかった、行こう・・・ただ一ヶ月待てないか」

「それくらいならゴットパワーで何とかしましょう」

「神様軽いな」

「いまどきの神様ですからそれでは、細かいことまた後で」

「ああ、わかった。」

・・・後で？

そこで目が覚めた。

「おはよウジヤセコモク」

「…………」

ベットの横でスース姿の人形が喋つてた。神様だつた。
はあ・・・夢じゃなかつたのね。夢に出てきた意味あるのか。

あの後いろいろ聞いた

いわく

- ・その世界は、ファンタジーの世界で剣や魔法や精霊や龍やエルフやらがいろいろいるらしい
 - ・もう少ししたら魔物の大侵攻があるらしいが世界は、それをしない
 - ・それどころか、戦争までやつてるので正直やばいこと
 - ・侵攻は三回あつてあとになるほど苛烈になるらしい
 - ・俺が選ばれたのは、精霊と相性がいいからと人格らしい（あまり良い性格だとは思つていらないのだが）
 - ・俺は、まず精霊界で修行をするらしい（神様は碌な戦闘能力はくれないらしい・・・神様使えねえな）
 - ・今の世界のほうが高位であるため戻つてくることはできないうらい。
 - ・基本的に異世界の情報は話せないらしい。
- といつものだつた。

一ヶ月の間にやつたことは、バイトと身辺整理だ。

貯金とバイト代で親に旅行をプレゼントした、学校には退学届けを、
親友とは今までのことをいろいろと清算した。手紙まで用意した。

そして今日が旅立ちなので両親に気分を重かったのだが、別れを告げようと思ったら

「息子の旅立ちに乾杯」

「「「乾杯」「」」

なんか両親と親友と後なんでか元担任がいて宴みたいになつてた。

「・・なんで?」

「ああ私が教えましたよ」

神様がスー^ツ姿で茶を啜つっていた。

「貴様のせいが――――――」

「まあまあ私たちも大体わかつてたし正確な日はわからなかつたけど」

「普段やる氣ないのにここ最近妙に真剣だったからな

「まさか異世界だとは思わなかつたが」

「応援しているぞ」

上から俺、母、父、親友、担任だ

さすが俺の両親とこの俺と付き合いのある友人だな。担任は・・・まあ流石は教師と言つたところか。

こうして小さな宴を開かれた後俺は、異世界に旅立つた。

あ、精霊界のほうな。

しまつた手紙を処分するのを忘れた。

1話 精靈界から異世界へ

小さな女の子が聞いてきた。

「ねえ、行っちゃうの？」

「ああ、そろそろあっちの世界に行く。」

女の子が泣きそうになつた。

「大丈夫。大きくなつたらあっちで会えるから。」

抱きしめて頭を撫でてやる。じぱりくすると

「わかった。パパ」

そうなんです。私父になつてしましました。といつてもこの子は、精靈なので人間とは違う生まれ方なんですが、精靈の統合を初めてしたときに、生まれてしまつた子で水と風と土の属性を持ちます。新しい雪の精靈です。名前は小雪。

ちなみに精靈界の修行は大変でしたよ。最後なんて精靈王たちあんま加減してなかつた気がする。

そこに刀神が歩いて来た。前の世界の神の知り合いらしい、たまに精靈界に来て刀術の稽古をつけてもらっていた。

格好は侍スタイルだが髪は後ろで結んだだけの物だ。

「しつかり鍛錬を怠るなよ」

「最後の一言葉まで小言ですか師匠」

「まあ、いいじゃないか君のことが心配なんだよ彼は」

なんか元の世界の神もきた。

その神が始めて真剣な顔になつて。

「ありがと。元の世界を捨てて来てくれて。本当にありがと」

真剣な顔をして頭を下げる神に、俺は面食らつた。

「まあ任せの今の俺は結構強いぜ」

「うん、パパは強いんだよ～～」

「それに、ほかは勝手にさせてもらひしね」

神様が不思議そつに聞いてくる。

「なにがあるつもつだい」

「せつかく異世界に行くんだ前の世界でできなこととしたじやないか」

「俺はハーレムをつくる」

「・・・・・」

「わーい、わたしもパパのハーレムに入る〜〜
「ああ、待っているぞ我が娘よ」

娘の頭を撫でてやる。

「こなんんだつたつけ?ジンつて」

「まあ時間は人を変えるし、その程度の褒美はいいんじゃないかな」と刀神。

「いや、けど娘つて」

「まあ血のつながりはないし神ではよくあるだろ?」

「・・・うん、そうだね・・・だといいなあ」

「それじゃあ行くか世界でも救いに」

「ああジン、これを渡しておくれよ」

懷中時計のようなものを渡してきた。

「最初の侵攻が360日後、ゼロになつた時に侵攻が始まる、場所は大陸の中央に大きな山があるからそこだよ」

時計の上の部分に360と青く光る数字が浮かんでいた。ほかは反時計回りをしている時計が三つ（時、分、秒だらう）ある。

「じゃあ門を開くな、水の精靈王の懇意の神殿に落とすからその方が何かとやりやすいと思つし、あと例の能力もついてにつけてくか

「わかった。」

なんかここからなにかもうひの初めてだな。

「いつてらつしゃーい

「達者でな

そこで門が開いた。

「いつてきます

「頼んだよジン」

いつて俺は第一の故郷に別れを告げた。

2話 異世界の女の子

異世界1日目

門をぬけたと思ったたら、空中に出了た。

下がなんか水溜りになつてたから、水の精霊に手伝つてもらつて自分の位置だけ水をのけた。

よく見ると噴水のようなところだつた。今の服装は、黒一色だつた。闇の精霊王が作ってくれた服だ。

闇の精霊王は小さな少女でかわいいやつだつた。

「あなたがジン様ですか？」

女の声が聞こえる。力を上げると（服を見ていた）。水色の髪を腰まで伸ばした綺麗な娘が漫画に出てくるような神官巫女みたいな格好をしていた。

「そうだが。君は巫女さんでいいのかな？」

「は、はい。わたしはこの神殿の巫女をしているソフィアと申します」

「硬いな、別に普通で良いぞ。どじまで聞いている？」

「私の友人が行くとだけ、水の精霊王から聞いています。」

「じゃ簡単に来た目的を話さう」

魔物の大侵攻について話した。

「そのような事が、大変なことになつてゐるのですね」

「へえ、簡単信じるんだな。この世界の人間は知らないって聞いてたけど。」

「巫女ですから」

それでいいのか？ついでに聖痕も見せた。

「すごいです。聖痕はひとつだけでも持つていれば歴史に名を残すような人達ばかりで、こまはもうほとんどいらないのにそれをつつすべてだなんて。」

なんか感動している。

突然雰囲気が変わつて真剣な表情で

「あ、あのお願いします。助けてください。」

「？？？魔物でも出てるの？」

「いいえ、実はこのあたりの村を盗賊が牛耳つていて毎月食べ物などを奪われているのです。」

毎月？

「略奪じゃなくて定期的に奪いにくるのか？」

「はい、それでこれ以上奪われると村が滅んでしまうのです。」

なんだかソフィアの言葉には違和感がある。違和感を確かめるために

「うーん、じゃあ村の人集めてくれる」

3話 村の状況

まだ夜が明けたばかりのようだった。

ソフィアに村の人を集めて集会を開いてもらつた。

思つたとおりだつた村の人間はみんな瘦せている。これでは餓死者が出ていそうだな。考えていると

ほとんどの村人は、不審そう田を見てきた。まあ仕方ないなよそ者だしちょつと強気に言つとくか。

「まず聞きたいんだけどなんで戦わずに滅ぶ方を選んだんだあんたら?」

「な、なんだと」

「よそ者が知つたような口を」

村人が怒り出す。村人A、Bがうるさいな。

「静かに」

なんか村長っぽいのが出てきたな。ダンディなおっちゃんが村人の格好をしいていた。

「どういうことだね食べ物を捧げなければ我々は殺されていた。なのに君は我々が滅びを選んだと言つた。それはなぜだね?」

「なんでって」

俺は、あきれてしまった。今若者を制したところからもおそらく村長なのだろう。村長ですらこの状況の矛盾に気づいていないのだおそらくあまり物事を考えずにしてきたのだろうまあこの世界ではしかたないのかもしれないが

「あんたうすでに食べるのに困つてんだる本来少しそつたぐものを奪うのなら生きと殺さずが基本だ。だが、この村は滅びようとしているなぜだ？簡単だ他の村が逆らわなによつにするための生贋に選ばれたんだよあんたたちは」

「そ、そんな」

盗賊が取つたこの手法には、たまに見せしめがないと村が言つことを聞かなくなるからな。

村人たちが絶望の表情を浮かべる。はあ、少しくらい考えろよな。

「ジンをとどくすればいいのですか？」

いち早く立ち直つたソフィアが聞いてきた。

「少なくともこの村ができることはないな。どうにでもこつも瘦せていて碌に戦えんだる」

なんか絶望が深くなつてきた。

「盗賊は、どれくらいいるんだ」

「80人ほどで今日の暁に5人ほどが徴収にきます。」

「ならなんとでもなるな」

「えつ、なるんですか」

なんか驚かれた。まあ問題は撃退した後の復讐だよなあ殺るなり

ついて壊滅させないと後が面倒だ。

しばりく考え。・・・よしこの作戦でいいの。

「じゃあ報酬の方だが」

また絶望の表情を浮かべた絶望好きだな。

「あ、あのジンさんもひこの村にはなにも・・・」

「ああ、俺がほしいのは旅の友だよそれで、ソフィア」

「なんでしょう」

「それをソフィアに頼みたいんだ。」

4話 盗賊一掃

あのあと集会が荒れた荒れた。まあソフィアさん美人だもんな。何より俺が信用できないうらしい。特に村長みたいな名前はオルムさん（ソフィアさんの親代わりでもあつたらしい）なんか怒つてたなあ。

まあ仕方ないか、その場は、ソフィアさんのおかげで何とかおさまった。そこに

「ただの王都までの道案内だよ」

と説明しその後ソフィアさんが

「わかりました。ご案内します。」

といつていたのでそこで集会は解散となつた。

で、今何をしているかといふと田の前で盗賊が三人ぶつ倒れている内ひとりは死んでいる。

「さつさとつれて帰れ、お前らみたいな雑魚が4、50人で徒党を組んでも雑魚は雑魚なんだよ」

盗どもは、仲間を抱えて逃げていった。その顔には、憎悪を浮かべていた。

「どうして先ほど、4、50人と言つたのですか？」

ソフィアさんが聞いてきた

「4、50で言つておけばもつと大人数でくるかなって、それにひとりは殺したから黙つていられないだうし」「

正直作戦といつてもこの程度なのが最初の五人は、格闘だけで倒したから挑発には乗るはず。殺す時だけは、精霊術を使つたが。まあ村人は不安そうだったが、どうにもならん。もともとこの村のためだしな。

この日は神殿に泊めてもつらた。

異世界2日目

次の日の真昼間に案の定八十人を超える人数で押しかけてきた。これならほとんど来たと思ってよさそうだな。

「てめえか、うちの部下やつてくれたのは」

村のはずれに立つていいかにも村人っぽくない俺になんか話しかけてきた。

俺は、軽く無視して。

「ソフィアさんは、そこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

ちよつと震えている。ちよつとかわいい。

「おい無視してんじゃねえぞ」

「知らん、死ね」

手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

・ソフィアサイド・

彼は80人程度どうとでもなるといつていきました。

確かに精霊術は、強いです。魔法のように詠唱を必要としないので単独での戦闘もできます。その分魔法に比べて習得が難しいですが、精霊と通じなければならぬので才能も必要です。

それでも80人を相手にするのは、難しいはずなのですといつより無理です。

なのにどうじょうか考えている間に昨日は畠に来た盗賊を倒してしまいました。今日の襲撃が決まってしまいました。

そして目の前には、80人を超える盗賊がいるのです。さすがにこわいです。

「ソフィアさんそこで俺の精霊術を見ててくれ
「はい、ジンさん」

すでに彼の周りには、かなりの火の精霊が集まっていました。それは、わたしの想像を超える力でした。

これには驚きました。わたしは、てっきり聖痕を使うものだと思ったのです。聖痕を使わずにこれなのか、と。

彼は、手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

炎の大蛇が四匹出て来ました。

「灰にしろ」

大蛇が盗賊に襲いかかりました。大蛇に噛まれた盗賊は燃え灰になりました。

「ひいい」

「なんだよこれ」

「聞いてねえぞ」

一方的でした。剣で攻撃しても剣は溶けてしまい盾で防ぐこともできず3分ほどで盗賊は、全滅していました。

その凄惨なはずの光景は、私を魅了しました。この人は聖痕に頼り切つた戦いかたをしません。そんな彼が聖痕を使つたらと思うとゾクゾクします。私はこのとき彼に魅せられてしまったのです。

5話 ソフィアの告白

-ソフィアサイド-

村の人たちは大変喜んでいました。わたしもホッとしてしまいました。

盗賊のアジトからお金や食料も手に入つて、今年はなんとか大丈夫そうです。

お昼を食べ終わるとジンさん、いじえやはりジン様と呼びましょう、ジン様が

「じゃあ王都までよろしく」

「え、もう行くのですか?」

「まあ、あまり時間もないからね」

今言わなきやもひ言えないかもしれない。

「あの私も連れて行つてください」

「うん、だから王都までよろしくつて」

「そうじやなくて、その先もずっとお側にこさせつてください。」

「それつてつまり」

顔が体が熱くなつてきました。

「はい、その・・・お慕いしています。」

「・・・」

「・・・」

「俺実はハーレム作るのとか考えてますよ。」

「ジン様ならそれくらい、いいと思います。」

「(なんか様付けに戻つてる) 危険ですよ

「私も精霊術が使えます。」

「オルムさん」

「ソフィアをよろしくお願ひします。」

満面の笑みのオルムさん。

「（あんなに怒つてたくせに）・・・僕Jですよ

「大丈夫です。受けとめます」

「・・・わかりました。」これからもよろしくソフィアさん。

「あのソフィアとおよび下さい

「わかった。ソフィア」

「はい。ジン様」

「じゃあ挨拶とかあるだろ」出発は明日の朝で
「わかりました。」

-ジンサイド-

その夜俺はソフィアと同じ部屋にいた。

俺は、ベットの上でソフィアの髪を後ろから撫でていた。

「ありがとうソフィアついてくると言つてくれて。俺実はこの世界
では、一人ぼっちだつたんだよな」

そう言つて俺は、ソフィアを抱きしめた。ちょっと声が震えていた
かも。

「ずっとお側にいますから、もう一人にはなれませんよ。」

「そうだな」

ソフィアが手を握ってくれた。

俺はしばらくの間、髪をもう一度今度は全体的に、撫でまわした後、
ソフィアを抱えてベットに倒れこんだ

「ひゃ」

「ソフィア実は、この前まで精霊界にいたから実は一年ほど禁欲生
活だつたんだ加減できないかも」

「はい。思う存分に。あの、でも初めてなので最初はやさしく」

「わかった」

こうして俺はソフィアが気絶するまで彼女を抱いた。

異世界3日目

朝ソフィアの体を拭きながら謝った。

「ソフィア、その、すまん」

「いえつ、そのつ、すごかつたです。」

頬を染めてそんなことを言つてくれた。襲いそうになるのを我慢する。

それでもその表情の中に疲れが見える。昨日は氣絶するまでしたからなあ。

村の人間も盜賊の一件で俺のことを認めてくれたのかソフィアがついていくことに反対はしなかった。

一分の男どもはまた絶望していたが。

俺のことが怖くないんだな。俺は、殺してもあまり罪悪感を感じなかつた自分が怖かったのに。

確かに俺は、必要なことに躊躇はしない性格だつたが殺しを平然とするとはなあ。

今は、王都への街道を進みながらこの世界について隣を歩くソフィアに聞いていた。ソフィアもほとんどあの村を出ることがなかつたので、あまり村の外のことはあまり知らないらしい。話を聞くと大陸の中央は、人間の国が多く外側のほうは、人間の国が少なく亜人の国が多いらしい。

今いる国になるとソフィアの顔が少し曇つた。話を聞いてみると、この国の名前はグーロム王国またの名を『奴隸王国』つまり国

が奴隸を推奨しているのだ。

王もかなりの愚か者らしく奴隸を得るために、戦争を起こすような王で、他国の民どころか自国の民にも嫌われているらしい。

だが他の国の支配者階級は奴隸を手に入れられるので黙認している。表立つて反対しているのは、クイント皇国だけであるらしい。

クイント皇国の中は傑物らしく国力も大きい（協力関係を築くならクイント皇国か）。魔物の大侵攻は、俺だけでは無理らしいから国単位の協力が必要不可欠だからな。

クイント皇国を中心伺う。

「この世界は、本当にだめそうだな。」

「はい、今大侵攻があれば簡単に滅ぶでしょう。」

今日は暗くなり適当なところで野宿になつた精霊達のおかげで野宿も快適だ。警戒もしてくれるし。

そうして、次の日

異世界4日目

「なあソフィアこいつらって

「はい、奴隸商人と子飼の傭兵といったところでしよう」

俺たちは、ガラの悪い傭兵崩れに囮まれていた。商隊が前から来たと思ったら、傭兵崩れが出てきて、いきなりこれだ。

「そんで商品は、あの馬車の中で俺たちもそこに入れと」

「そうでしょうね（気の毒な方たちですね、まあ自業自得ですが）ソフィアは、かわいそうな人を見るような表情をうかべた。俺が手

加減しないのがわかっているからだろう馬車から豚が出てきた。

「おまえらも今から私の奴隸だ。ぐつふつふ

気持ち悪いやつだな。喋るなイライラする。

「気持ち悪い豚だな」

口が滑った。

「なんだと貴様！！おいお前たち男は殺してかまわん」

沸点の低いやつだ。

丸腰だと侮ったのだろう傭兵が剣を抜こうとしているがのんびりしたものだつた、と思つたらその傭兵が吹つ飛んだ。

ただの風の精霊を使った突風だ殺傷能力はない。これで時間も稼いだ。

「なつ、精霊術師だと」

その吹つ飛んだ男が立つたところで

「『風刃』」

腕を横に難いだ。

とつさにしゃがんだ一人以外の奴隸商人と傭兵の首が風の刃に切り飛ばされた。

お、避けたよ、見えないはずなのに。
よけた内の一人が切りかかってきた。

「まで！」

もうひとりが止めようとするが、俺は半身になつて剣を避けて、風を纏つた左手で剣を右手で顔を掴んだ

「なに！」

剣を握つたのに驚いたのだろうはい時間切れ。

「『流雷』」

顔を掴んだ右手から電流が流れ男は気絶した。もう一人の男が悔しそうにしていたので。

「気にするな、殺していない」

「えつ」

「俺の質問に答えれば逃がしてやる」

少し困惑していたが。

「わかった」

敵意がないことを示すためだろう男はその場に剣を置いた。

「何でも聞いてくれ」

「なぜ奴隸商人の護衛をしていたんだ？」

「えつ、どういうことですか？」

ソフィアが驚いていた。

「この二人は、ほかと違う感じがした。」

実際格好からして傭兵もどきとは違った。装備にしつかりと手入れもしているようだし、何より質が違う。

「ああ、俺たちは冒険者だ」

「・・・冒険者がこんなことを

ソフィアが蔑んだ目で見ていた。冒険者が慌てて

「いや、俺たちは商隊の護衛を受けたんだ。それが奴隸の運搬にすりかえられて前金を使ってしまつていて下りることができなかつたんだ」

「そうだつたんですか」

ソフィアの表情が和らいだ俺は苦笑して次の質問につづる。

「なぜ冒険者を雇っていたんだ？」

「運んでいたのが、高級奴隸と戦闘奴隸で結構な額で用心のためだつたらしい」

「奴隸を解放するには、どうすればいい？」

「マスターキーを使うか、主が開放するしかない、キーは購入者の所にあるし、どうし主は君が殺しちゃったから」

残念そうに

「中の二人は助けられないと思う」

ソフィアが悲しそうにしていた。だが今は話せない、これはあまり公にはしたくないのだ。

「そうかありがとう。俺はジンこつちはソフィア、俺の女だ。」ソフィアが頬を染め、ジークは羨ましそうにしていた。

「ソフィアです。先ほどは、失礼しました。」

「俺はジーク、冒険者だ。」

「ジークは中の二人について知っているのか？」

「いや、顔もしないな。」

それなら問題ないだろう。嘘をつく必要もないし。

「中の一人とやらは俺に任せてくれ。ジークは仲間を王都に運んだほうがいい」

「そうだな」

ジークは、仲間を荷物のよづに馬にくくると

なんか扱いひどいな、ほかにもないかやらかしているのか？

「本当にありがとう仲間を殺さないでくれて、王都に行くんだろう？」

「ああ」

「じゃあまた会えるかもしれないな」

「かもな

そしてジークは去つていった。
あれは、前振りだろうか。

7話 奴隸の一人

それじゃあなかの二人と」対面しますかね。

馬車の中に入ると暗くてよく見えないが金髪と炎髪の少女が床に座つていた。

首には、複雑な模様のかかれた鉄の首輪のよつた物がつけていた。俺の顔を見ると金髪には、ビクッと怯えられた、炎髪の方は俺の前まで来ると突然、床に頭を押し付け土下座の格好で

「奴隸の分際でお願い申し上げます。イリヤは逃がしてもらえませんでしょ、うか、わたしが戦闘奴隸も高級奴隸もいたします。だからどうかイリヤを逃がしてくださいお願いします。イリヤはまだ」

「黙つてくれ」

ビクッ

つい言葉に怒気を混じらせてしまった。炎髪が黙つてガクガク震えている。このとき俺は、かなり苛立っていた。
これがこの世界の普通なのか、自分の認識を改めさせられた。軽く会つてみるか、と思った自分が腹立たしい。

「ちょっと頭を冷やしていく、ソフィア一人を頼む」

俺は馬車から出て少し離れて座り込んだ周りは血のにおいが充満していた。

初対面の誰とも知れない人間に對してすることが、あの対応なのかこの国は、それが普通なのかはわからない。

だが、今決めたこの世界から奴隸制度をなくす絶対になくす。たとえ国を滅ぼしても。ソフィアに心配をかけてしまったな。

しばらくしてから馬車に戻った。

ビクッ

怯えられた

「ああ、さつきはすまなかつた。」

「い、いえ、ソフィアさんから私達に対して怒つているわけではないと聞きましたので」

金髪の少女が初めて喋つた。金髪を肩ぐらいままでって顔はかなり整っている。髪から耳は尖つているのでエルフだった。

「あ、あの先程は、も、も申し訳ありませんでした。」

炎髪の方は、かなりの怯えている近くで怒氣を浴びせてしまったから仕方ないか。

顔が俯いていてよく見えないが、それでも綺麗なのはわかつた。髪をポニー テールにしているのも可愛らしい。

「あの私たちはどうなるのでしょうか？」

「悪いようにはしない」

それでも二人は、不安そうだった。

「ソフィア、マスター キーはあつたか？」

実は一応探してもらつていたんだが

「いいえありません。着飾るための衣装と宝石などがあるだけです。

「やはりないか。・・・しかたない神様のやつにもらった力を使つしかないか。」

「あの助けていただいてありがとうございました。ですが私たちは・

・・・

二人は、あきらめの表情を浮かべた。キーがなければ逃げることはできない、そんな二人に俺は、「一人とも立つてくれるか?」

「え」

「ほら早く」

「は、はい」

その姿勢だとちょっとあぶないな

「ちょっと前かがみになってくれる」

二人は、言われるがまま前かがみになる。

俺は、両手をあげ二人の鉄の首輪に手をあてて神様からもらつた力『**契約の無効化**』を使つた。

首輪が少し淡い光を放つたと思ったら。

ゴト

二人の首輪が落ちていた。

「え」

これには、ソフィアも驚いていた。

「驚いているところ悪いけど、どんどん行くよ、いいかい今から君たちは自由だ、そして俺たちと君達は対等だいいね。

ちなみに今の力は、『**契約の無効化**』って力で神様とか余程のやつと契約しない限り無効化できる。つまり君たちはもう奴隸ではないんだ」

徐々に状況が飲み込めてきたようだ。絶望の表情は消えその顔に希望が表れる。いいことだ。一人でなにか話しているとおもむろに。

「あのお願いがあります。」

「なんだい、聞けることならきくけど。」

「「私達をあなたの奴隸にしてください」」

「なぜそうなる」

「むう、覚悟はしていましたが、一日で一人旅が終わってしまいまいした。」

俺は、驚くといつより呆れていで。ソフィアはなんだか残念そうだった。

理由を聞いてみると奴隸から開放してくれた恩を返すために側に置いてほしいらしに。

ならばどうすれば側にいられるか考えた挙句出た言葉が「奴隸にしてください」だったのだ。

「それじゃあ意味がないじゃないか」

「そうなんですけど」

「それなら別の形で仕えればいいだけです。それにジン様もハーレムを作ると言つていたではありませんか」

さつきまで残念そうだったのになぜかソフィアが乗り気になついた。

(これまで夜の営みを満足させて差し上げることができます。)

なんて考えていたことにジンが気づくはずもない。ハーレムと聞いて二人は、頬を染めていた。エルフの少女なんかちょっと嬉しそう

だった。

結局エルフの少女はメイド、炎髪の少女は護衛として仕えることになった。

「じゃあよろしく俺は、ジン。聖痕使いだ。」

「ソフィアです。水の精霊術師です。」

エルフの少女は、恥ずかしそうに

「イリヤです。治癒術師です。その、未永く可愛がつて下さい」とんでもない事を言つてのけた。この子は絶対天然だな。

炎髪の少女は、くだけた感じで

「リリスよ、冒険者でギルドランクはB。これからもよろしくねジン、ソフィア」

こちらが素なのだろう、これはいい傾向だ。

二人には、衣装のなかで比較的に落ち着いた服に着替えてもらつた。ついでに宝石類を預いた。二人とも何か聞きたそうにしていたが。

「先に王都に向かおう、宿でいろいろ話すよ」

「そうしましょう」

「わかりました」

「了解」

聞いていたことだが一一日足らずで王都についてしまった。そのたつた二日の距離しかない村が盗賊に苦しんでいたことに俺は、驚いた。これが国民に対する扱いか王なら治安にも気を使うべきだろうに。だが反乱は難しいのだろう成功しても失敗して死ぬのは奴隸だ。まづ傷つくのは奴隸、この国ではそれが当たり前なのだ。

門はあつさり通れた。怪しいやつなどいちい取り締まらないのだるづ。

もう夕方なので、ソフィアが一度泊まったことのある宿屋を目指した。王都を眺めているとやはり裕福なところと貧しい者の差は激しい裏路地を見たときは、吐きそうになつた。

首輪の付いた死体がいくつか転がっていたのだ。俺は密かにこの国を滅ぼす決意を強くした。

もう他の物を眺めたりせずに前だけを見て歩いた。ソウイア達もつらそうにしていた。不謹慎ではあるがそのことに安堵してしまつていた。

宿屋に着くとソフィアが女将に、

「ダブルとツイン一部屋ずつお願ひします。」

「いやちょっと待てソフィア、まず三人部屋と一人部屋を聞くべきだろう。」

「三人でやるんですか」

「（何いつてんだこの子は）いや違うから」

「それにツインとダブルの方が安いんですよ」

後ろの一人は、何も言わないので、後ぶつちやけ女将の視線が痛い

蔑まれているわけではないのだがなんかニヤニヤしている。実はこのとき後ろでイリヤが何か言いたそうにしているのを見たからなのだが。

「わかつた、それでいい」

食堂で先に食事を済ませた後。部屋に行つた。ちなみにこの世界の通貨は、ギルだ。

金貨一枚	10000ギル
半金貨一枚	1000ギル
銀貨一枚	100ギル
半銀貨一枚	10ギル
銅貨一枚	1ギル

になる（半金貨、半銀貨は、混ぜ物があつて色が鈍いのだ）1ギル
＝約10円だ。

一部屋150×2ギル、宿泊客は一食30×4ギル　しめて420ギルの出費だ

それを盗賊のアジトから取つてきた銀貨4枚で払い半銀貨を一枚受け取つていた。

盗賊は周りの村を食い物にしていただけあってかなり溜め込んでいた。換金の必要のない貨幣を幾らか貰つてきていたのだ。

その額は1万ギル　なので残高9580ギルなり

割り当てられた部屋の、ダブルの方に集まり、イリヤとリリスに魔物の大侵攻と神様に頼まれたことについて話した。

ソフィアの時のようにいかなかつたが、ソフィアが室内なのに空から降ってきたことをはなしたり、『契約の無効化』を思い出して

もうつたり七つの聖痕を見せて一応の納得を得た。

嘘をつく必要性がないこととイリヤが聖痕について少し知っていたおかげだ。その上でついてくるかを聞くともちろん絶対について行くと言つてくれた。

「あのご主人様」

「・・・なぜにご主人様？」

「リリスが、メイドならそれが基本だと」

リリスが、二マ～としていた。まあ役得だからそのままで
「で、なんだっけ？」

「確かに聖痕は、徐々に力を溜めていくもので使用にインターバルがあるのですよね？」

「ああ、よく知っているな。でも今は光と闇以外は、ほぼ満タンだぞ。光と闇についてはまだ聖痕の発動ができないから溜めることができないんだが」

「それでジン様は、盗賊も奴隸商人も聖痕を使わずに倒していくのですね。」

ソフィアが納得していた。

「そゆこと、まあ聖痕のおまけみたいなもので精靈と仲いいからな、でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「聖痕保持者が殺されるときは、基本そのインターバルの間ですか
ら、ここにいる人だけでも知つておくべきかと思いまして。」

「やっぱりそうなのか、まあ俺は、素でも強いし聖痕も七つあるから大丈夫だと思うが、ありがとなイリヤ」

頭を撫でてやると嬉しそうに細めた目から涙がこぼれた。

「どうした？ 大丈夫か？」

震えた声でイリヤが

「はい、うれしくて本当なら私今頃誰かに買われてきつと今も奴隸で、でもご主人様に助けていただいてうれしくて怖かったのだろう、頭を抱きしめ頭を撫でてやる。

しばらくそうしていると、リリスとソフィアが、

「じゃあ今日はこの辺でお開きとゆうことで、『じゅつくじ』両人

「たくさん甘えてくださいねイリヤさん」

部屋を出て行ってしまった。

もう外は真っ暗になってしまった。

「ご主人様」

「落ち着いたか？」

「はいご主人様の腕の中とでも落ち着きます〜」

なんか言葉がとろけてきているな。頭を撫でていると顔を上げてきた近い。周りを見て

「あの、二人は？」

気付いていなかつたのか。

「ああもうひとつのお部屋にいったよ、『じゅつくじ』だと俯いたイリヤが顔を真っ赤にして

「・・・あのご主人様、・・・その・・お情けを・・ください」

詰まりながらもそういうってくれた。

「いいのか、俺はハーレムを作るつもりだぞ。」

「はい、ご主人様ならば当然です。私もそこに入れて同じように遊していくださればわたしは幸せです。それにもうソフィアさんは入っているのでしょうか、負けられません」

考えた時間は、ほんのわずかだった。

「わかった。イリヤ、俺の女になつてくれ。」

「はい、あなたの女にしてください」

「早速で悪いんだが・・・耳を触つてもいいか」

「ふえ・・・耳ですか、ど、どうぞ」

触つてみると不思議な感じがした、さわり心地は人間の耳とそこまで変わらない気がするのだがあきらかに耳の形がちがうのが面白かつた。

特に触つているとイリヤが

「あつ・ん・・んあ」

ちょっと喘ぐのだエルフで耳が気持ちいいのか、やるなイリヤ。そ

んなイリヤに我慢できずベットに押し倒して

「先に言っておく俺Sなんだ」

「ならば私がMになります。」

さすが天然のイリヤ、凄いセリフを平然と言つた。

俺は、イリヤと体を重ねた。

9話 宿屋の朝

異世界5日目

朝起きると隣でイリヤが裸で寝ていた。寝起きにイリヤの耳で少し遊んでからベットを出る。

自分が着替えた後、イリヤの体を布で綺麗に拭いていく。

「あ、おはようございます。」主人様。

イリヤが起きた。

「おはよう

俺はそのままイリヤの体を綺麗にする作業を続けた。

「あの、自分で・・・」

「いいから、させて」

黙つてしまつた。イリヤの顔が赤くなつていぐ。

・・・・・

「よし終わり」

「はっ、ありがとござりました。」

恥ずかしかつたのか急いで服をきている。
ちょつと意地悪をしたくなつた。

「これでイリヤの体で触れていない所はないな」

ピタッ

止まってしまった。可愛いやつである。頭を撫で

「一人を呼んでくるから、早く支度しろよ」

部屋を出ると

「うへへ『主人様のバカ』」

本当に可愛いやつである。

ちょっと時間を置いてからソフィアとリリスをつれて部屋に戻った。

「飯の前に少し話そう、大侵攻については昨日話したな、大侵攻を阻むのが一番の目標だが、それとは別に俺個人の目標もある。」

「『主人様の目標ですか？』

「そうだそれはだな。・・・この世界から奴隸と奴隸制度をなくすことだ」

「・・・ジン様、それはさすがに難しいと思います。」

「そうだよジン、奴隸を持っているのは、基本的に支配者側なんだよ。」

二人は否定的だが、イリヤは、

「『1』主人様、さすがです。『2』までもついていきます。」

とろん、としていた。

「まあ、これは決意表明みたいなものだ、一応手も考へてる。まだ不確定要素が多すぎるがなんとかなると思う。」

この言葉に、一人もなにか考え込んでいたが、何も言つて来なかつた。

俺は、話を変えて

「大侵攻を阻むための協力体制を取る国を探す必要があるんだが、どの国がいいと思う?」

「それはやっぱ『1』クイント皇国がいいと思うよ。あそこの王は、民に慕われているし。奴隸を禁止しているから、ジン的にもありだと思つ。」

冒険者のリリスが発言した。実際のところ村からあまり出ないソフィヤやエルフの里から出てきて日の浅いイリヤ達に比べリリスは世間についての情報を持つていた。これは正直助かった。

「じゃあクイント皇国と協力体制を取る方向で行こう。クイント皇国となるとさすがに遠いから、まずは金か」

「それならみんなも冒険者になろうよ、そうすれば情報も力もお金も手に入るからさ」

「情報とお金はわかるが力も手に入るのか?」

「うん、あ、そつかジンは知らないか。あのね冒険者登録するときに丸薬みたいなのを飲むんだ。

くわしくは、知らないけれどそれを飲むと体質が変わつて魔物を倒すと気力と魔力が少ししづつあがるんだよ。個人差はあるけどね。」

「へえ、便利なんだな。戦えばある程度は強くなれるのか」

それなら俺はまだまだ強くなれるかもしれない。

「まあ強さの上限にも、限りがあつて上限までいくとギルドカードの称号に『到達者』っていうのが出るんだよ。

さらになんと能力ランク5以上の人には、『超越者』っていう称号が出るんだ。『超越者』は、凄く少ないんだよ。後、精霊術より魔術が主流なのもそのせいだと思うよ」

またまたリリス。冒険者なのだから当たり前なのかもだがちょっと意外だ。

「ジンなんか今失礼なこと考えていない。」

するどいな。

「いや。それじゃあ装備とかいろいろ準備しなきゃいけないし。今日は、お買い物と冒険者登録ということでいいかなできれば依頼？クエスト？も受けたい。」

「そうと決まれば朝」はんにしましょう

「ちょっと待って、あともうひとつ聖痕についてはできるだけ伏せておいてまだ目立つわけにはいかないから、あと『契約の無効化』については絶対に喋っちゃダメ」

「『契約の無効化』もですか。」

「考えてもみて俺はあらゆる契約を無効化つまり無視できるんだ、それでは誰も怖くて契約できなくなるし悪用の仕方はいくらでもある。誰かが利用するために近づいてくるかもしれない。だからもしかれそうになつてもあくまで奴隸解放の能力ということにしておいで。」

実は、もうひとつあるのだがそれについては、今はいいだろ？

「…………」

三人とも呆けた顔をしている
俺まで困惑して。

「どうした？」

「いろいろ考へてゐるのですね、ますます惚れます。
「さすがご主人様です。尊敬します」
「ほえ～、ジンつてすごいね、普通は力を誇示したくなると思つん
だけど。人間ができるのかな？」

照れくさくなつたので

「よしこれで終わり飯に行くぞ」

先に食堂に向かつた。

朝食 $25 \times 4 = 100$ ギル

残高 9440 ギルなり

10話 登録とチーム名

朝食を終えた俺たちは、冒険者ギルドに向かっていた。俺は、道中リリスに質問していた。

「わつわいえば称号てのはどんなのがあるんだ」

「こりいろあるよー、ピンからキリまであつて、すいごのはやつぱり超越者かな」

「確かに到達者と超越者は条件があつたよな全部そつなのか？」

「大体はそつだね、でも中には神様の気まぐれで、ユニークなものもあるらじいよ」

神様の気まぐれ・・・嫌な予感がするな

「なあ、登録するときに称号つて係の人とかに見られるかな？」

「見られるはずだよ」

どうしちゃう

「何か困る称号ができるのですか？」

つと、ソフィアが聞いてくる。

「ちょっと神様を思い出したら不安になつたんだ、宿で言つたけどまだ田立ちたくないからな」

「はあ」

良くわからなかつたらしい。まあ仕方ないかソフィアたちはあの神様に会つたことないからなあ。あいつ神様のくせにいたずら好きなんだよ。

やつこひじりしている内に、俺達は冒険者ギルドに着いた。

王都の冒険者ギルドは、あまり大きくなない。この国に冒険者があまり来ないかららしい、この国に近づきたくないからだらつ。

中に入ると、一応人がいるにはいた。ガラが悪いチンピラみたいなのがたくさん。

チンピラみたいなのは、俺を見た後、後ろの三人を見たら一タニタと気持ち悪く笑つてこちらに近づいてきた。

「なあなあ、嬢ちゃん達そんなのといないで俺達のところに来いよ」と、腕を伸ばしてきた。動こうとしたリリスを止めて、俺がその腕を掴んだ

「悪いなこいつらは、俺の連れでね」

「野郎によつはねえんだよ。ひつこんでや」

俺は怒気を込めて

「これが最後だ。俺の女に触れるな」

一瞬怯んで何を思ったのかいきなり殴りかかってきた。

掴んだ腕に電気を流す。声も無く男が倒れた。

これだけで終わってしまった。周りは、なにが起ったのかわらないといった様子だった。

俺はそれらを無視して三人と奥に向かつ。

「やっぱりお強いのですね。『ご主人様は』
「はじめて見たけど、あつけなすぎるジンの実力がぜんぜんわか
んなかった。」

さりげなくリストがさつきの男を雑魚だと貶していた。
むかついていたのだろう。

奥のカウンターで受付嬢に

「冒険者の登録がしたいんだけど
「四名様ですか？」
あれ落ち着いてるな。まあいか
「いや、三人だ」
「では、こちらにどうぞ。」
別の部屋に通された。

「ずいぶん落ち着いているんだな」

「『』の国では隙は見せられませんから」

よく見ると彼女は、黒い髪を肩でそろえていて少し鋭い目に眼鏡をかけていて美人秘書といった感じだ。

「大変だな、俺はジンこつちは」

「ソフィアです。」

「イリヤです。」

「リリスだよ～。」

「始めてクレアと申します。」

「ずいぶんクールな人だな。」

「それではこちらに両手を置いてください。」

見ると部屋の中央に、腰の高さまである四角い石としか言い様のないものがあった。

石の上に両手を置いて十秒ほどしたら強く光りだした。正直眩しい。

「なんですかこれは、こんなに強く光るなんて。それに時間がかかりすぎ」

「さすが、ジンだね。」

何度か見たことがあるであろうふたりが驚いている。

石からカードと黒い丸薬みたいなものが光から出てきた。出てきた

カードは、光になつて体に入つてしまつた。残つた丸薬をもつて

「これで終わり？」

「うん終わりだよ。」

とリリスが答えた。クレアさんは、まだ呆けている。

その間に残りの二人の終わつてしまつた。やっぱり俺のときほど時間はかからなかつたし、光も弱かつた。

この時には、クレアさんも何とか落ち着いていた。

「それでは、その丸薬を飲み込んでください、飲み込んだらカードを見せてください。登録しますので、出し方は、念じれば出てきま

す。」

三人とも丸薬を飲み込んだ後、カードを出してみる。

「お、出た出た。」

「よし、みんなで見せっこしょ」

「そうだな」

まずソフィアか

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム なし

称号 水の巫女 精霊術師

「精霊術師ですか、珍しいですね。」

「へえ、ソフィアって巫女さんだったんだ。」

次はイリヤだ

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム なし

称号 ジンのメイド 治癒術師

「 」

次いこつか。

はい、リリス。

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム なし

称号 ジンの護衛 熟練者

「また変なのがある」

「あのクレアさんからでいいですか。」

「まあいいんですけど。」

名前 クレア 女 20歳 人間
ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

「それじゃあ真打といきますか。」

ソフィアが嬉しそうに言つ。クレアさんも興味があるようだ。顔が近い

「見せなきやダメだよな。」

「ダメですよ」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力D

チーム なし

称号

聖痕使い 精霊王の友人

救世主 三人の女の主

奴隸の解放者 精霊術師

「あ、あなたなんですか？神の使い？」

クレアさんを落ち着けるために魔物の大侵攻について話すことになつた。

「ということで、できれば内緒にしてほしいんだ。」

「わかりました。世界の危機です、わたしも協力を惜しみません。」

ギルドの職員で目の前でカードを出されでは、信じるしかなかつた

のだろうすんなり信じてくれた。

思わぬところでギルド内に協力者ができた。

「気を取り直して一応ギルドやカードのことを説明いたします。最初のギルドランクは、能力ランクから二つ下のものがつけられます。ランクは上位から、SSS - SS - S - A - B - C - D - E - F - G となります。依頼は、自分のランクよりひとつ上の物まで受けることができます。

成功が続けば昇格、失敗すれば降格です。昇格には、自分のランクより下の依頼をこなしてもあまり意味がありません。」

「つまり降格は、依頼のランクに関係なく失敗が続ければ落ちるということですか？」

「はい、そうです。丸薬のこととは知っていますか？」

「ああ、知ってる。」

「そうですか、あと、能力ランクは、あくまで氣力と魔力の平均なので、精霊術師の実力は関係ありません。なのでジンさんは、すぐにランクを上げていけると思いますよ。

最後にチームについてですね、依頼や探索は複数ですることが多いですし、チームに専門の依頼もあります。あとチームをつくればお金の貯金ができます。個人の貯金は、人数が多くてできないんです。

チームに関してはそんな感じですね、どうしますか、チームをつくりますか？」

「そんなに簡単に作れるのか？」

「ええ、チーム名をえ決まればすぐこでも」

「どうするか」

「ジン様が決めてください。私達は、ジン様の女なのですから」

「そうです。ご主人様」

「私もジンが決めていいと思つ。」

「それじゃあ」

しばらく考えて

「『世界を結ぶ者達』でどうだろつ。魔物の大侵攻には世界の人々の力が必要だ、そして俺達は国を種族を繋げなければいけない、だから『世界を結ぶ者達』」

どうだろつ、真剣に考えてみたのだが

「おお~、いいね、それ」

「そうですね。頑張りましょつ。」

「今このバラバラな世界を繋げる。これは、戦いの後の世界が楽しみですね。」

「すばらしく」と、思いますよ。

こうして俺達のチーム名が決まった。

1-1話 依頼とお買い物

チームの登録が終わるとクレアさんが

「依頼は受けられますか?」

「そうですね、みんなで受けられて、お金を稼げるそんな都合がいいのつてありますか?」

「ありますよ」

「・・・あるんですねか」

「これは、驚いた。

「チーム限定の依頼でランクが低くいけどもひとつひとつこの依頼があります。」

「どんな依頼ですか?」

普通なら疑つところだが俺はもうクレアさんを信用していた。

「討伐系の依頼で一週間以内に一定数以上の魔物を討伐する依頼です。成功報酬はそれほど高くないのですが、どの魔物をどれだけ倒したかで報酬が上乗せされます。」

「討伐すればしただけ報酬が貰えるのか、いいね。それでお願ひします。」

「では、皆さんのギルドカードに依頼をいれますね」
俺たちがカードを渡すとカウンターの石盤の上に置き何か操作していた。

「これで誰がどれだけ魔物を倒したかが分かります。ギルドカードを見てください。一番したに欄が増えますから。」

作業が終わり返してもらつた。

ギルドカードを見ると。一番したに

総合討伐数	000
ジン討伐数	000

内訳

と、いつた具合だ

「討伐指定地域は、オルムの森です。指定討伐数は300です。報酬に上乗せできるのは500なので上限は800ですね。」

「ありがと、次いでに何処かいい武具屋と宝石商を知らないか?」

「武具屋でしたら、ギルドを出て左側の三件先あるところがいいですよ、ギルドが近いので商売もまともですしギルドが懇意にしてるので、宝石商は武具屋の正面にあるお店をおすすめします。」

「ありがと。じゃあ皆行くつか」

「頑張ってくださいね」

「ついて俺たちがギルドを出た。

俺たちはまず宝石商で奴隸商人の馬車から取ってきた宝石や装飾品を売りはらった。

宝石と装飾品は三万、ギルになった。

そして今俺たちは、勧められた武具屋にいる。

「誰に何がいるんだっけ？」

「わたしはレイピアかな、前使っていたのもレイピアだったし

リリスは、すんなり答えたが、ソフィアとイリヤは黙つたままだ

「どうした? 一人とも」

「実は何がいるのか解らなくて」

「実はわたしも」

「じゃあ店主に聞いてみよつか

「じゃあ、わたしはあつちでレイピアをがすね」

「ああ、頼む」

リリスは剣が並ぶ場所にいった。

「じゃあ、一人とも行こうか」

奥に行くと浴槽のここおじさんがあが話しかけてきた。

「こりゃしゃいます。私はこの店の店主のドルトンと申します、何かお探しですか？」

「ええ精霊術師と治癒術師で使えそうなものってありますか？」

「ふむ、精霊術師のかたは、どの精霊をお使いになるのですかな？」

「水の精霊です。」

「それでしたら」

ドルトンは、奥から小さな箱を持ってきて中を見せてくれた。それは青い石のような物のついた石の光る綺麗な指輪だった。

「こりゃしゃいてこる石は、水の石といいまして魔力を込めるときの精霊が集まりやすくなるものです。以前は、そのまま水の指輪といいます。」

「試しても？」

「どうぞどうぞ」

ソフィアに持たせてみる。するとじばりくしていつも以上に精靈が集まってきた。

これは、アリだな。

「これはいくらですか？」

「精靈術師は少ないので、需要は少ないのでですが、水の石が貴重でして。8000ギルになります。」

「買います。」

「え、よろしいのですかそんな大金」

「装備をケチつてソフィアが怪我したら大変だろ、だからいいの。」

「ありがとうございます。（やつた、ジン様から指輪をいただけるなんて）」

「いいなあ、ソフィアさん」

イリヤが羨ましそうにしている。

それを見たドルトンが、気を利かせたのかおもしろそうに

「治癒術師の方は、こちらなどいかがでしょうか？」

別の箱を取り出した。こちらも指輪だ。こちらは、石は無く少し幅広で複雑な文様が描かれている。こちらも水の指輪に劣らず、綺麗な指輪だった。

「これは単純な、治癒魔術を含む魔術の補助ですね。その中でも治癒術を意識して作られたものです。ヒーリング・リングといいます。」

「

イリヤが田を輝かせていた。ソフィアは、少しうつだれていたが。
イリヤがおそるおそる

「あの、おこくらですか?」

「そのこからは、治癒術を意識しているのと、装飾品もかねてあります
まして10000ギルとなります。」

「うう、高いです。」

イリヤが落ち込んでしまった。

「イリヤ大丈夫だから」

と頭を撫でる。撫でていると

「どうしたの?」

リリアが戻ってきた。

「ちょっとな、それより決まった?。」

「うん、ちょっと高いんだけど。」

そして、レイピアを出してきた。

「わたしスピードタイプだから。強度補強と軽量化の魔法がかけら
れてるこれを選んだんだけどね。値段がね、その、」

リリストが、言いづらそうに

「4000ギルなんだ」

少なくとも二人よりは安い。

ああ、ふたりが落ち込んでしまった。

「あーえーと、後俺だな。刀はあるか?」

「刀ですか、内にあるのは、これくらいしか。」

刀の入った箱を持ってきて中から一本取り出した。あまりいい物ではない。ドルトンもそれはわかっているのだろうバツがわるそうだ。箱を見るともう一本小太刀があつた。俺は妙に気になつて

「それは?」

「ああこれですか。これは不良品として抜けないので。」

「見せてもらいますか」

「どうぞ」

持つて抜いてみると、簡単に抜けた、すると突然、

「【初めてまして、我が主、わたしは『鉄餓刀』（てつがとう）と申します。テツとお呼びください。】」

小太刀が喋りだした。みんなにも聞こえているのだろうみんな驚い

ている。しかし土の精霊術師でもある俺は、落ち着いていた。これは、土の精霊に似ている。

「よろしく俺はジン、誰にも抜けなかつたらしいんだが?」

「【私は、土の精霊使いでないとぬけません。私の製作者が土の聖痕保持者でしたので。】」

「それでか。それでテツおまえは何ができるんだ?」

「【刀は切るものです。あえて言つなら金屬等を吸収して成長することができますね。】」

「よし買つた。店主】こつは、いくらだ?」

「きみすごいね。土の精霊術師なのかな?勉強になつたよ。凄そうだけど他人には卖れないし1000ギルでいいよ。」

「これからよろしくなテツ」

「【はい、よろしくお願ひします主】」

全部で23000ギルか・・・

「なあ、鎧以外に体を守れるものつてあるか?」

「それでしたら、防御の護符などいかがでしょう。魔力を通すだけで体の周りに障壁を張ってくれます。強度を魔力に左右されてしまうのが難点ですが。」

「それはいくつだ。」

「ひとつ1000ギルになります。」

「よし四つ買おう、全部で27000か」

「いえいえこれだけの金額を買っていただけるのです。珍しい物も見れましたしサービスで25000ギルドどうしよう。」

「ありがたい。それで頼む」

お金払い各自自分の武器と護符を持って出口に向かう

「毎度ありがとうございます。またのじに来店をお待ちしております。」

「

$$9440 + 300000 - 25000 = 14440$$

その後も、イリヤとリリスの服や食料などこれから必要な物を集め940ギルになつた。

残金 13500ギル

異世界6日目

・リリスサイド・

私は、今イリヤと魔物退治をしてる。

最初はみんなで森に入ったのだが、この森のランクはEランクつまりFランクの冒険者まで入ることができる。

Bランクの私やジンにとって少々退屈だったのだ。総合で50匹ほど狩ったところでジンが（一週間で300なので単純にノルマは終わっている）

「ソフィアの修行をやめないと悪いんだ」

という話になり

なので効率を上げるために一手に分かれたのだ。

ジンがソフィアの修行をするため、イリヤと私が組むのは必然だろう。

イリヤと知り合ったのは、奴隸時代に奴隸される際に負わされた怪我を、こつそり治してもらったのがきっかけで友達になった。（奴隸には、自害以外のことを命令でき禁止もできるが、イリヤは治療行為を禁止されていなかった）

奴隸の間、わたしは友達として不安に潰れそうなイリヤを支えることはできたと思う。でもその不安を取り除くことは出来なかつた。

それを簡単に取り除いてくれたのがジンだった。イリヤにヒツヒジンが特別になるのに時間はかからなかつた。

そして私も奴隸の身から救つてもらつた恩がある。好きではある、あるが、イリヤやソフィアと同じなのか自信がない。小さい頃から冒険者をしていて忙しかつたし、同じ場所にいる事がなく恋愛などしたことがない。初恋もまだと思つ。ジンは、ハ、ハーレムを作るつて言つていたし時間はあるだろうから。

わからないことはわからなこのでわかるまで放置する」とこした。

「イリヤ残念だつたね、ジンと一緒にいられなくて」

「うん、ちょっとね」

少し沈んでいる。

わかれの時は、平氣そだつたのにやつぱりジンの側が一番安心できるのだろう。励ますために

「それじゃあたくさん魔物狩つてジンにほめてもらおうよ」

「そうだね、頑張つたら。頭撫でてくれるかな」

イリヤが赤くなつてゐる。イリヤは、ジンが絡むと頭が桃色になるなあ。いや天然なだけかな。

私達は、それからも順調に狩りを行つた。気付くとずいぶん奥に来てしまつた。

そろそろ戻りうかと思つていた時に私達はそれに出くわした。

それは、サイのような形をしていた魔物で、だが角は太く長さ二丈たつては、2メートルぐらいある。

皮膚は、黒い鉱物の様なもので出来ていてとてもスピードタイプの

わたしやイリヤの攻撃魔法が効くとは思えない。

名前はノワールサイ、サイ型の堅さが売りのAランクの魔物だ。
(何でこんなところに上級の魔物がいるのよ)

心中で嘆いていると、ノワールサイが突っ込んできた。

ヤバい

私はイリヤを抱えて右に跳んだ。ノワールサイは、私達がいた後ろの木を、

三本ほどへし折った。

「デタラメな突進力だ。ジンには悪いがこの突進に護符はあまり意味がないだろう。なので呆けているイリヤに

「イリヤー！ きた道を戻ってジンを呼んで来て」

声が大きくなってしまった。

「リリスはどうするの？」

声が震えている。怖いのだらう当たり前だ今のを見たのだから。それでもこちらを気遣うイリヤに

「私は、あいつを引き付ける。大丈夫ノワールサイの動きは、単調だから時間稼ぎくらいはできるから」

これは事実だが逃げられる保証はない。ノワールサイに障害物は、関係ないのだから

「わかった。待つて絶対にご主人様を連れてくるから」

そう言つてイリヤは走り出した。

「それじゃあ張り切つていきましょうか。」

私は、引きつけるために無駄と知りながら切りかかる

あれからずいぶんたつた。突進を防御せずにすべて回避する。回避しながら考える。

正直イリヤがジンを連れてくるのは、難しいだらうこの森は広いし、木で視界も悪いイリヤの体力も心配だ。だけど諦めた訳ではない、こいつの視界を奪えればスピードタイプの私は、逃げられるはずだ。こいつの動きも大体覚えた。

眼を潰してからの逃走

これしかない。決めたら回避しながら時を待つだけだ。

それから何度も目の突進でノワールサイは、苛立っているのか無理な停止をした。

いい位置だ一步で突ける。

(二二二なら)

私はレイピアを突き出す。

ガキン

ノワールサイは首を下げてレイピアに角を当ってきた。レイピアは弾かれ体勢を崩してしまつ。しまつたこのノワールサイ、自分の弱

点を知つてゐる。ノワールサイが体当たりをしてきた。

ヤバい

助走がなかつたので、私は回避とレイピアと護符で何とか受け流すことができたが。しかし、今度こそ完全に体勢を崩されて転倒してしまいすぐには動けない。

ノワールサイが再度突っ込んで来る。

(避けられない、死ぬ、ジン助けて)
眼を閉じてしまう。

・・・・・いつまでも衝撃は襲つて来ない。
代わりに、心地良い風と暖かい体温を感じる、その体温が戦いで疲れ冷えた体を温めてくれる。

眼をあけると私はジンに、お姫様抱っこされていた。

(タイミング良すぎだよ、ジン)

「ジン！」

ジンに抱っこされたまま首に抱きついて頬にキスをした。

私は、初めて恋をした。

13話 魔物討伐

話は一歩に別れる前まで戻る。

しかし、この辺の魔物は弱いな。ほとんどの魔物が、動物が少し強くなつた程度のもので護符があれば死にそうにない。危険がないのはいいことなどだが。

俺は、狼に似たハイ・ウルフを、鉄餓刀で切り裂きながら。鉄餓刀に話しかける。

「なんかお前普通だな。」

「【今の私は、主に抜かれたばかり初期性能です】」

「前の所有者のときには成長しなかつたのか？」

「【いいえ、ただ主が移った時に初期化されてしまつのです】」

「そらまた、面倒な機能をつけたもんだ。」

「【こいえ、そとも言えません。前ままでとあまりに癖が強すぎますし、成長にもいろいろあるので主の好きなよつて育めてください。】」

好きなよつて

「具体的にどうすればいいんだ？」

【金属等を吸收させる時に、私を持って意識を集中してくだされば、勝手に好みに成長いたしますよ。成長を続ければ隠し機能もあります】

「それはそれは、楽しみにしていよう。」

いつたん会話をやめてギルドカードを見る。

総合討伐数	050
ジン討伐数	019
内訳	
ハイウルフ	10
グリーングリズリー	2
ラビットドン	7

50か、ソフィアのほうを見る。指輪の力は使っているのだが、攻撃が不得手らしいのだ。まだ、一体も倒せていない。ノルマは終わつたしソフィアの修行でもするか

「どうりよつときてくれ」

三人に側に来てもらつ。

「どうしました？」

「ソフィアの修行をやめつと思つんだ」

「何故ですか？」

「私やっぱり弱いですか？一体も倒せていませんし」

イリヤは不思議そうにしていた。ソフィアは泣きそつとなってしまった。

「いやそうじゃなくて、ソフィアって攻撃が苦手みたいだからその指導をしようかと思ってな、これから先自衛は出来たほうがいいだろうしな」

この言葉にソフィアも納得してくれて、泣き止んでくれた。

「たしかにそうですね。それでは」指導お願いします。」

「それでは私達は、どうしましょう?」

「二人には悪いけど、このまま狩りを続けてほしい。討伐数がものをいう依頼だからね。」

イリヤは、一応攻撃魔術が使えるので今は、大丈夫だらう。

「わかりました。」

「了解」

二人と別れソフィアの修行が始まった。

いくつか術を見せてもらつたが制御はうまいし精霊の力も申し分ない。となると、ただ攻撃用のイメージが持てないのでどうそれなら見せるのが手つ取り早い。

「ソフィア今から俺がいくつか攻撃用の術を見せるからそれをヒントにして。」

「はい。勉強させてもらいます

ソフィアが意気込んでいる。

見せたのは、圧縮して撃つ『水撃』と圧縮した水でものを切る『斬水』この二つだけこれから自分の形を見つけてくれるといいのだが。精霊術には決まった形がない、なので自分で形を作ったほうが力を発揮できるのだ。

練習を重ね『水撃』に近い物でハイウルフを倒せるようになつたころ。

探査用の風の精霊がイリヤの声を拾つてきた。イリヤはなにか焦つているようだ。

「ソフィア今日は、ここまでにしよつ」

「はあ、はあ、わかりました。」

しまつたやらせすぎたか。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。早く足を引つ張らないようになりたいですから。」

別にソフィアも集団戦なら問題はないのだが、今はイリヤのほうだ、リリスの声が聞こえないのも気になる。

「ソフィア悪いけどひいてきて、何かあったのかも」

「何かつて何ですか？」

「まだわからん、急ぐぞ」

俺は、駆け出す。迷わず森の奥に進みすぐご主人様を見つけた。

「大丈夫か？」

「い）主人様、・・・あの、はあはあ、その」

息切れしているし、えらい慌てようだ。

「落ち着け、なにがあつた。リリスは？」

そこでソフィアも追いついてくる。

「ノワールサイに襲われて、今リリスが引きつけてくれてご主人様を呼んできてる」

俺は、ソフィアに聞いてみた。

「やばいのか？」

ソフィアの顔も強張っていた。

「ノワールサイは、Aランクの魔物です。単純な意味でBランクのリリスさんでは勝てない可能性が高いと思います。」

くそ、俺のせいだ一日目から「手に分かれるんじゃなかつた。」こういう依頼は、なにが起こるかわからないものなのに。

「すぐに行く。一人はここで待つて

「どうやって行くのですか？」

道案内のことだらう。しかし、それには取り合わす。使う覚悟を、決める。

「聖痕を使つ

俺は、リリスのためにこの世界ではじめて聖痕を使つ」と決めた。

風の聖痕を発動

「聖痕発動『嵐帝』」

俺の、周りを風が包む傍目には風の衣を着ていふように見える。発動と同時に俺の視界と感覚が広がつていく。

見つけた。

『嵐帝』状態の俺は、このオルムの森をすべてを見通すほどの探索範囲を持つリリスを見つけるのにかった時間は、一秒ほどだ。呆然とする一人に

「ちよつと行つてくれる。『疾風』」

俺は、ものすごい速さで走り出した。覚えたばかりの氣を使い脚力をあげ、『疾風』で空気抵抗をなくし追い風を起こす、邪魔な木や魔物を風で吹き飛ばしながらリリスの場所に向かう。

二人の目からはすぐに見えなくなってしまった。

「あれが、ジン様の聖痕の発動」

「ご主人様の、本気」

二人は、自分達の近くにラビットドンが来るまで呆然と突っ立っていた。

見えた。

黒いサイの前からリリスを搔つ攫い嵐帝を解く。

リリスが突進を受ける寸前に、助けられた。

ギリギリだった。よかつた本当によかつた。後少し遅れたもうリリスに会えなかつたかもしれない。この世界ではじめて死を身近なものに感じた。

目を閉じているリリスの身体は、長時間の間、回避のみの体力より精神面の戦いだったからか、とても冷えている。

リリスが目を開けると、目を潤ませて

「ジンー！」

抱きついてきて頬にキスされた。

この状況でキスされたことに驚きながらも俺は嬉しくなった。特別になれた気がしたから。

「リリス、大丈夫？」

「うん、平気ジンが助けてくれたから。」

「じゃあちょっと待つてあれ片付けてくる。」

そういうて側に降ろす

リリスは残念そうにしながらも腕を離してくれた

「うん、待ってるね」

リリスが信頼の眼差しを向けてくるな
か律儀に待っていた、ノワールサイの前に行
き。

「おい黒いの。俺は、俺の大切な女を傷つけるやつを許さない。ち
ょっと残酷な死に方をしてもらつぞ」

次の瞬間ノワールサイが突っ込んで来る。俺は、右足を上げ地面に
落とす。

「『五重・土壁』」

俺とノワールサイの間に5枚の土壁が地中からせりだす。ノワール
サイはそのまま突っ込み土壁を粉碎するが4枚目で突進が止まった。

今度は両手を地面置いて

「『落とし土牢』」

ノワールサイの地面が陥没し円柱状に穴が開き、ノワールサイが落ちこちる。ノワールサイは、狭くて身動きがとれず這い出ることができない。

そこでリリスが近づいてくる。

「もう終わったのさすがだねジン。」

「いいや、まだだよ。言つたろ残酷な死に方をしてもらひつて

「な、何するの？」

「いわす、『炎蛇・六首』」

炎蛇を一分ごとに一匹ずつ穴に順次投入し長時間熱する。皮膚のおかげで燃えることはないが、熱は感じるだろう。生き物なんだから当たり前だ。

つまり俺は、ノワールサイを生きたまま焼き殺したのだ。

ノワールサイは身動きも息も叫ぶことも出来ず悶えながら死んだ。

「ジンす」「大好き」

リリスとしては、自分の好きな人が自分のことで怒ってくれたのが嬉しいらしく、抱きついてきた。俺も失ったかもしれない女の子を大事に抱き締めた。

しばらくした後、キスをして離れる。

「二人のところに戻るか」

「ちょっと待つて。あれ冷やしてくれないかな？」

リリスが、ノワールサイを指す。俺は怪訝を思いながら水を出して冷やす。

穴に降りてリリスが近づき

「『採取』」

光がノワールサイの身体を包みこむ。するとノワールサイの角が根元で折れたり体から黒い鉱石が出てきた。

「この魔法で素材とか貴重な部分を取れるんだよ。まあランクB以上の魔物じゃないと碌な素材が無いから最初はいらないんだけど。Bランク以上の冒険者では、わりと必須なんだよこの魔法。」

そういうながら角を冒険者用の袋に入れる。この袋は、入れた物を自動で圧縮してくれる優れものだ。リリスのレイピアと同じ軽量化の魔法もかけられている。

次に黒い鉱石も入れていった。

「今度こそ行こうか」

と声をかけるとリリスは近づいて来て、腕を絡ませてきた。今まで一番いい笑顔で、

「そうだね。行こ」

そのまま俺達は来た道を戻った。

14話 三人の思い（前書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願ひします。

14話　三人の思い

戻った俺達を迎えたのは、温かい目線で俺とリリスを見る一人の姿だった。

「どうしたんだ、二人とも？」

「いえ、やつぱりこうなりましたか。」

「ジン様が助けに行つたのです。リリスが惚れても仕方ありません。」

「そのことが、まあ俺は、前から俺の女発言しているしな。リリスを見ると。」

俺の背中に隠れて顔を真っ赤にしてもじもじしていた。なにこれかわいい。

「今日は、譲りましょう」

「今日だけですよ、リリス」

リリスが小さく返事をした。

「うん」

今このテントには俺とリリスが向き合つて座つている。

リリスが髪と同じくらい真っ赤な顔で一生懸命に

「あの、ジンお願い、抱いて」

俺は無言でリリスの手を持つて引き寄せ、キスをする。俺は、長いキスの後リリスのすべてを征服していった。

リリスは、冒険者なだけあって体力がありすべての行為を受け入れてくれた。

異世界フ田目

横で裸のリリスが寝ている。起こさないよつとその場を出る

今日で依頼一日目か、と思いながら鞘からテツを取り出します。取り出した小太刀に

「そりいえばお前、金属とかを吸収するんだよな。」

「【そりですよ、主】」

「これなんかどうなんだ?」

昨日手に入つた、ノワールサイの鉱石をテツの近くに置く。

「【これはノワール鉱石ですね。かなり良い物ですね、吸収しても
よろしいのですか?】」

「ああ、かまわない」

「【それでしたら私をノワール鉱石の上に乗せてください】」

「いいのか?」

テツを、ノワール鉱石の上に置く。すると、鉱石が光だし粒子になつてゆつくり吸収されていった。

鉱石がなくなると、今度は、テツが光だし光が消えるとテツの刀身が綺麗な黒色になつっていた。

「へえ綺麗だな。」

「【ありがとうございます。】」

なんか、うれしそうだな。

「【切れ味も良くなっていますよ。昨日の魔物を切れりへりこむ】

「

それは、何気に凄いのではないか?聞いてみると

「【それだけ良質だったのです。倒し方も良かつたのでしょうか】」

「ああ、丸焼きだったもんなあ。たしかに傷なんかもなかつただろうな。」

「あとは、問題がひとつある。これを解決するために討伐に出る前に一度皆にあつまつてもらひた。」

「実は、これから討伐に問題がでてな」

「問題ですか？それはどのようだ？」

「聖痕を使ったときに見つけたんだが。ノワールサイが、奥のほうにまだいるんだ。」

「『えええー！』」

「だから、俺が先行して倒すから皆にはこいつら辺の魔物を討伐してほしい」

「わかりました、けど、大丈夫なんですか？ Aランクなんですよね。」

「

心配そうにソフィアが聞いてくるそれに

「大丈夫だよジンなら、私を助けてくれた時も余裕そудつたし。」

「自慢げにリリスが答えた。

「そうゆうことじやあ行つて来るね。と、その前にリリス『採取』の魔法教えてくれる」

「いいよ」

『採取』を教えてもらつた俺は、一人森の奥に向かつた。

・イリヤサイド・

ご主人様は、森の奥に行つてしましました。私達は、この辺りの魔物の討伐を任せられました。

今日もご主人様とあまり一緒にいられないのが残念です。

それにしてもあの聖痕の発動『嵐帝』といいましたか、あれは凄かつたです。精霊術師ではない私にも精霊の存在がわかるほどの精霊が集まつていたのです。

その後の探知も数秒で終わりました。後で聞いたら、風の精霊は探知が得意で、雷の精霊の次に早いそうです。

その力で救われた、リリスは、帰つてきたときすでにご主人様のことが好きになつていよいよつでした。それにすごく可愛くなつていました。

このあたりの魔物を粗方片付けたころ、お昼になつていきました。ソフィアさんが

「そろそろお昼にしませんか？このあたりにはもうあまり魔物はないようですし。」

「の方は、ソフィアさん」主人様のこの世界に来たときから行動と共にしているそうです。羨ましいです。

「そうだね、ジンもまだかかるだらうし」

こちらはリリス、私の友達です。奴隸にされていたときにできた友達でいろいろ相談に乗ってもらいました。ご主人様という呼び方も彼女に教えてもらいました。

私もお腹がすいてきていたので

「私も賛成です。」

三人一致で昼食となりました。周りの良く見える場所に移動して、携帯飲料や果物やパンなど簡単な物を食べています。

実は、このパーティー料理の得意な人がいなかつたのです。ご主人様が一番まともではありましたが、簡単なものしか作れないしこの世界の食材に詳しくないと言つっていました。

いつかは、改善したいです。

「リリスさん、昨日はどうでした？」

いきなりソフィアさんが爆弾を投下しました。

「ど、どうしてなにが」

「夜の営みです。」

「えと、その、ねえ」

リリスはこの方面は、ウブですねえ。

「勘弁してください。」

リリスは、何気に一番ウブだと思います。

そういえば、

「そういえば」いつかって三人で話すのって初めてですね。」

「そうですね。いつもジン様がいましたから。」

「やうだよね、私達の中心って間違いなくジンだしね。」

「あつ」

ソフィアさんがなにか思い出したようです。大事なことなんか真剣な表情で教えてくれました。

「ジン様もいないです、伝えたいことがあります。これは、ジン様がこちらに来たばかりのことなのですが。

ジン様が、（ありがとうソフィアついてくると言つてくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだつたんだよな）といつていたことがあるのであります。」

「それって」

「『主人様』

声に、悲しみが混じります。

それは、どれほどの孤独なんだろう。わたしは『主人様の強さに田を奪われて、私はそのことに気づけませんでした。

「当たり前んですけど、この世界にジン様が来たとき、縁のある人は一人もいませんでした。

ですから、仲間であり私と同じでジン様が大好きなあなた達に話したのです。そしてこれからも一緒にジン様を支えていきたいのです。お強いジン様の孤独を埋め、支えるのは一人では無理ですから」

「そうですね。もつと力をつけて役に立たないといけませんね。その点リリスはいいですよねえ、冒険者の知識を持っているから『主人様のお役に立て』

「でもあたし冒険者なのに戦闘では役に立てなかつたし、イリヤは治癒術があるじゃない」

「『主人様は怪我しませんし、してほしくもありません』

「私も攻撃の術がまだいまいちで。」

・・・

「　　はあ　　」

みんなでため息をついてしまいました。

「でも好きな人のためです。がんばりましょ。」

「そうだね」

「その点は、ここにいる人は大丈夫でしょう」

私達は、決意と結束を強い物にしてご主人様のため何ができるかを考えます。

日が沈む少し前にご主人様が帰つてきました。私達は三人ともご主人様のもとに走つて向かれいます。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お疲れ様です。ジン様」

「おつかれ」

「ただいま、みんな」

ご主人様は最初驚いていましたが、すぐにうれしそうに笑つてくれました。

ご主人様ずっとお側にいますよ。

経過報告としては、昨日より順調に進んでいます。内容としては

1日目 072

2日目	242
内 ジン	105
ソフィア	028
イリヤ	036

リリス 073

「これなら一週間より、はやく終わりそうですね。」

「ご主人様、あしたも頑張りましょう。」

14話　三人の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

15話 討伐報酬と幼い龍

異世界1-1日目

「お帰りなさいませジンさん。ご無事で何よりです
俺達は、5日で依頼を終え6日田には王都に戻りそのまま、ギルドに
来ていた。

「クレアさんお久しぶりです。これが討伐数です。」

そう言って俺は、ギルドカードを見せる。
クレアさんが俺のカードを、受け取りながら二人に。

「他の皆さんのも見せてもらつてよろしいでしょうか、内訳が計算
に必要なので。」

三人も渡す。クレアさんが内訳を読みはじめた

「え」とノワールサイが、さん、た、い?」

「どうかしました? クレアさん」

「あの、欄にAランクの魔物があるのでが」

「ええ、倒しましたよ。あ、リリスに聞いたんですけど、素材つて
ここで買い取つてもらえるんですね。」

「え、ええ、はいそうです。能力ランクCでAランクの魔物を倒し

ますか、さすが聖痕保持者ですね。・・・ちょっと待っていてください。」

奥に戻り、貴禄はあるが少し疲れていそうな中年の男性が連れて戻ってきた。

「君がAランクの魔物を倒したのかい？」

少し不審そうにしている、仕方ないがちょっとムカつくな。なので証拠を出す

「ええこれがノワールサイの素材です。」

角とノワール鉱石を取り出す。

「こちらの方が例の聖痕保持者です。」

「・・・聖痕を見せてもらつてもいいかな?」

クレアさんが話しているのなら仕方ないか。

「どうぞ」

左腕の聖痕を見せる。

「先程は失礼しました。ギルドマスターのガルダと申します。突然ですが特例であなた達のランクを上げたいと思うのですがよろしいでしょうか、クレアの推薦でして。」

「はい? いいんですか?」

「ええ実力がある人に、依頼をどんどんやつてもうつたためにたまにありますよ。受けいただけますか？」

「まあランクが上がるのにはありがたいから構わないが」

「それでは、Aランクを倒した、ジンくんはEランクからBランクに、イリヤさんとソフィアさんはEランクからDランクに上げたいと思います。」

「こきなりBですか、よろしいので？」

「ええそれだけ期待しているのです。それでは、わたしはこれで仕事がありますので」

奥に戻つていつてしまつた。すぐに行つてしまつたな忙しいのか？思わぬ形で昇格してしまつたな。

「それでは、報酬についてですねちょっと待つてください」

討伐した内訳は

総合討伐数	812
内訳	
ノワールサイ	003
ハイウルフ	332
グリーングリ	
ズリー	101
ラビットドン	296
バインドスネーク	0
80	
となつて	いる。

上乗せ報酬は

Aランク = 金貨一枚

Bランク = 半金貨一枚

Cランク = 銀貨一枚

Dランク = 半銀貨五枚

Eランク = 半銀貨一枚

Fランク = 銅貨一枚

Gランクの魔物はいないらしい

「上乗せ報酬としては、Aランクが3、Dランクが181、Eランクが628なので。超過の12体を除いて金貨三枚と半銀貨152枚分なので総額45210ギルになります。」

「　　「おお」　」

「お金持ちです。」

「一週間で45000ギル、冒険者つて儲かるんですね。」

「いやいや本来Eランクの報酬じゃないからねこれ、普通なら10000ギル前後ってところだよ。」

リリストが二人の間違いを正している。
それを横目に

「素材の方はどうなりますか?」

「ちょっと待ってください、ええと、ノワールサイの角700ギル、ノワール鉱石ひとつ250ギルいくつ売りますか?。」

「?ほかにも使い道が?」

「ありますよ、鍛冶屋で加工したり需要の高いところで売ったりですね。」

角は3本、鉱石は1~4個ある（ひとつめすでに消費してこむ）
一応少し残すか

「じゃあ角を一つと鉱石を12個売ります。」

「はい、ありがとうございます。4400ギルになります。」

合計49610を受け取り

$$13500 + 49610 = 63110$$

持ち金63110ギル

「クレアさんこの辺りで一番いい鉱石って何ですか？」

「鉱石ですか？」

「金属ならなんでもいいですよ」

「それなら龍輝石がありますが、これは入手困難なんですね。」

「なぜですか？」

「昔はよかつたんですが、今は龍の縄張りなのです。」

いるのか龍が

「龍つてやつぱり強いの？」

「種類にもよりますが上の方は最強種に選ばれるほどです、知能も高く言葉も扱います。」

「ぜひ見てみたい会ってみたい。

それに協力を取り付けられれば大きな戦力になる。決めた

「それってどの変ですか？」

「・・・行くのですか？」

クレアとしては心配なのだろうつ

「行く」

「あなた達はいいの？」

クレアさんは後ろの三人を見る。

「どこまでもついていきます。」

「ご主人様の望むままに」

「右に同じ」

クレアさんがしぶしぶ。

「わかりました。教えますよ、龍のいる場所はノーバル山です。」

「ただしあそこは龍がいるのでBランク以上の人しか入れません。」

「ええ～」

「やつた」

リリスが喜んでるが

「リリスは、王都に残って長旅の準備をしてほしいんだ。」

「ええ～」

三人には駄々をこねられたが何とか説得した。ベットの中で。

そういうわけで一人で山の頂上を目指しているのだ。ここに来るのに一日かかった。

ここは、龍がいること意外はいたつて普通のこところで。龍がいないこのノーバル山は、Dランクの冒険者が入れる山だつた。だから、強い魔物はいらないはずなのだ、はずなのだ。

少し先で小型の龍とBランクの牛鬼三体が戦闘していた。いやどうらかというと牛鬼が小型の龍を襲つていいようだ。

どうするか迷つている間に牛鬼の持つ棍棒が龍を襲い直撃を受け倒れてしまった。

(悩むのはやめだ)
まず助ける。それからだ

決めたら即行動、駆けると同時に龍に止めをさそうとする牛鬼の顔に炎球を叩きつけ一番近い牛鬼の首を後ろから鉄餓刀で切り飛ばす。

あと一匹、こちらから手を出さなかつた牛鬼がここで状況を理解したらしく棍棒を振り下ろしてくる。これの攻撃に対し、右の鉄餓刀で受け流しながら風を纏つた左手で喉を貫く。首に穴の開いた牛鬼は、血を吐きながら後ろに倒れる。

あと一匹、最初に炎を顔にぶつけた牛鬼は、仲間が倒されたことで逃げようと背を向ける。その背を見ながら左手を空に掲げる

「『落雷』」

上空に集めていた雷の精靈で牛鬼に雷を落す。

『落雷』を受けた牛鬼は黒焦げになり絶命する。

ひとまず片付いたな。

龍の状態を確認しようと、後ろを向くと女の子になっていた。

「・・・何故に?」

「氣を失っている女の子が答えてくれるはずも無く、疑問はなくならないが。

「まあまあ安全なところに移すかね」

近づくと顔が見えた。文句無しの美少女だ。驚くほど綺麗で長い銀髪だ。年は10歳くらいに見えるが龍であるなら見た目はあてにならぬのかわからない。

少女が横になれる場所を作りそこに寝かせ、精靈術で結界を作る。荷物の中で一番回復効果のあるポーションを少しづつ飲ませる。

俺にはこれ以上のことができない、駄目だなあ俺。

夜通し看病を続けいつの間にか寝ていた。

異世界14日目

座つたまま眠つていたらしい、田が覚めると少女は先に起きていた。どうすればいいのかわからないつとついた感じだ。昨日のこと思い出し、こちらから話しかける

「おはよう、体大丈夫？」

「は、はい。大丈夫みたいです。」

答えてくれた。さてどうしたもんか。

「良かつたよ、ポーションが効いたんだね。龍に効くか心配だったんだ。」

「あの、ありがとうございます。わたしは、ティリエルと申します。

」

「そんなにかたくないでいいよ。俺はジン、冒険者だ。」

「あの、何で助けてくれたのですか？それにこんなに親切に」

「うーん、何故と聞かれても特に理由は無いんだよなあ。牛鬼がムカついたからかな？親切にしたのは、君が可愛かったからかな」

「な、なな、なんです。いきなり」

真っ赤になつて慌てている。初々しい反応だ。

「こや俺は、君の問い合わせただけなんだけど」

「むう、変な人です。それだけで助けるなんて」

「こやこや、美少女は貴重だよ、宝だよ」

「も、もひこいです。それでなにかお礼がしたいんですけど」

「そんなのこよ。」

「ナハニヒナカニナ」

身を乗り出さうとして

「イッ」

痛みに顔をゆがめるティリエルに

「じゃあお皿までは安静にしておいてくれると助かるかな」

「わへ、わかりました。そつをせてもうこます。」

やはり本調子ではないようだ。不服そつではあったが横になつてくれた。

「 もういいえれば龍つて、なにが食べられるのかな？」

「 人と同じ物を食べますよ。」

「 それじゃあ軽く食事にしよう。」

持つてきた食べ物の内、果物類を中心には渡す。

「 いいのですか？」

「 いいのいいの。 もうこねばこれからどうする？」

「 父の所に戻るといつと思つます。 心配してくるでしょ？」

「 もうか」

そういうえば俺つて龍に会いに来たんだつけ。 ティリエルに頼んでみよつかな、と考えていると。

「 あの、一緒に来てもらえませんか？」

16話 聖痕使いVS銀龍

その後、いつしょにティリエルの父親の所に向かうことが決まった。朝食を食べた後にポーションをもうひとつ飲んでもらい、いくらか良くなつたがまだ体が痛むようなので、俺が背負つて行くことにした。

背負われたティリエルは、この時、道を指差しながら（背中広いです。強いし優しい、私にはいないけどお兄様とはこんな感じなのでしょうか。）

なんて暢気なこと考えており、この後起こるであろうことをまったく考えていなかつた。

ティリエルの言つとおりに進み、開けた所に山小屋が見えてきた。
山小屋？え？

「もしかしてあれ？」

「そうですね。」

なんというか。イメージが崩れていつた。

「家なんだね」

「わたし達を何だと思つてるんですか。私達は、人の姿になれますから、家にくらい住みます。それに人の方が燃費もいいんですよ、怪我したとき人の姿になつたのもそのせいです」

それとかと俺が疑問をひとつ解消していると。山小屋の扉から

「ティリエル、 いつたいど・・・」

泣いおつさんが出でてきた。おそらくティリエルの父親だらう。心配していたのだらう慌てて出でてきた、しかしそのティリエルの父親の言葉が途中から小さくなつていつて最後は俺に焦点を合わせる

「貴様の仕業か——」

「・・・面倒そうな父親だね。ティリエルちょっと降りてもうひとついい」

「人の娘を勝手に呼び捨てにするな——」

「落ち着いてください、お父さん」

「だれがお父さんだ——」

最後はちょっと遊んでみた。

「貴様殺す」

ティリエル父は、いきなり銀色の光に包まれ丸い光の玉ができる。それが一気に大きくなつて一階建てくらいの大きさで光がはじけた、すると中から、いかにも強そうな銀龍があらわれた。銀龍は、この世界でも有数の力を持つた存在らしい。たしかに、彼から受けるプレッシャーは、戦闘時の精靈王たちに近いものを感じる。手加減なんてできそうにない。

「ティリエル急いで離れて、ちょっと派手な喧嘩になりそうだ。」

「ダメです。死んじゃいます。私の方が」

泣きそうになつてゐる。まつたく父親の癖に何してゐんだ。
ティリエルの頭を撫でながら

「大丈夫どつちも死んだりしないから」

いざとなれば切り札もある。

「信じますよ。」

「信じて。」

ティリエルは急いで距離を取る。

「娘といふ霧廻氣をつくるな——」

「うつせー、子離れの時間だ親バカやろう」

聖痕使いと銀龍の喧嘩が始まつた。

「『七重・土壁』」

まず土壁で俺の姿を隠すが、すべての土壁を尻尾の一振りで破壊される。狙いの定まつていない尻尾をなんとかよけて、土煙の中側面に回り込む。

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇、四匹で多角的に攻撃する。三匹直撃した。

が、まったくの無傷、しかし驚いてはいた、俺が一種類の精霊を使つたことに対してもうう。それでも銀龍はその驚きを押し隠し、避けずにつくつた時間を使って魔法を使つて魔力を行使する。

「駆けるは魔の風、無数の刃となりて我が敵を切り刻め『トルネード』！」

チツ、口を狙うんだつた。といふか喋れるんだな。放たれた『トルネード』は広範囲に回転する風をぶつけてくるものようだ。その中に、風の刃が無数に存在する。詠唱そのままだな。

これは防ぐのも避けるのも難しい。なのでもうひとつ的方法を取つた。

次の瞬間俺のいた場所に『トルネード』が直撃する。風が止むと俺は、

地中から這い出た。

つまり、地中に潜つたのだ。それを見た銀龍はそれならばとブレスを放とうとしている。

このバカがこいつクラスの龍がブレスを放てば周りが吹き飛ぶぞ、ティリエルのこと忘れていいのか。

仕方なく

「火の聖痕を発動『炎王』！」

体を炎が包み炎の鎧を着てこりよつこも、ジンが燃えているよつこも見える。

銀龍はまた驚きながらもブレスを放つ、規模は小さい意外と冷静か
？それとも悔つていいのか？

「『陽炎竜砲』」

俺はそのブレスを、超高温の熱線で全力を持って迎え撃つ思ったよ
りブレスの規模が小さかったため、一瞬の拮抗の後、熱線がブレス
をお押し返し銀龍に向かう。

銀龍は、自分に向かつてくる熱線を見て、ブレスを中断し熱線を避け
る。熱線は後ろの森に落ちクレーターを作る。

「避けんな！」

「避けるわ！」

ちっ、炎蛇はよけなかつたくせに。

あゝあ、銀龍の後ろの森が火の海だよ。

「貴様、聖痕持ちかそれに複数の精靈術を扱つ。人間か？」

「失礼なやつだな。俺は異世界人だ。」

「ほう、いっそその方が納得ができる。面白い、良からう次の攻撃
を凌いだら娘との仲を認めてやる」

まだ勘違いしてるよ。まあ親に先に認めてもらひの悪くない。
俺は『炎王』を解除し、

「いいだらう受けてたつ。土の聖痕を発動『岩皇』」

『岩皇』は『炎王』とは違い見た目は変わらない。しかしそく見るとジンの足が地面に沈んでいる。ジンがとてもなく重くなっているのだ。

「ほかの聖痕もあるのかますます面白い受けてみる、銀龍の最大のブレスを」

「受けてたつ。全力防壁『土鉄岩金壁』」

これは、土壁・岩壁・鉄壁・金剛壁の壁を最大の大きさでつくる術で、もつとも防御力が高い。

完成と同時にブレスが放たれる。土壁が岩壁が受けて威力を散らし鉄壁と金剛壁が防ごうとする。

金剛壁に亀裂が入った。地形すらも変えるだろう凄まじい威力。しかしこの術の最大の特徴、

それは、防壁の維持が必要ないことだつまり。

「雷の聖痕を発動『雷神』」

『雷神』は雷が体を包みジン自身が雷のように見える。

「『タケミカヅチ』」

雷で螺旋状の槍を作り出し、ブレスが防壁破ると同時に投げる。雷槍は、ブレスの中心を突き破って進む。勢いは止まらず銀龍は、直撃する前にまたも避ける。

「どうよ」

「・・・完敗だ。まさか人に押し返される、いや貫かれるとは思わなかつたよ。」

そう『タケミカヅチ』は、雷の槍を回転させて一点を貫く技だ。

「いいや、まだ、あなたに見せたいものがある」

「まだ何があるのか?」

「ある。」の後話すことを円滑にするために見といてくれ

「いいだろ?」

俺は、銀龍に切り札を見せる。

今日の前には、誤解を解いたあとティリエルと銀龍あらためアルベルトさんに、魔物の大侵攻についてと異世界人であること、精霊界で修行しすべての聖痕を持つていることを話し終わったところだ。

「そのための切り札か。それでここに来た目的はなんだ? 大体予想はつくが。」

「まずは、アルベルトに戦列に加わってほしいんだ、頼む

俺は、頭を下げる。

「・・・いいだろ？ 我はしばらくの間ここにいるから、必要なときには呼んでくれ。」

「いいのかそんなにあつたり、龍でも危険な戦いかもしねないぞ」

「かまわない、ジンは我を凌駕しているし、全力をぶつけ合つた仲だ。龍は強い物に従う。それに私はジンと友になりたいと思つていいる。」

凌駕か、確かに切り札の俺は反則みたいなものだからな。しかしこれはありがたいので。

「ああ、これからもよろしくアルベルト」

「そこ」でだな。ひとつ頼みがある

「なんだ？」

全然予想がつかない。

「ティリエルを連れて行つてやつてほしい」

「なにを言ひ出すのです。お父様！」

「はっ？ お前ティリエルのことであれだけ怒つてたじやないか。」

「まあ、そろそろティリエルにも世界を見せるべきだと思っていたんだ。ジンなら安心だ。それにティリエルもお前のことを好いていた

るよつだしな。わうだらうティリエル?」

「うう……はい」

頬を染めて小さく頷く。

「えと、俺複数の女性と関係持つてますよ。」

「龍はそんな」と気にせんよ、なあティリエル。」

「はい、その、連れて行ってください。お願ひします。」

「いや、でも、まだ年齢的」

「私これでも15歳です!」

15歳なのか12歳くらいに見えるぞ、でもかわいいしげか。

「わかった。ティリエル一緒に行こう。」

うれしそうな表情を浮かべた後、恥ずかしそうに頼んできたのが

「あの、お兄様と呼んでもいいですか?」

これはいい、可愛すぎる、アルベルトの前なのにティリエルを抱きしめてしまった。

抱きしめられて赤くなったティリエルに

「……からお願ひしたいくらいだ。よろしくテイリエル。

「はい、お兄様」

「わわ―――」

アルベルトが暴走しそうなるが、

「お父様！またお兄様に迷惑をかけたら承知しませんよ。」

「うう～わかったよ、すまなかつたよ」

「本当に反省していますか、お兄様でなければ死んでいたんですよ。」

俺としては、この世界で始めて本気で戦闘をできて楽しかったのだが、ティリエルは先の戦いについて父に対して少し立腹らしい。旗色が悪くなつたのを感じたのか

「そういうえば先程、まずは、といつていたね。まだあるんじゃないかな？」

話を変えてきた。なのでもうひとつの方をきりだす

「竜輝石つのを探している。ついでに入手もしたい。知っているか？」

「ああ、知ってるしちょつとあるぞ。もう必要ないからあげよう」

「もう必要ない？」

「竜輝石は幼い龍が成長するのに必要な物でな、人間で言ひ栄養みたいな物だ。そしてティリエルには、もつ必要ないからな。」

それでこの山に住み着いていたのか。それより少し前は、必要だったのか。

引き出しから袋を取り出し、渡してきた。竜輝石がいくつか入っているようだ。

これが竜輝石か。竜輝石は、自分で光を放っている宝石の原石に見えた。光が強いほどいい物らしい。

「そりか、ならありがたく貰おう。」

竜輝石の入った袋を冒険者の袋に入れる。

「今日は、泊まつていいくといい、戦闘で疲れただろう。わたしも今すぐ娘と別れるのはつらー。」

後半に本音が出ているぞ。まあ聖痕を三つも使って疲れているのは事実だから。

「やうやくもやうかな

「それでは、もう遅いですしお食事にしまじゅう。」

ティリエルの雰囲気に反し料理は丸焼きといつワイルドなものだった。こんな山奥ではしょうがないか。

夜、枕を抱え黒いひらひらした寝巻きを着たティリエルが、

「お兄様、あの一緒に寝てもいいですか？」

本当に可愛いなティリエルは、

「いいよ、おいで」

この夜は一緒に寝た。ティリエルは抱きつき癖があるので、腰に腕を回し、脚を俺の脚に絡ませてきた。

この日は俺もティリエルを抱き枕にして寝た。寝ただけだぞ。だってアルベルトいるしな。

16話 聖痕使いVS銀龍（後書き）

「指摘・感想等ありましたらよろしくお願ひします。」

異世界15日目

田が覚めると綺麗な銀色の髪があった、下を向くとティリールの寝顔があった。

起こすのも忍びないので起きるまでもティリールの感触を楽しむことにした。

しばらく楽しんでいたトイリールが起きた。

「おはよう、ティリール」

「おはようございます。お兄様」

寝ぼけ眼で、すりすりしていく。徐々に、田が覚めてきたのだらう。恥ずかしくなったのか顔が赤くなつてきた。逃げられないように頭を抱きしめる。

「あうあう」

ちよつとやつすぎたかな。開放してあげて

「起きよつか」

「はー」

「それでは、お父様行つてきます。」

「行つてらつしゃいティリエル。ジン、ティリエルのこと頼んだよ。」

「ああ、大事にするわ。」

こうして俺と顔が赤いティリエルは、王都に向かつた。

異世界16日目

王都に戻つたのは昼過ぎだ。集合場所の宿に行つてみたが、皆出かけていたのでもうひとつ一人部屋を取つて部屋に向つ。

部屋に入つてテツを取り出す。

「【主、どうかしましたか?】」

「ひや」

ティリエルが驚いている。二人しかいないはずの部屋で突然知らない声が聞こえたのだから当然だろう。

「こいつは鉄餓刀のテツ、俺の小太刀だ」

「【初めてまして、ティリエルさん。】」

「は、初めてまして、テツさん」

「テツいい物が手に入つたんだ。」

竜輝石を取り出します。

「【竜輝石ですか、吸収してもいいですか?】」

なんかテツの声がはしゃいでいるように感じる。

「いいぞ」

テツと竜輝石を重ねる、いつかのよに竜輝石が、粒子になつて吸収された。黒い刀身が変化して白い龍の模様が現れた。しかし、今回はそれで終わらずに光が強くなつていき光が球体のようになつた。アルベルトが銀龍になつた時のものに似ている。光がはじけてなくなつたとき裸の少女が現れた。

「主二つ田で人の姿になれました。」

「・・・テツか?」

「はい。テツですよ主。」

にっこり笑つて抱きついてくる

「テツまず服を着ようかティリエルも驚いてる。ティリエル服を貸してあげてくれないかな。」

「『主人様帰つてきたんですか。』

「ジン!」「ジン様」

三人が来てしまった。

簡単に今の状況をいふと、龍のいる山から戻つてきた主が一人の美女を侍らせていてしかも片方は裸だ。どう説明しようか。

「『主人様、龍の山に行つたはずでは?』

「どうして女の子を侍らせてるんですか?」

「どうして裸なのかな?」

「・・・まずはテツ服着て。」

何とかなだめてベットに座つて説明を始める。

「こつちはテツだよ。」

「えつ、テツさんなんですか」

「そうだ、俺も驚いてな。竜輝石を吸収させると人の姿になつたんだよ。」

「あらためて、はじめまして主の刀で所有物のテツです。ハーレム加入を希望します。」

テツがすかさず俺の膝の上を占拠する。

「歓迎するよ。」

「こんな子だつたんだ」「わかんないもんだね」「羨ましいです。」

「」
「」
「」

「わ、わたしもハーレムに入りたいです。」

「ティリエルが何故か焦っている。テツのせいか？」

「もちろんだよ、おいでティリエル。」

ティリエルは、うれしそうに俺の右隣にやつてくる。

「まあもうあきらめていますが」「
「そうだね、目を離した数日で一人も、いやテツは元からいたんだ
つけ。」

二人はあきれていた。もう一人は

「わたしも」
「主人様の隣に行きます」

といつて左隣に座つて服の袖を摑んできた。

この世界の女の子は、本当にハーレムに抵抗がないんだな。力が第一の世界だからか？それとも側室があるからおかしくないのか？まあいか俺にとつていいことには変わらないからな。

「それじゃあ細かい事情を話すよ。」

説明が終わると

「龍にまで勝つたんですか。それも成体に」

「それもティリエルの父親ってことは銀龍だよね。龍の中でも上位のはずだよ」

「ご主人様、凄いです。」

「本当に凄かつたんですよ。」

「ええ、主は凄いです。」

後半凄いしか言われていないな。

「これからのことについてなんだが、リリス準備の方はどうなった。」

「

「ぱつちりだよ。長距離移動だから馬車と馬を買つたよ。ほかに保存食や必要な装備も。それで全部で15000ギルくらいだったよ。馬車は、ソフィアとイリヤが練習したから多分大丈夫だよ」

「ありがとうございます。三人とも」

「ふふん、夜楽しみにしているよ」

「久しぶりですね」

「ご主人様、たくさん可愛がってくださいね。」

三人一緒にですか。それは楽しそうだ。

外はもう夕飯時だ。

「それじゃあ飯に行こうか。明日はギルドに行くからね。それでクイント皇国に行く日を決めようと思つ。」

異世界17日目

目が覚めると身動きが取れなかつた。右腕をリリスの、左腕をソフィアの胸に抱えられている。体の上にはイリヤに占領されている。皆裸だ。左右の二人にいたずらする。

「んっ」

「あっ」

起きたのでいたずらをやめて。

「おはよー」「一人とも」

「おはよー」「やあこまます。ジン様」

「おはよージン」

解放してもらひた両腕でイリヤにいたずらじて起きる。

まだ半分寝ているな。

「やん」
「おはよーイリヤ」
「おはよー」「やあこまます」「主人様」

とても刺激的な朝だった。

ティリエルとテツを起こして食事を済ませてギルドに向う。

ここ数日の出費は

宿泊費	1500ギル	食費	1000ギル	その他	610
ギル	合計	3110			
63110	- 15000	- 3110	= 45000		

今の持ち金45000ギル

ギルドについたが何か慌ただしいクレアの姿も見えないので。
ほかの係りの人へ頼んでギルドカードの更新とティリエルのギルド
カードを作った。

名前	ティリエル	女	15歳	龍族
ギルドランク	E			
能力ランク	総合C	気力B	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	ジンの義妹	幼い銀龍		

・・・神のやつ義妹ってなんだ義妹って。
それにしても『幼い銀龍』か幼いがとれるときが楽しみだな。

名前	ジン	男	18歳	人間
ギルドランク	B			
能力ランク	総合B	気力A	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主

奴隸の解放者 精霊術師

「俺は、気力と魔力が両方ランクが上がっていた。そういうえば牛鬼と戦つたときよく動けたんだよな。 気力が上がったおかげだったのか。

「ジンは、成長も早いね。まあAランクの魔物とか倒しちゃってるから当然っちゃ当然だけど。」

「五人に、増えています。人化してテツさんも含まれたんでしょうね。」

「はい、次ソフィアとイリヤ」

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

「うんうん、順調だね。こっちが普通だよ」

「二人の能力が綺麗に並んだな」

「リリスは」

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

「変化ないな」

「まあBランクまで行くとこやBランクをたくさん狩らないといけないからね」

ギルドカードの確認が終わつたこり、懐かしい声が聞こえた。

ジークだ。もう一人たしか俺が一撃で気絶させたやつだ。

「ジンくん久しぶり」

「誰なんですか?」

そういえばソフフィア以外初めて会つた。

「ああ、彼はジーク。王都に来るときに知り合つたんだ。」

「彼女達は、俺の連れで」

「ソフフィアです。ジークさん久しぶりですね。」

「イリヤです。『ご主人様のメイドをしています。』

「リリスよ。肩書きは一応ジンの護衛、ほとんどいらないけど」

「ティリエルです。お兄様に最近同行させてもらひつことになりまし
た。」

「テツです。」

「「れは、」」「寧に俺はジーク」」「はカイル一応俺の相棒だ」

「何だよー応つて。あの、ジンあの時はすまなかつた。」

「こや別にこよ

「やうだ。そんなことヨジン早く王都を出た方がいい

「?何故だ、その内出るつもりだつたんだが

「まだ、正式に公表されていないが、おそらく戦争が起る。ギルドが騒がしいのもやのせいだ」

「の國の王は、どうまでバカなんだ。

「・・・ビ」とやるんだ?」

「クイント皇国」

「待て、クイント皇国は、ソリで一番強いんだろう。戦争なんかして勝てるのか。」

「いいや。勝てないだろ?」

「なら何のために

「奴隸を作るため、だろ?」

「わけがわからん。奴隸もなにも負ければ国がなくなるだろ」

「・・・かつてこの国は、自分より大きな国を倒したことがある。その方法は相手の国の奴隸を軍のいたるところに配置しての特攻だった。兵は、戦えなかつた。戦えた者も心を病んだ。」

「・・・」

俺は怒りで一瞬訳が分からなくなつた。この国はこの世界はこのままで酷いのか。許されるのか。

「たぶん、勝つことが目的じゃなくて、クイント皇国の奴隸を得ることが目的だろ? そうなればクイント皇国も下手に動けなくなる。」

「

「ジンさんー戻ってきたんですね。」

クレアさんがギルドの外から入ってきた。

「お願ひです。助けてください。」のままでは、この戦争は泥沼化します。」

さつきの説明だけなら長期戦にはならないと思ったのだが、まだ何があるのか。

「ジンに「？」とですか？」

「「？」では、ジンさんだけで奥に来ていただけませんか」

「わかった。皆は待つてて」

奥に来てと言わってきたが、そこはギルドマスターの執務室だった。もちろん俺を迎えたのはこの部屋の主ギルドマスターのガルダだつた。クレアもいる。

「よく来てくれた。立ち話もなんだし座つてくれ」

正面のソファーを指しながらの言葉に力がない。前会つた時も疲れてるのかと思つたけど今は、度をこしている今にも過労で倒れるんじゃないかとすら思う。俺がソファーに座ると

「すまない、ギルドカードを見せてくれないか」

あまり見せたい物ではないんだが

「どうぞ」

しばらく俺のギルドカードを眺めると突然頭を下げて

「頼む、力を貸してもらえないだろうか」

「頭を、上げてくれ。まず何があつたのか何が起こるのかを教えてください」

「そうだな、单刀直入にいづ。この国の愚王が大使として来られる予定の姫を捕らえよづとしている。」

「……そんなことをすればクイント皇国は引けなくなる。なるほど、泥沼だな」

あきれて怒りを忘れてしまった。

「ええ、何とか救つてお国にお返ししなければいけないです。だが我々では大使達の居場所が分からぬのです。力を貸してくれないか？」

「わかつた、協力する。わかつてゐる」とは？

「ほとんど分かっていないのです。」

それなり

「少し調べてみましょ。」

部屋の窓に近づき

「『風見鳥』」

「（）でも届そつた鳥を二羽ほど作り出す。風の精靈に形を取えて偵察を行う術だ。」これなら景色も見えるし音も聞こえる。

「それは？」

「偵察用の精靈獸です。」

そして言おつか迷つたが一人に

「……場合によっては、俺はこの国を滅ぼしますよ。」

「それもいいでしょ、この国は、たくさんの犠牲で成り立つ国じゃなくなるべきなのでしょ。」

「わたしも、別にこの国は好きではありません。ジンさん、思いつきやつちやつてやつ。」

これで決まった。國民が滅べといつているのだ。決まりだ

この國、グーロム王國には消えてもらひ。

17話 奴隸王国（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

「ヒカルはグーロム王国の王都にある王城。

贅を凝らした広い部屋の豪華な椅子に豪奢な服を来た男が座っていた。周りには、見事麗しい奴隸の女性を侍らせていた。

若い兵士が、伝令に来た。

「申し上げます国王陛下。」

「話せ」

「クイント出身の奴隸の選別はまもなく終わります。その後国内のクイント皇国出身の者を奴隸にするとあります。よろしいのですか？」

「余に意見するのか？」

「いい、いえ決してそのようなことは」

「若い兵士は、慌てて弁明する。

「しかたない、余自ら話してやる」

「国王は、すばらしくこのように

「此度の計画は、クイント皇国の皇女レティーシアを捕らえ奴隸とし戦争の旗頭とする。そして今回の戦争でクイント皇国の方を削ぎ、

手にいれた奴隸で最近うるさいクイント皇国を黙らせる、というも
のだ。そのために多くのクイントの奴隸が必要なのだ。しかし数が
少ないならば作るしかないだろ？ 奴隸を。何か意見があるか？」

「いえ、そのようなことは、ありません、陛下の深いお考えに感服
いたしました。」

このとき若い兵士の中にでは、
(そんな理由で奴隸を作ればこの国から人が出て行くのではないか、
皇女を奴隸にしたら皇国との泥沼の戦争になるんじゃないか等疑問
は尽きないが、ここは追従するしかない)
その言葉を聞いて満足したのか

「さがれ」

若い兵士を下がらせ、別のこと口にする

「おい、レティーシアの方はどうなつている？」

側のふくふく太った文官風の男が

「ラシード将軍に騎士団500名を変装させて持たせ捕獲に向わせ
ました。今頃コルテス地方の辺りでしょ？」

この王城内の奴隸以外のほとんどの人種は、こんなのはばかりである。
他国の姫を呼び捨てにしたり、捕獲などとほざくのが当たり前なの
だ。

「それでは、期待しよう。かの姫騎士を奴隸として迎える日が楽し
みだ。」

といやらじい笑みを浮かべいた。

これを精靈で作られた鳥が一部始終を見て聞いていた。

といひ変わってギルドのギルドマスターの執務室のジン。

「なんだ、これは！。皇国を黙らせるこれだけのために戦争をするのか、そんなことをすれば最悪の場合共倒れだぞ、負けなくとも、この国から人は離れる。この国は、何もせすとも滅びる。混乱だけを残して」

「それがこの国の末路ですか」

少し寂しそうにクレアさんが聞いてくる。

「ああ、この国は、終わる。だから最もいい形で終わらせる。終わらせでみせる。」

決意を込めて一人を見る。

「手を貸してもらいますよ。ギルドマスターあなたの依頼だ。」

「任せてくれ。どうすればいい？」

「まずは、後見人になつてもらつ。一つ目はこれからクイント皇国に行くにはどうしたらいいか教えてくれ」

「後見人の件は任せてくれ。クイント皇国に行くには二つの道があります。」

「ならその二つの道が描かれている地図はあるか?」

「クレア取つてくれ」

クレアさんが慌て部屋を出る。

「あとこの世界の戦争を簡単に教えてくれ。」

ギルドマスターに、簡単な説明を受けるが、ほとんど予想の範疇だつた。飛び道具が魔法になつていて、兵戦が基本らしい。

「持つてきました。！」

「ありがとうございます。コルテス地方とはどの辺りですか？」

「！」

ガルダが指したのは、王都とそんなに離れていないところだった。近いかなりやばそうだ。だが、離れていないとはいってもおそらく徒歩で一、二日はかかる。まだ間に合つかもしれない。

「！」の地図は借りりますか？

「本来はよくないのですが。持つていってください。」

「最後に、俺のことは内密にお願いします。」

「わかつた」

「わかりました」

「では、姫様を救いにいきます。」

皆のところに戻り開口一番に

「すまん、またちょっと出る。ティリエルだけ付いて来てくれるか、テツは小太刀に戻つてくれ」

「「「またですか」「」」

三人が泣きそうになる
帰つて来たばかりだからな。

「すまん緊急なんだ。三人は、クイント皇国の皇都に向つてくれ。ジーク突然で悪いが、三人の護衛をしてくれないか、金は払う。」

みんなの表情が変わる。この情勢での緊急だ碌な事ではないだろう。
「お金は、いいよ。もともとこの国を出るつもりだったんだ。借り
も返したいしな。」

「じゃあ頼む、お前達は皇都に行くのに一番短い道を通つてくれ。」

むくれる三人の頭を撫でてやる。

「すまないな、すぐに出ることになつて。」

「早く来てくださいね。」

「怪我しないでくださいねご主人様」

「いつか絶対ジンに「ついて来てくれ」って言わせてやるから

「楽しみにしいてるよ。あれテツは?」

「【主】に【】」

テツが座っていた椅子に小太刀があつた。

「ティリエルできるだけでいい俺を乗せて飛んでくれないか?」

「お兄様、喜んで」

嬉しそうに言つてくれる

「ありがとう、時間がないすぐに出る。いいかい?」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ行こう」

外に出て三人に振り返り出てきた三人をまとめて抱き締め。

「行つてくる。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

三人が見送つてくれる。

龍化したティリエルに乗つて飛びだつ。

なんの障害物もない空を飛んで目的地に向かつ。

一時間ほどでティリエルが疲れ始めていた。

まだ幼く体もあまり大きくないのに良く頑張ってくれた。

一度地上に降りて方向を確認してから、ティリエルを脇に抱えて走り出す。

ランクAに上がった氣力を使って『鬪氣』（全般的な身体能力の強化）を使う。

一時間ほど走り。

コルテス地方の手前で

「ティリエル飛べるか？」

「なんとか、乗ってください」

「いやここからは探索もやるから、自分で飛ぶよ

「飛ぶ？」

ティリエルが、きょとんとしている。

「聖痕発動『嵐帝』」

精靈を使ってコルテス地方全てを見渡す。いた、かなり街道をそれている。逃げている最中のようだ。追っているのは百人ぐらい、別のことないに四百人いる。

追っている方を潰すことにする。

「ゆっくりでいいから付いてきて。すぐに降りたらダメだからね。終わったら俺が呼ぶから」

そうティリエルに注意して

『嵐帝』の力で人の身で空を飛ぶ

追い着いたときには、もう乱戦になっていた。

人間が入りに乱れているこれでは白兵戦しかできない。テツを抜いて空から落ちるように飛ぶ。

三人で一人に攻撃する山賊風の男達がいたので、真ん中の男を、空から地上に落ちるのに合わせて肩から斜めに切り殺す。男の体は切った軌跡にそつて斜めにずれ血を噴き出して絶命した。

着地と同時に一人殺し、立ち上がって右の男を小太刀で首を切り飛ばし、左の男は風を纏つた左手で首を突き刺す。

三人を瞬殺した俺は、攻撃を受けていた奴を見ると

ジリッ

警戒されていた。しかたない突然空から降ってきたのだからな。驚いたことに、助けたのは女だった。女騎士だった。美人だが今は時間が無い

「助けにきた。今は、先にコイツらの殲滅を手伝って欲しい。」

女騎士もそうするべきだとわかっていたのだろう。頷いて

「わかった。感謝する」

俺は、近くの山賊風の一団に突っ込んでいく。女もついてきた。一番近い敵を小太刀で切り、別の者を炎で燃やす。囮まれそうになると風で吹き飛ばす。三方向から攻撃されれば水で防いだ。その間に、俺は刀技の実践を重ね洗練されていく。

戦いの中、刀神との修行を思い出し、徐々に精霊を使わずに回りの敵を片づけるようになり、精霊は周りの援護につかうようになっていた。

三人を相手にしていたことから見当はついていたが女騎士もやはり相当の手練だった。

長剣を巧みに使い危なげなく敵を倒している。一対一なら不覚を取ることはない様に見えた。女騎士ひ援護はいらなかつた。

数が減り不利を悟つた敵は逃げ出した。

「『風刃』」

敵味方がはつきりしたので『風刃』で逃げる敵を、横に真つ一つにして殺して戦闘は終わった。

これからが問題だ。残った周りの人間は、感謝はしているが、その強さに得体の知れなさを感じているようだ。時間がない早めに話をつけたい。まず、どうやって皇女に会うかが問題だ。

そんな時、女騎士が近づいてきた。

「君、一緒に来てくれないか？話を聞きたいんだ。」

この状況で話しかけてくるのだ、少なくとも話は進むだらう。

「わかつた。ちょっと待つてくれ、ティイリエルー！」

「はーい」

空から龍が降りてきた。みんなが驚き身構える中、ティイリエルは空中で人の姿に戻る。

落ちてきたティイリエルを受け止めた。

「お兄様、疲れました。」

周りは唖然としていた。

「君は龍なのか？」

「俺は違うよ」

女騎士は訳が分からなくなつたようすで

「とにかく来てくれ」

考えることをやめ連れて行くことにしたらしい。

馬車に案内された。馬車は、派手さはないが質がよく皇女が乗るのに恥ないものだった。

中に案内されて、女騎士が

「「」の者が、先程助力してくれた者です。」

俺のことを中の人に紹介する。馬車にいたのは、ドレスを着た令嬢が一人とメイドが一人、護衛が一人と俺を連れてきた女騎士の五人の人間いた。

メイドが喋る。

「此度のご助力まことにありがとうございます。主が何かお礼をしたいと仰いまして。こうしてお呼びさせていただきました。」

お礼をするのに呼びつける必要はない、つまり

「ですが、その前に何故こんなところにいたのか、お聞かせ願えませんでしょうか？」

こっちが本命だろう。ここは街道を外れていてたまたま通りかかった、ということはありえない。

目的があるはずだ、と思っているのだろう。

時間がないさつさと終わらせよう。令嬢を見て

「あなた方を助けるためですよ。皇女様」

1-8話 愚王の蜜行（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

『』指摘・『』感想等ありましたらよろしくお願いします。

19話 皇女

「あなた方を助けに来たのですよ。皇女様」

五人全員に動搖がはしる。それを見て確信した。

「よかつた。あなた達が皇女様ご一行であることは間違いなさそうだな。」

「お前は何者だ？」

「俺は、冒険者のジン。グーロム王国のギルドマスターに頼まれて助けに来た。」

俺は皇女様といいながら。口調を変えなかつた。ティリエルは、戸惑つていたが、俺は改めなかつた。案の定、

「き、貴様こちらのお方を皇女様と知つてゐるなら、その口調を改めろ！」

護衛の男が怒りだす。

これからこのことを考へると俺は皇国とは対等でなければいけない。従つてもりはなかつた。

「断る、俺はあんたの國の民ではない。公の場ならともかく、この場にその必要性を感じない」

「なんだと！」

「落ち着いてくださいレオン卿。ジン殿あなたギルドマスターの部下なのですか？」

「訝しげに見てくるメイドさん。にしても皇女は喋らないなお飾りなのか？」

「いや、違うあくまで対等な関係だ。依頼主ではあるが」

ギルドマスターは基本一国に一人しかいない。そして冒険者を束ねる存在でそれなりに力があるだが、俺はそのギルドマスターと自分を対等だと説明した。

「じゃあ、あなたは」

「ちょっと待つて、時間がないんだ、まだ続くかな？」

その無礼な物言いに護衛が声もなく怒りを顕にするが

「では、最後に・・・あなたは味方ですか？」

「それはこれからする話を聞いてから、あんた達が判断してくれ。」

「貴様は、私の敵だ」

話の腰を折るなよ。

「ちよつと黙れ单細胞、話が進まん」

「单細胞?どうこう意味だ?」

あ～細胞がわからんか、そりゃそうだな。男は無視して

「時間がない、そろそろ俺の話を聞いてもらひ。まああんた達には、
皇国に戻つてもうついたい。」

「それは無理です。皇女は大使として来ています。その責任を放棄
することは出来ません」

「果たせない責任を守る必要はないだろ」

メイドさんが声を荒げる

「果たせないとはじつこつ意味ですかーー？」

皇女をバカにされたと思ったのかな？

「皇女に問題があるわけじゃない、グーロム王国があんた達を大使
として扱わないといつている。」

「な、何故ですか？私達はグーロム王国に招待されて」

初めて皇女が声を出した。戸惑っているようだな

「招待はおそらく罷だらう。大方、奴隸制度の緩和か皇国出身の奴
隸を解放するとかなんとか言つて呼びつけたんだろ」

「（そこまでわかっているのかー）」

交渉の内容を知っていた皇女付きのメイドは驚愕していた。
事実なのだ交渉の内容は皇国出身の奴隸の解放についてだった。何

を要求されるかはわからないが無視できない内容だったのだ。実際グーロム王国は皇国出身の奴隸を集めていると聞いている。

「グーロム王国は戦争の準備をしている。そして、その前に皇女を捕らえるつもりだ。」

「えつ、そんな

皇女の顔が青ざめる。他の者も動搖している。

「姫様、落ち着いてください。ジン殿それを証明できますか?」

「あんた達の状況そのものが証明だろ?」この襲撃初めてじゃないんだろ、おやうぐなんどか襲撃を受けたはずだ

「なぜそんな」とまで

「生き残りと死体の数を数えたが皇女を守るには少く少ない

「それが何故襲撃を受けたことが証明になるのですか?」

「普通は勝てない相手を襲撃したりしない、なのにあんた達は何度も襲撃を受け護衛が少なくなってしまった。しかし、壊滅したわけではないから、戻ることもできない」

「護衛が少なく?」

「戻ることができない?」

女騎士とメイドが呟く

「そこが大事なんだ護衛がある程度いれば勝てなくても皇女を逃がすことができる。今のあんた達は敵から皇女を逃がせるかな？それに壊滅させでは皇女に逃げられる。」

「しかし！それは証明にはなりません」

メイドは、理解できても納得できないらしい。さつきの戦闘を考えれば皇国に戻ることはおかしくないはずなのだが

「私は彼の言葉を信じる。先程の戦闘、彼がいなければ我々は死んでいた。信じるには十分だろ？ ミリア、今は耐えてくれ。」

女騎士が援護してくれた。

「わかりました。皇国に戻りましょう。」

「なら急いでまだ追手は四百人ぐらいいるから

「え？」

「だから急いでいると言つているだろ。いつぞ、そいつらを証拠にするか」

「で、では早く戻らないと」

「駄目だ、相手は四百もいるんだぞ当然前の街道は封鎖されてる」

地図を取り出して一つの街道をしめす。そこは前の街道の反対側の街道だった。

「だからこの街に出る」

「何故だ？その街道はもつとも皇都まで距離があるが。それに道はわかるのか？」

「道はわかる。理由は追手が分散してかなり数を減らせる。それに元々この道しかない」

道は、聖痕を使ったときにはあらかた調べていた。

三つの内一つには敵がいる、もう一つには今の場所からは行けない。

「……わかった。皇女様」

女騎士が皇女に採決を促す。

「わかりました。あなたの言葉を信じましょう。直ちに皇国に戻ります。」

「了解しました。それでジン殿、君を雇いたいのだが

「ああ、俺が裏切らないよう。なにか繋がりが欲しいのか

「すまない、何かないかな？」

「謝る」とじゃないや。やうだな皇都についたら戦争について皇王と話したいその渡りをつけてもらいたい

「わかった。掛け合つてみよ」

「それで君達、名前はなんて言つんだ？」

「さうだったな。私はレイシアだ。さつきはありがと。」

女騎士が名乗りほかも名乗りはじめる

「私はミリアと申します。」ひらは、我らの主のレティーシア様です。」

「よろしくお願ひいたします」

「ひらは、応答していたメイドと皇女

「ミー・シャです。」

「レオンド」

終始喋らなかつたのがミー・シャで護衛がレオンドらしい。

「これからのことについて話したい、戦えるのはどれくらいいるんだ？」

「・・・八人」

「八人が、戦うのは無理だな。どうするか？馬は？」

「人数分はある」

「移動しながら話そう、すまないがティリエルを馬車に乗せてくれないか」こに來るのに無理をさせた

「かまこませんよ」

「よしでま行け」

俺が馬車を降りると

「ジン殿馬を」

「いやいい乗れないからな、走る遅れるなよ」

「はい？」

外の騎士が今に乗るのを確認してから走る
気力と精霊の力で驚く早さで駆ける

「は、早い。全員遅れるな」

レイシアは、慌て馬を走らせる。近くにきたレイシアに
「街道に出るまで走る」

「本当に何者なんですか？」

その後、道なき道を進み、時には道を強引に作り込んだ。
街道に出た時に

「新しい道ができてしまった。」

皆呆然としていた。

「すまん疲れた。馬車に乗せてくれ」

周りの人間は安堵していた。

「よかつた。ちゃんと疲れるんだな」

と別の騎士が呟いた。失礼な

馬車に入った俺は、最初のメンバーを集めて話をはじめる

「これでゆつくり話が出来るな」

「正体について教えてくれないか」

「それは時間がかかるから追手を振り切つたらな」

「いこまで來るのか」

「来るだろな四百人の内一百ぐらいは騎兵だった。分散しても、その内五十人前後が来るだろ。」

「どうする、相手は騎兵なのだろ馬車のいる我々はすぐ追いつかれ
る」

「だからこの先の川まで行く。そして橋を壊す」

橋の手前で追手に見つかった。

「手筈どりに」

八人の騎士が引き付けながら橋を渡る。

追手が橋を渡りはじめ、土の精靈術で脆くしたところまできた時

「『炎蛇・六首』」

炎の蛇がその場所にいた騎兵^{アーモンド}と橋を破壊した。石造りの立派な橋が木つ端微塵だ。

何故こうなったかといつと橋の破壊方法を言つた時にミーシャが

「橋と一緒に敵さんを破壊すれば、後のことを見逃して良くて
一石二鳥ですね」

と、とても怖いことを言つてのけた。

ミーシャは見た目は小動物みたいで性格も引っ込み思案なのだが、たまに怖いことをいつ、それも天然なので腹黒いのとはちがいよく分からぬ子だ。

俺達は、夜になり移動が困難になつたころ開けたところで野営にすることにした。

準備が終わつたころレイシアが

「そろそろ君の正体を教えてくれないかな?」

19話 皇女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

20話 龍の思いと小太刀の思い

「俺は異世界人だ。」

「…………」

まあそうなるよな。ちなみにこの場にいるのは、皇女のレティーシアとメイドのミリアそして女騎士のレイシアそして俺とティリエルの五人、これは俺が人数を減らすように頼んだ結果だ。この五人で、馬車の中で話している。風の結界で防音して外には漏れないようにしている。

「まあ、信用できないだろうから、これを見てくれ。」

そういうてギルドカードを見せる。

名前	ジン	男	18歳	人間
ギルドランク	B			
能力ランク	総合B	気力A	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	聖痕使い	精霊王の友人	救世主	五人の女の主
奴隸の解放者	精霊術師			

「救世主?精霊王の友人?」

「そ、俺つて救世主らしいんだよね。」

「聖痕使いというのは?まさか

「これが聖痕か、それでの精霊術か、納得だな」

左腕の聖痕を見せる。

「これが聖痕か、それでの精霊術か、納得だな」

「そんで、俺が何をしにこの世界に来たかだけど」

魔物の大侵攻について話した。

「そんなことが本当に起っているのですか、とても信じられません」

ヒメイデさん。

「誰が何を言おうと起らぬものには起らぬ、それに嘘をつく必要もないだろ。」

「やうひですが

「というより、考へても答へなんかでないだろ。今は、知つていてくれていればいい。皇族が知つているだけでこれからのこととも変わらぬからね。」

「ジン殿、聖痕を使えば簡単に勝てたのではないですか？」

レイシアが不満といつよつ単純に不思議がっていた。

「あ～実は、いま水の聖痕以外使えないんだわ」

「…………えつ」「」「

「実はここに来る前に銀龍と戦ったときに三つ使ってあんたら見つけるのに一つ使つていてな。聖痕って連續しようできないし、力が戻るまで少しかかるんだよね」

「ぎ、銀龍？銀龍と戦つたのか！」

「ああ、勝つたぜ。ちなみにティリエルの父親な。」

「…………」

「だから、魔王との謁見よろしく頼むよ。」

「【】主人様、人の姿になつてもよいでしょうか?】

ビクッ

三人が驚いているな。

「いいぞ。」

テツが人の姿になる。

「こいつはテツ、俺の小太刀だ。」

テツは突然、

「皆さん主はお疲れです。主については、これ以降ティリエルさん聞いてください」

「どうしたんだテツ今は、」

テツが無理に俺を外に連れ出そうとする。

「お願いです。主一緒に来てください。お願いします。」

テツの声が震えている。

「わかった。すまない後は、ティリエルに聞いてくれ、ティリエルも何でも答えていいから。」

俺はテツを連れて馬車を出る。

・テツとジン・

人気の無いところまで俺を連れていくと、突然テツは、抱きついてきた。

「どうしたテツ大丈夫か？」

「私は問題ありません。私が心配しているのは主のことです

「俺の、こと？」

「人を斬った時、主の心が軋んでいるようでした。」

その時に持たれていたからこそ、聞けた心の悲鳴だ。

「・・・俺は、この世界で何人も殺している。今さらだな」

盗賊、奴隸商人とそれなりに殺している。

そのはずなのに、

なぜ俺は今泣いている。

「私は、ずっと主の側にいました。なので主のいた世界のことでも一番聞いています。」

それは他愛もないことを話した、ソフィア達との会話のことだらう。

「だから知っています。主の周りは、とても想像できないくらい平和な世界で、魔法はなく亜人もいない世界だったと」

テツは、俺のことを理解しようとしてくれていた。

「だから主にとって、人を『斬る』というのは、精霊術を使ってのものより『殺し』を特別意識することだ。その上で、自分を責めているのだとわかりました。」

そうなのだ俺は今までの人間を、精霊術だけで殺してきた。怖かつたのだ人を斬った時の感覚を覚えるのが、殺した人間の血を浴びるのが。

そして今日俺は斬る感覺を覚え、血を浴びた、恐怖を隠すために途中からは稽古に見立てたりもした。稽古に見立ててたくさん『斬つた』のだ。

「主は優しいです。すべてを捨てて、この世界を救いに来てくれました。主は強いです。銀龍にすら勝ってしまいました。主は私たちの誇りです。」

テツが喋ることを、やめない。

「ですけど、主は人なんです、時には私達に甘えてください。自分の中に溜めず、たまに吐き出してください。わたし達は受け止めますし支えます。そしてずっと側にいます。」

「ありがと、テツ

今日俺はテツの胸の中で泣いた。

馬車の中

ジンがでて行つた後の馬車は沈黙が続いていた。テツ出現しその後すぐにジンを連れて行つたことで、その場をしばらくの間沈黙が支配していた。

レイシアが、沈黙を破つて口を開く

「その、ティリエル殿」

「ティリエルで結構ですよ。」

「じゃあティリエル、ジン殿もああ言つていたしジン殿について聞いていいかい？」

「どうぞ、なんでも聞いてください」

「ありがとうございます。わつき龍がどうたら言っていたがジン殿はやはり強いのか？」

「ええ、強いんですよ。私の父に勝ってしまいましたし、個人で勝てる人間はいないと思います。聖痕を使えば一国とも戦えると思いますよ。」

「ヤレヤレだが、お兄様ってどうして？」

「旅に同行する方に私からお願ひしました。」

こうしてレイシアが、質問しティリエルが答えレティーシアとニアは聞き役に徹した。

質問にこゝつか答えたころにレティーシアが

「お一人の様子を見に行かなくてよろしいのでしょうか？」

「絶対に行かないでください！」

幼いティリエルの剣幕に二人が戸惑つ

「お兄様は今きっと辛い思いをしています。」

「ユリに来るまでに何かあつたんですか？」

「いいえ、お兄様が辛いのは、人を殺したからだと思います。そのことはテツさんの方が分かると思います。」

。だからお兄様を任せたのですから。」

「人を殺したから？ それだけ？」

「お兄様は、お優しいのです。本当は殺しなんてしたくないです」

「あれほど力を持っているのに」

「そんなことは関係ありません。お兄様は、この世界を救うために力をつけたと言つていました。人を殺すためではありません。」

また馬車の中が静かになる。レイシアは、ジンの力のみに気を取られていたことを恥じていたし、ティリエルも今自分がジンになにもできないことを再確認して沈んでいた。

「え」と、ティリエルちゃんは、びつしてジン殿と一緒にいるのですか？」

皇女が場の空気を変えるために新しい質問をする。

「えつ、え、えと、大好きだから」

空気がやわらぐ

「あ、あと支えになりたいんです。お兄様はこの世界に一人で來たらしさいので故郷もないですし、だから、その」

「俺の話か？」

「うひやー。」

「どうしたティリエル？」

「ど、どこから聞いて」

「どうしてジン殿と一緒にあたりからだな」

ポン

真っ赤になった。

落ち着くのを待っていると

「その、大丈夫ですかお兄様？」

「大丈夫だよ。にしても俺つてそんなに顔に出てるかな」

「大丈夫ですよ。少なくとも皇女様方は気づいていなかつたので」

「それはよかつた。」

「お兄様、あの、今日は二人で寝ましょ。」

「・・・ありがとうティリエル。じゃあまた明日、お休み皇女様」

そつこつて馬車をする

その後の馬車

「ティリエル様の言葉を聞いてどう思われますか？レティーシア様」

「信用していいだろう。ティリエルの信頼は本物だった。」

「その上でビリスのですか？」、皇女様

「わたしはあいつが気に入った。何より強い」

（姫様がここまで異性を気に入るのは初めてね。どうなるのかしら）

「強いのは関係ないでしょう、まあいいです。では、渡りはつけるといふことでいいんですね？」

「ああ、そうしてくれ。ふふっ、あいつの驚く顔が楽しみだな～」

20話 龍の思いと小太刀の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界21日目

俺達は今、追手に追いつかれそうになっていた。その数80前後の完全武装の正真正銘の騎士団だ。

「あいつら軍馬まで出してきやがった」

レオンが毒づいている。

しかし、騎士団と軍馬を出してきたといふことは軍が、つまりは国が動いていることの証明だ。

この行動は、皇女達に俺の言葉に信憑性を持たせてくれた。

この場を切り抜くことができれば、交渉はしやすくなる。

「どうするんだ、貴様のせいだぞ」

たしかに、追いつかれたのは、一番距離のある道を選んだ結果ではある。他の道が2、3田で皇國に着くのに対してこの道は、5田もかかるのだ。

他の道が正解だとも思えないが、軍馬を出してきたのは、想定外だった。

グーロム王国はもう隠すつもりがないようだ。

それに敵は、甲冑を着けていて、聞くとあれには耐魔耐精霊の術がかけられている。負ける気はないが、守りながらでは厳しい、だから

「あの狭い道まで行けば俺が何とかする

「本當だらうな？」

レオンがさつきからいつぬといな

「レオン卿今は逃げることだけ考えなさい」

レイシアが一喝する。

「了解しました。」

狭い道までたどり着いた。俺は、馬車から飛び降りた。

「お兄様！」
「ジン殿！」

「先に行け」

これ一度言つてみたかったんだよな。

「『『』』」
『『』』

道を走る壁でふたぞ馬車が見えなくなる。

「悪いな、ここから先は、通行止めだ。死にたいやつはかかってこ
い。」

俺は、高低差を埋めるため土で足場を作り80近い敵を迎撃つ。

皇女達は、夜にはなんとか国境を超えて、国境の近くで野営をしていた。皇女たちはジンを待っているといつよりティリエルへの配慮のつもりだった。

「お兄様」

ティリエルは、ジンが来るであろう方向をずっと見ていた。

そこに、レオンとミリアが近づいて来た。

「お前、戻って来ると思つてんのか？」

ドコッ

「ドコッ」

声にびっくりしてティリエルが振り返ると、ミリアの拳が脇腹を抉つていた。

「言葉を選びなさい」。ジン様は、我々のためにあの場に残つたのですよ。」

「ふふっ大丈夫ですよ。お兄様は帰ってきます。」

二人はその年下の少女の揺るがない声に呆気に取られていると

「あつ」

街道に一つの人影が見えた。次の瞬間ティリエルが走り出す。

「お兄様！遅いです。」

ジンのところまで走り飛び付く

「痛い、痛いティリエルそこはやめて」

「お兄様どこか怪我したんですか！」

「ああラシード奴がわりとできるやつでな、痛み分けになった。」

そこにはアーヴィングたちも追いついてくる。

「ラシード将軍ですか、よくこの無事で彼は気力がSの実力者なんですよ。」

「へ～じゃあ、あいつ『超越者』なのか？」

「いいえ、彼は魔力が低かったのでAランクなんです。超越者は、能力ランクがSランクからなのでちがいます。彼は『到達者』です。」

「

レイシアまで出てきた。

「ジン殿戻ってきたのか、信じていたぞ。」

「ああ、レイシア達は、怪我はなかつたか？」

「我々は大丈夫だ。それよりジン殿怪我しているのか、大丈夫なのか？」

「かすり傷だよ。」

レイシアは、心配そうな顔をしていたがそれを聞いて安心し今度は真剣な表情で

「ジン殿此度の件、真に感謝する。グーロム軍が出てきていたのだ、あなたの言葉は真実なのだろう。わたしはあなたを信る。皇帝陛下への取次ぎは任せてくれ。まあ元々皇女の恩人だ、会うことは簡単だと思うが。」

「それはありがたいな。」

「ジン様は異世界から來たのでしたね。ジン様は、なんのために戦っているのですか？この世界に思い入れのないあなたがどうしてそこまでできるのですか？」

ミリアにとつて、それはとても不思議なことだった。しかし、ジンはとつては当たり前のことで

「自分のためだな」

「自分のですか？」

「そう、まあ明日は皇都までもまだ距離はあるんだ今日は休もう。と

「もう少し休みたい」と、

そういって締めくくった。

異世界24日目

三日かかって、やっと皇都の城門についた。
もう馬を回つていろ。

「やっと、皇都についたな。」

「主人様～、無事で～」

イリヤが凄い勢いで走つてくる。側まで来ると飛びついてきた。

「主人様、寂しかつたです。」

「ずっと城門前で待つていたのか？」

呆れるような嬉しいような。

「はい。三人で順番に待つてました。」

「ジン殿我々は、先に城に向います。明日の便りでお出でください。
い。」

氣を使つてくれたのか、レイシアたちとはここで別れことになり
先に城に向つた。

「わかった。イリヤ一人のところに案内して。これからのことを持
そつ」

「わかりました。行きましょう」

イリヤはさう言つて俺と手を繋いで歩き出す。

クインント皇国は皇都は、グーロム王国の王都に比べてとても綺麗な所だった。少なくとも表通りには孤児は、見えない。しかし、孤児院も見えなかつたからどうかにはいるのだろう。

市場にも活気があり個々の家も立派だ。あらゆる点でグーロム王国を凌駕している。

なぜ、グーロム王国は、皇国に戦争しようとしているのか、わからぬ。とても皇国に勝てるとは思えない。そこで、グーロム王国の目的が勝つこぢではないことを思い出し怒りを覚えた。

いかんな、こんな状態であいつらに会つのは、なんとか気を鎮めようと思つて、テツを抱きかかる。

「ど、突然、ど、どうしたのですか主？」

「ちょっとだけ」さわせた

「はい、ど、どうか、好きなだけ、むしむすつとでも

「むづく

ティリエル達がむくれてゐるのは見ない」として一人の待つ宿を指す。

宿に着くと

「ジン様」「ジン」

テツを降ろして飛びついてきた二人を抱きとめる。
ソフィアなんかちょっと泣いている。

二人を解放して全員の顔を見る。

「これから忙しくなるぞ、なんせ国を一つ潰すんだからな」

「わたし、あの国嫌いです。」

「ううう」

奴隸にされていたことがあるイリヤとリリスは、全面的に賛成とう感じで、他の者も

「主が潰すと言うのなら潰すまでです。」

「人の国にあまり興味ありません。」

龍と小太刀の二人には、人の国という形に興味がないらしい。
ただソフィアだけは

「ジン様、わたしの村は大丈夫でしょうか？」

ソフィアの村は、王都から近いため巻き込まれないか心配なのだろう。

「大丈夫できるだけ綺麗に片付けるつもりだし、皇国が勝てば国民からは問題なく受け入れられるだろ」

ソフィアは、一応それで納得してくれたようだ。

「わかりました。」

「明日の晝に、登城だ。皆準備しておいてくれ。」

「はい」

「それで、主人様今日の夜は」

「イリヤさん、お兄様は疲れています。そういうことは後日にしてください。明日は登城なんですよ」

「む～、いいじゃないですか、お一人はずっと一緒に寝ていたんでしょう」

「うえ、まあそれは

「やつぱり寝てたんだ」

「うう」

「大丈夫だよティリエル。まあでも一緒に寝るだけな

「やつた」

イリヤが嬉しそうにしているところ

「じゃあわたし達もいいですよね、ジン様」

「そうだね、ジン」

「なんでそうなるんですか！」

「まあまあイリヤ、一人も一緒にいられなかつたのは、同じだろ」

「う～わかりました。」

世界は救うつもりだが、やつぱりこういつの大事だよな。

結局この夜は、三人を抱くことになつたが。

21話 皇都へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろしくお願いします。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界25日目

「すごいぶんと大きいな。」

まあ当たり前なのだが、皇都の城はかなり大きく贅を凝らしている。グーロムの城は遠目にしか見ていないが、皇国の城との格の差は歴然だ。

正直日本出身の俺としては無駄な気がするが、この時代には権威を保つためには必要なのだろうな。

城門に近づくと//コアさんが待つていてくれた。

「お待ちしておつきました。ジン様」

「//コアさん、どうなりましたか？」

顔見知りのメイドが迎えてくれた。

「すぐにお話しになるやうです。ついて来てください。」

問題なく通してくれた。

入つてみると城内はとても慌ただしい、グーロム王国が動いたんだ

うつむ

「//コアです」

//コアさんが扉を開ける。俺達は//コアさんと共に、部屋に入ると

部屋には、男女が三人ずついる、その内一人に問題がある。

「レイシア？何故？」

レイシアがドレスを着て座っているのだ。

「はっはっはっ、実はわたしが皇女だったのだよ

「え――――――」

これはティリエルだ。

「はあ」

俺はため息をついていた。

ため息を吐く俺を見て残念そうに

「なんだジン驚いてくれないのか」

「想定内だよ、想定内だが」

レイシアいやティーシアの元に迎い両肩に手を置いて体重をかける

「驚いてはいない、だがな、どこの国に影武者がいるのに一対三をする皇女がいる。」この国の皇女はアホなのかバカなのか、というかミリアさんはあれを認めているのか、影武者の存在意義は、なんのための護衛だ、俺が着く前に死んでたら全部台無しだったぞ、だいたい

「わ、悪かった。すまん謝る」

レティーシアを知る者たちは、怒るというより感嘆していた。

(おお、あの姫に謝らせたぞ)

「まだ言い足りないが、まあ許そ。そんで誰が皇帝かな」

「わたしだ。娘が迷惑をかけた。」

皇帝は、髪を伸ばした、威厳のありそうな男だった。

それにもしても、皇族に対する無礼を受け流すか、ずいぶん器の大きい男だな。誰も騒がないところを見るとこれは、身内だけの会議らしいな。

「まあ、まず自己紹介からしましょうか

「やうだな、わたしはクルト・クイントーの国の皇帝だ。」

皇帝の左側の女性が

「アイリス・クイントよ。皇妃よ」

右の男が

「アッシュ・クイントです。一応皇太子をやっています。」

優男みたいだが、目に力のある青年だ。

「アリシャ・クイント。第一皇女」

第一皇女と名乗つたが、明らかにレティーシアより小さい。その上、

表情があまりない子だな。

「一応名乗らうレティーシア・クイントだ。第一皇女だな」

「ゲオルグだ。将軍をやつている」

老将軍といった感じの軍人だな。

「じゃあこっちだな。俺は、ジン異世界人だ。神のバカにこの世界のことを頼まれこの世界に来た。」

「ソフィアです。ジン様の付き人のよつなものです。」

「イリヤです。ご主人様に仕えております。」

「リリスです。護衛をやっています。まあジンには必要ないんですが。」

「ティリエルです。銀龍です。」

「テツ。主の小太刀」

ある程度聞いていたのだろうとくに質問はなかつた。

「自己紹介も終わつたことだし、話に移りつつ。」

「せうだな。そちらの目的は何だね?。」

「要求じやがない提案だ」

「提案?」

「そうだ。魔物の大侵攻については聞いたんだろそれを一緒に防がないか、ていう提案」

「それについては、一応起らるものとして行動することになった。わたし達としても協力体制を敷きたいと思っていた。」

「それはありがたい、これからよろしく」

二人握手を交わす。

レティーシアのおかげか簡単に話がついたな。

「しかし、それには問題もある。軍を動かせば、他国が黙つていな
いだろう」

「他国は巻き込むしかないだろうな、巻き込まないと攻められる、
そうなつたら魔物の大侵攻を知っていても王の立場上動けないだろ
うし、元々魔物の大侵攻は、皇国独力では厳しい」

「田の前の問題もある」

「グーロム王国か、外の様子だと宣戦布告でもされたか」

皇帝は、田を見張った。その情報は、ここにいる者しか知らないはずだからだ。

もつとも感づいている者はいるだろうが、それは少数で情勢に詳しい物だけだ。その少数に入っていることが異常なのだが。

「ほかには、他国を巻き込む方法か、それは後回しにしよう。まず
この戦争だな」

「他国を巻き込むことについては、この戦争に勝てればを何とかなるだろう。勝ち方にもよるが、かなりの発言力を持つるはず。その

ためにジン殿力を貸してもらいたい。」

「わかった。それだと勝ち方が問題だな。」

「話が早くて助かる。では、戦争に関する話に入つても」

「お願いする。しかしながらは一国の王なのでしょうもう少し上から田線でもいいと思うんだが」

「いいのですよ。ここには、身内しかいませんし。戦力についてですが、グーロム王国は

奴隸兵	5万
戦闘奴隸	1万
兵士	2万
貴族の私兵	2万

の約10万こぢらは

兵士	5万
貴族の私兵	3万

の約8万の兵がある

「それなら正面からでも勝てるんじゃないか？5万は奴隸何だろ？」

「三つ問題がある。一つ目は、クイント出身の奴隸がいること。二つ目は、戦えば損耗は避けられない。三つ目、これが一番問題なのだが、わが国の北側の国境付近にカルモンド王国の軍が近づいているその数5万これが問題なのだ。宣戦布告はされていないがあの国

の王は、グーロム王国と仲がいいのだ

「どうするつもりなんだ？」

「損害を小さくして勝つ方法が今のところない」

しばりく考える。

「俺にいくつか案がある」

「おお、ありがたい。聞かせてくれないかね」

「まずはな・・・」

こうして二人の間でポンポン話が進んでしまい。周囲は、口を挟む隙もなく果然として一人を眺めて終わってしまった。

「二人は、何か打ち合わせをしていたのでしょうか？」

「いや、していないと思つが」

レティーシアとニアさんがそんな会話をしていると

「これなら何とかなりそうだ。アッシュ、ゲオルグ将軍の方針で以降と思つただが？」

「問題ないと、思われます。」

「それで進めましょう。」

「レティーシア」

「ん・・は、はい」

レティーシアは、呆けていた。

「お前にジン殿の副官を命ぜる補佐するよつ」「元

「はつ」

「アッシュ、ゲオルグあとは頼んだぞ」

「はつ」

一人が、部屋を出て行く。

「ところでジン殿後の女性は、君の女かね」

「はいつ？」

「いや、君が複数の女性を愛する男ならレティーシアもむづだね」

「な、なにをいつているのですか、父上」

レティーシアが、照れている。脈アリなのか？しかし

「何が目的ですか？」の間に留めておくためですか

「そんなに深く考えなくていいよ。先程娘を叱つて謝らせただろう。あれは、おてんばでなかなか嫁の貰い手がなくてな君ならばと思つてな。あれも君を気に入つていてるようだし」

「なつなな」

レティーシアが超照れている。どちらかといつと綺麗といつ感じだが、意外と可愛い所もあるな。

なんだかこの流れアルベルト（ティリアルの父）のときと似てるな。

「まあ、すぐでなくともいいさ、今は戦時だからね。」

その戦時に娘の縁談の話かよ、図太いやつだな。

「それじゃあ失礼するよ、特訓しないといけないからな。」

後ろの水の精霊術師の方を向って

「がんばるぞ、ソフィア」

22話 燐城と皇帝（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

23話 戦場へ

異世界32日目

宣戦布告から一週間後俺達は戦場にいた。

「時間がありません。急いで陣地を組んでください」

陣地設営の指示を出しているのは、アッシュュ皇子だ。
総指揮は、ゲオルグ将軍が執っている。

「アッシュュ、俺は手筈どつり時間稼ぎと、仕込みをやつてくれる。」

アッシュュとは、すぐに気安い中になれた。アッシュュにとって身分を
気にしなくていい相手は初めてで、付き合い易いらしい。

「お願いします。なんせこの戦いは、あなたにかかりているのです
から」

そうなのだ。ここにきているのは兵は三万のみ残り五万は、カルモ
ンド王国との国境の近くに行かせてカルモンド王国軍を牽制してい
る。俺達は三分の一以下の戦力でそれも野戦を行わなければいけな
いのだ。国境を越えられると国民を奴隸にされるから国境付近まで
出るしかないのだ。

「テツ行ける？」

「はい、大丈夫です主」

「わかった。アッシュュ、行つてくれる」

「行つてらっしゃい」

俺は、敵軍が来るであろう方向に向つて走り出す。

時間稼ぎ自体は簡単だった。

まずは地の精靈で落とし穴を作る道具を使わない天然の落とし穴だ。次に水の精靈で沼もどきを作る。

これを行軍進路にいくつか作つただけだ。

それだけで行軍速度は落ちた。

あるかもわからないものを気にしながらの行軍は、格段に落ちるし沼も人数が多くて迂回するのも一苦労なのだ。

「ええい、なにをとろとろやつている。」

グーロム軍のコートル将軍は苛立つていた。この戦争は、コートル将軍にとって勝ち戦なのだ。將軍としては、さっさと勝つて報酬と奴隸を手に入れたいのだ。

実際この戦いを勝ち戦と見て予定より貴族共が多く集まっている。まあ集まつたっても奴隸商からのなりあがりの貴族ばかりで、昔からの貴族は不参加だったが。

「兵が落とし穴を気にしているようですね

これはラシード将軍だ、レティーシア皇女を捕まえられなかつたため、コートル将軍の補佐をするはめになつた。

「そんなもの、指輪の力でゼウスのでもしれ」

奴隸を兵隊にするときは、一度奴隸を王の下に集めそのあと命令権を与えた指輪を将軍に『与える』、という仕組みをとつてこる。そこからさらに奴隸を指揮するようために命令権の一部を指輪に移譲して士官に渡していく。実際問題、五万の奴隸を一人で指揮できるはずがないのだ。そのために、指輪を与えて指揮をやせるのだ。

「それは不可能です。穴を無視しようと命令すれば、穴に気づいても落ちていくことになります。それに後続も避けずに進むのでそのまま落ちてしまいます。」

「ちつ、所詮は奴隸か」

奴隸にしたのも奴隸を取り入れたのもグーロム王国ゆえだろ？
、アラシードは思ったが、口には出せなかつた。

「このままいくと着くのは、夕刻ですな。決戦は、明日にした方がよさそうですね。」

「そんなこと知るか、こちつは三倍以上なのだ。ついたら夜だらうと攻撃を開始する」

「こつは疲労のことは考へないので、アラシードが呆れていると

ドン・ドン・ドン・ドン

（来たか）

一度爆発音が聞こえ外が騒ぎになつてゐる。これなら今日の決戦は

さすがにないな、トライシード将軍は落ち着いていたが

「なんだ、何の音だ」

『コードル将軍にとっては、それどころではないらしい。

「『炎爆』」

これの技は、殺傷能力はかなり低いが爆音と衝撃が強いくらいで混乱させることのが目的のときは、大いに役立つ。一応直撃はさせないよう全体に満遍なく『炎爆』を落とした。程よく混乱したら地中から潜入する。案外地中が一番発見されないので。

潜入したのは、戦闘奴隸一万の軍団でそこで孤立しているやつを探す。

いた、少年だ。風の精霊を使って音を消して後ろから近づき少年を物陰に引きずりこむと同時に首輪の契約を破棄する。

「えつ」

少年は驚いて首の手を伸ばす。引きずり込まれたことよりも首輪が外れたことに驚いているようだ。

次第に落ち着いてきたのだらう。感謝を、言つためか大声を出されそつになつたので口を押さえ黙らせる。

「静かに」

コクコク

「時間がないんだ。頼みたいことがある」

言いながら手を離す。

「何でも言つてください」

奴隸から解放されただけで「」まで信頼されるのか

「戦闘奴隸のリーダー格つてわかるか？」

「何人かはわかります。」

「居場所に、見つからないように案内してほしい。」

「わかりました。お名前を聞いてもよいでしょうか？」

「ジンだ、君は？」

「僕は、レイトといいます。」

陣地内を移動して

「あの人です。」

「」に呼べる？」

「はい、呼んできますか？」

「頼む」

レイトが男に近づいていて何事か話すすぐにこちらに来た。

「レイトイいものってなんなんだ？」

それで釣れるのかよ、まあ見た目からしていかにもなマッシュチョではあるが。

レイトの時と同じようにして氣づかれなによつに首輪をはずす

「え？」

レイトと同じ反応だな。

俺は、これを何度も繰り返し敵陣地で味方を増やしていくた。数が増えたら作戦を説明し、さらに数が増えていくと誤魔化す係りや説明する係り、奴隸を連れてくる係り、捕まえる係りと効率を上げていった。

その後リーダー格の人達に後を任せて皇国軍に戻った。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

レティーシアとソフィアが迎えてくれる。

ソフィアとテツとレティーシア以外の女には、後方に下がつてもらっている。イリヤを医療関係のところに行かせてリリストテイリエルは、その護衛についている。

「しかし、以外だな。君の女達あつさり後方に下がつたんだな。冒険者風の女とか来たがると思ったんだけど」

「それはですね。それがジン様のためになるからですよ。ジン様は、私達が戦場にいるどぞしても気にしますから。」

「ありがとな、ソフィア」

ソフィアの頭を撫でていると

「主、わたしも」

テツが人に戻り、おねだりしてきたので
片腕で抱き上げてテツの小さな体の感触を楽しむ。

「ジン殿には戦場たぞ」

レティーシアが怒ったので

「わるいわるい」

俺は謝罪すして、テツを降ろす

「羨ましいんですか？」
「羨ましいんですね。」

「ち、ちがうもん」

自分の叫んだ言葉を思い返したのか、真っ赤になつて無言で走つて
逃げていつた。

「今の可愛かつたな」

「やりますね。皇女様」

「主に気があるの本当みたいです」

「やっぱりそうですね、皇帝も一人を認めるようなことを言っていましたし
仲間になるかな？」

俺は、一人がレティーシアについて話しているのを聞きながら陣地を見渡す、3倍の敵と戦うのにみんな諦めていた。希望を持つていたのだ。この状況で希望を持たせることのできるこの国は、やはり良い國なんだろうな。だからこそ絶対に勝つ。

「やれることは、やった。後は戦つだけだ。まあ完勝するべ

「「はい」」

23話 戦場へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界33回目

グーロム王国[軍側]

「なんだ聞いていたのよつたらに少ないではないか」

「一トル将軍は、敵の数を見てほくそ笑む

「やつでござりますね」

副官が相槌を打つ。ラシード将軍は、自分の部隊を率いている。

「いやから仕掛けてやる。全軍に伝令、あのよつな陣地正面から粉碎せしめろ」

クインント皇國[軍側]

ワアアーー

「来たな」

「ええ来ました。手筈どつり陣地内まで引き込みます。」

「ああ頼むぜ、なんとか持たせてくれよ。」

「わかつていますよ」

しかし、この陣地には、今一万しか残っていないのだ。残りは、伏兵として左右に、一万ずつ伏せている。
旗を増やしたり陣地を使って数をこまかしている。
一万で十万を受け止める時には不安がある。
不安が顔に出ていたのだろう。

「大丈夫です。相手は奴隸兵こちらは、正規兵です。見事に釣つて見せます」

「わかつた。信じるよアッシュ」

「全軍迎撃準備、各部隊長は手筈どりじこ

一番隊から十番隊まで作り各部隊長に千の兵を持たせたのだ

「敵近づいてきます。」

「弓構え・・・放て」

この矢のさきは潰してあるが、万の軍が動く戦場では、死者も怪我人もである。

だが、もちろん被害は普通の矢に比べ少ないのは、当たり前だ。
その代わり勢いもあまり落ちないまま先頭の部隊がぶつかり合つ。
初撃を受け流すと

「一番隊と二番隊は、後退してください。七番隊と八番隊はその援

護を

この陣地は元々逃げやすく作っているのだ。

第一と第二部隊は難なく後退をこなし、追撃してきた敵を七番隊と八番隊が攻撃する。一番隊と二番隊は、体制を整えたら部隊の援護に回る。これを繰り返しながら戦闘を行い敵を引き連れながら後退する。

これを難なくこなすのは、皇国軍の練度の高さの賜物だらう。

グーロム王國[軍側]

「いいぞ。押していくのまま一気に全軍で攻め落とせ。」

「一トル将軍には、それがわからず意氣揚々と指示をだす。

「全軍で、ありますか？」

「やつだ、やつてみじか！」

隊長達は、渋々言われたとつ全軍が前進した。

皇国軍側

「思つたより早く。後続がでて来ましたね。」

アッシュュが、嬉しそうな表情を浮かべる。

「よほど、けらえ性のない将軍なのでしょうな

副官が相手の將軍を評価する。その評価は見事に当っていた。

「ではそろそろ。全軍、全力で後退してください。ジン殿に伝令を」

ジンの側には、ソフィアとレティーシアあと小太刀のテツがいた。

「ジン殿、アッシュ様から『いつでもやつてくれ』のことです。」

「了解。ソフィア準備はいいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、いくよ」

俺は、そういうソフィアの手を握る

「水の聖痕発動『水龍』」

水の精霊が俺とソフィアを、包む。

「『水翼』」

さらに背中に、大きな水の翼ができる。

『水翼』は、大量の水を使うための準備だ。

「ソフィアは、危ないとthoughtた人を助けることだけを考えて」

「はいー。」

「いくよ。『陸津波』」

次の瞬間、翼から大量の水が噴出し、大量の水は制御され津波になる。陸に出来た2メートルの津波が五万の奴隸兵を押し流した。

ジンとソフィアは、この技そのものより、呑み込まれた人間を助けることに全力を尽くした。

ソフィアとの修行とは、この共同作業のことだったのだ。

溺れそうな人間を、波から出したり、流された武器を安全なところによけたり、何かにぶつかりそうな人をそらしたりした。

陸の津波があさまった時五万の奴隸と後続の突出していた正規兵五千の兵が左右に押し流されていた。戦線復帰は不可能だろう。

「すごいな、これがジン殿の実力の一端か。」

アッシュは、しばらく呆けてしまった。その間に空に、青い光が撃ち上がった。

ジンが、光の精霊術で出した合図だ
この合図を、待っていた複数の人間がいた。

例えばクイント皇国軍には、
アッシュ皇子が、

「合図だ。騎馬隊を先頭に、突撃してください。魔術師はその援護を」

アッシュは、今まで温存していた九番隊と十番隊の騎兵一千を出し

て正面から反撃にでた。その後ろを、馬に乗った魔術師千人がつづいく。

伏兵の指揮をしているゲオルグは、

「合図じゃな。一気に攻める。我らの目的は、貴族の私兵二万のみじゃ、それ以外は、手柄にならないと思え。突撃！」

次の瞬間一万もの伏兵が、地中から現れた。ジンが土の聖痕の『岩皇』を使って作った地下の空洞から出てきたのだ。ジンが、敵軍の足止めをしていたのは、彼らをここに伏せる時間を稼ぐためだつたのだ。グーロム王国はこの空洞を知らないため伏兵に対して無警戒だった。

さらに敵軍を挟んで反対側には、ゲオルグの副官が、同じ内容を叫んで突撃を仕掛けた。

グーロム王国では、

戦闘奴隸の一角のレクト達が

「合図ですムガルさん」

ムガルとは、レクトの次に解放した戦闘奴隸だ。レクトをつけて後を任せた一人だ。

「見えとるよ。」

彼の目の前では、部隊長だつた者の死体がある。この時、いたるところで奴隸を操る指輪持ちの部隊長が不意討ちで戦死していた。

「虜げられるのは今日で終わりだ。俺達には、救世主のジン様がついてる。ジン様の頼みで今から貴族共を殺しに行く。いいか野郎ども」

「「「オオオ——」「」」

「ここにいるのは、五十人程だが、解放した戦闘奴隸は、一千いる。

「救世主様のために」

「「「救世主様のために」「」」

一千の奴隸が牙を向いた瞬間だ。

正規兵の一角ではラシード将軍が

「私は、民達を守るためにこの国を捨てるついてくれるか?」

「我らラシード将軍と共に」

彼らは、ラシード将軍に鍛えられ、ラシード将軍を尊敬している兵達だ。その数五千。

「ありがとう。これよりコートル将軍を討つ。ついてこい」

ラシード将軍と五千の兵が、駒から人に戻り。反旗を翻した。

合図を聞いた五ヶ所が反撃に出たとき、ジンはティリエルの背に乗

り空から戦場を見渡していた。ティリエルも合図を見て行動した一人だ。

戦場は、すでにほぼ決着がついていた。

奴隸兵五万は、すでに『陸津波』により左右に割られており、元々高くない士気が全くなくなっている状態で騎兵を止められる筈もなくほぼ素通りして貴族の私兵に肉薄する。

戦闘奴隸一万は、指揮官をすべて失い、何もせずに伏兵一万と元戦闘奴隸一千を、貴族の場所に通した。

正規兵二万は、五千を『陸津波』に呑み込まれ、さらに五千に裏切れ半分になっていた。残った一万もラシード将軍を見てどうすればいいのか分からなくなりラシード将軍と合流したゲオルグ将軍率いる一万に簡単に突破されてしまう。

こうして

貴族の私兵 二万

対

三千

正面

一万二千

右

一万五千

左

の三万の戦闘入った。

貴族の私兵は、何とか抵抗しようとするが、『陸津波』を見せられ動搖しているところに、突然の三方向からの攻撃に組織立った抵抗ができず簡単に崩されていく。

それに比べて攻める側の、皇国軍、ラシード将軍の兵、元戦闘奴隸と三種類の人間が混じっているにも関わらず、かなりの連携が取れている。

この時、指示していたのは、戦場の流れを空から見ていたジンだ。風の精霊を使って各リーダー格に命令を出し、合流させ連携を取ら

せていた。空から戦況を見ていたジンには簡単なことだった。

グーロム王国側は、

「なんだこれは、なぜこんなことになつていてる。」

命令を出すべき『コートル将軍』は呆然としていて、碌に命令も出せていない。

しばらくして自分を取り戻した時の第一声は

「もう無理だ。私は、逃げるぞ」

とだけ叫び一番最初に、逃げたした。元々將軍の器でわなかつたのだ。それを見た他の貴族（奴隸商人でもある）達も我先にと逃げ出す。逃げる彼らの道は、後方しかない。

前方は三千の敵と五万の奴隸の壁その後ろには七千の敵、左右には一万を超える敵がいる。彼らが後方を選んだのは必然だつた。しかし、その必然は作られた必然だつた。

後方には、『嵐帝』を発動したジンが待つていたのだ。

『コートル将軍』がジンを見かけた時すでに辺りは血の海だつた。すでに逃げよつとした者がいたようでジンは、『嵐帝』の広範囲索敵を使い後ろ側に逃げてきた敵をすべてを殺していた。一人残らずだ。

「お前が『コートル将軍』だな。その首貰つぞ」

ヒュン

小さな風の音がした。

それだけでコートル将軍は、首を体から切り離され絶命した。この時のジンは、口以外全く体を動かしていなかつた。

コートル将軍の首が風に運ばれジンの近くに落ちた次の瞬間、

「『削嵐』」

逃げてきた貴族とその私兵は、声を出すこともできずに無数の風の刃にすり潰されて肉片になった。

間もなくして、正規兵の指揮を取っていたグーロム王国側の最後の將軍が降伏勧告を受け入れ戦いは、終わりを告げた。

こちらの被害は死者百人、怪我人が七百人ほどだ。

グーロム王国側は、貴族の私兵二万のほぼすべてが戦死、それと正規兵に少し死傷者が出た。

文句無しの完勝だった。

この場の戦いは終わつたがまだまだやることがある。

俺は簡単な後始末を終わらせて一人に

「アッシュ、ゲオルグ将軍作戦の第一段階に移りたいと思つ。」

「わかった。ゲオルグ将軍後はお任せします。」

「わかりました。」

「さあ行くぞ、王都へ」

異世界34日目

休まず馬を走らせて（俺は自分の足で走つたが）何とか次の日には、王都にたどり着いたその数は、騎兵八千その騎兵が王都の四つの門を2千ずつ付き東西南北の門を封鎖している。この八千は、皇国軍五千頭とラシード将軍率いる千頭、残りの一千頭は王国軍から奪つた馬だ。八千もの騎兵はそうそつ見れるものではない。

「ラシード貴様、娘がどうなつてもいいのかー。」

今城壁の上で肥満体型の男が、首輪のついた小さな女の子を引き連れてラシード将軍を脅している。

驚きはない、以前ラシード将軍と戦い今回の謀を持ちかけた時に、何故現政権に逆らわないのか聞いたら、娘を人質に取られていることを聞いていたのだ。

「ジン殿頼む娘を助けてくれ」

もちろんだ。

今のラシードには、俺と戦った時の雄壮さはなく娘を出され精神に余裕がなくなつてゐるようだ。

「大丈夫だラシード。お前を連れて来たのは、お前がいればあいつらがお前の娘を連れて来るとthoughtたからなんだ」

「どうじつ意味だ？」

「つまり外に連れて来てくれれば絶対に助けられるってこと……」
雷の聖痕を発動『雷神』

次の瞬間には、雷速で近づいた俺は肥満体型の男からラシードの娘を奪い取つていた。

「な、
に」

呆然とする男を無視して城壁の上から飛び降りる。雷速で逃げるのは、女の子が耐えられないからだ。

「ひやく」

女の子の悲鳴を上げている。良い悲鳴だ元気そうだな。
気付いた兵が矢を射かけて来るが、すべて雷で焼く。

地面に降りるとすぐにラシード将軍の元に行く。

「おお、フローラ良かつた本当に良かつた」

「お父さん、うひ」

「どうしたー、フローラー。」

突然フローラが苦しみだした。首輪の逃亡防止のための機能だらう。
すぐに、首輪を外してやる。

「あつ
「なつ」

きょとんとしたフローラがじゅう見ている。
頭に手を置いて

「もう大丈夫だよ。君は自由だ。」

フローラの目から涙が零れた。そつなるともう止まらず泣き出しへ
しまう。

ラシード将軍が、娘を抱き締める。

その場を離れ

「アッシュ降伏勧告は、すんだか」

俺の声はかなり冷たくなっていた。

「その返事が、あの子だつたんだよね」

「そうか。じゃあ適当に殺して来るから」

「気を付けてください」

「誰にいつてんだよ。」

俺は、そのままにしていた『雷神』の力で城壁の上に戻る。そこから、一方的な殺戮が始まった。

人間が雷速に、反応できるはずもない。めぼしい者を雷で殺していく。

奴隸と女子供以外をあらかた片付けると城門を開けて外で待っていたアッシュュ達を中に入れる。

その後王都からも人を集め城の庭園に来てもらひ。

庭園には、皇国兵、王国兵、国民、奴隸達にラシード達が集まっていた。

そこに、俺は一人の男を放り出す。

「ひい、わ、わたしを誰だと、お、思つている

男をこの国の王を無視して。

「呴き聞いてくれ。この男は、この国の王だ。此度の戦争はすべてこ

の男がやつたことだ。そして私は、この国と奴隸制度を否定する。この男は、その象徴だ、ゆえに俺が判決を下す。そして俺は奴隸のいない世界をつくることをここにて宣言する。」

周りは状況をあまり理解できていないようだ、構わず

「『炎蛇・四首』……消えろ、元凶」

俺は男を四肢から炎蛇に食わせる。喰われた部分は、焼かれ血はないそのせいで失血死はせず長い苦しみを味わって死んだ。死刑のあと男の存在したはずの場所には王冠だけが残っていた。

近くに、アッシュュがやってきて

「私は、アッシュュ・クイント、クイント皇国の皇太子です。ここにクイント皇国皇帝クルト・クイント名の元にクイント皇国の勝利とグーロム王国内の奴隸の解放を宣言します。」

一時の静寂後に、ここに集まつた全ての人間が歓声を上げた。

王都は、そのまま宴に入った。

しかし俺には、仕事が残つていた。奴隸を解放する仕事だ。首輪を外しても次から次へと奴隸が来るので休む暇がない。

この戦争で、聖痕を四つも使つたのでかなり疲れていた。それでも休む訳にはいかないのでふらふらになりながら解放していた。一度寝ぼけて頭からこけてしまった。奴隸の解放は、見かねたテツが止めるまで続いた。

「ありがとうな、テツ。実は結構限界だつた。今日は、一緒に寝よう」

「はい。お供します

俺は、城にあつた一室でテツを抱っこして眠りについた。奴隸兵五万と戦闘奴隸八千のほうは、城からマスター・キーが見つかりどうしても見つからなかつた少数だけですんだ。あぶなかつた六万近い人間を解放していたらぶつ倒れていた。

異世界35日目

マスター・キーがみつからなか五百人の解放が終わつた時すでにお昼を過ぎていた。全員が感謝を口にするのでかなり時間がかかつた。中には忠誠を誓う者までいた。

今俺の側には一緒に寝たテツしかいの仲間達を探すことにする。つとその前にアッシュに挨拶するか。

「よつアッシュ大変そうだな」

アッシュの部屋には、紙の壁が出来ていた。

「やあジン、失敗したよ。秘書官を連れてくるんだつた。」

「レティーシアは、手伝わないのか?」

「役に立たない」

バツサリ切った

「ジン手伝つてくれないか?」

「いやだ、それに俺じゃあ大したこと出来んだろ。それより俺の女達を知らないか?」

「ああそつちの問題があつた。実は一人判断に困る人がいてね、その人の扱いに困つていてレティーシア達に頼んだんだよ」

「判断に困る人?」

「ここの國の王つて子供はいなかつた筈なんだけど。その人、「私はあの男の娘だ」とて言つんだよ。変だろ」

確かに敗戦国の王女を名乗る意味がわからない。普通敗戦国の王族なんて殺されるか良くて妾にしたりと政治の道具にされるのがおちだ。

「確かに変だな。俺も女達に会つてみるよ。」

居場所を聞いてその場に向かう。

26話 忘却の王女

教えてもらつた部屋に行きノックすると中からソフィアが顔を出した。

「ジン様ー！」無事で

「ジン」「お兄様」「じ主様」

聞き付けた三人が飛び出してきた。なんとか三人を受け止める。

「みんな元気そうだな。中の人に会わせてくれる」

中に通してもらい自称王女に対面する。

見た目は、森を思わせる深い緑色の長い髪。顔立ちはかなり整っているが、どことなく表情が硬い。体は小さく10才を越えた辺りだろうか。

「はじめまして俺はジン、君は？」

「これはどうも私は、ミコーと申します」

傍目にはわからないが、どことなく不安定な感じがする。

「みんな外で待つてて」

「ジン様、彼女に王女についての話をするなら氣を付けてください」

「わかった

みんなを外に出す。

バタン

「それで何が聞きたいんですか？」

「君は何者だい？」

一瞬ピクッとなつたが

「私は」の國の王女です。」

「どうして王女を名乗つたんだい？」

「王女が王女と名乗るのがおかしいですか、英雄さん

「知つていたか」

「ここから見ていました。」

なるほどここは昨日の庭園がよく見える。

では、俺は仇になるのか

それにしては、彼女から憎しみは感じない

「どうして王女になりたいんだ？」「

「ですから」

苛立たそうにしたミリー

「いやこの際君が王女かどうかは問題じゃないんだ。」

「な、何で？」

あきらかに動搖だ

「君のことを知っている人がいない以上、君は王女になれない」

「そんな」

彼女は、かなりの衝撃を受けているようだ。

「この国の高富の、ほとんどは死んでいるんだが、君を知っているのは？」

彼女の言つたのは重臣ばかりでようある王室のよつな奴らだった。つまり俺が殺している確認はできない。

「王宮でその人数しか知らないということは、君は何処かの村で王富とは直接関係なく生まれたんじゃないかな？」

「そうです。私は妾ですらない女から生まれて。数年前に連れてこられました。」

ミリーの声が低くなつた気がする。

それでも続ける

「なら村には帰れないのか？」

「私の村は燃やされました。」

「・・・」

「私はこの国に全て奪われました。私の家族は殺され、村は焼き払われ、忘却の魔法で名前を忘れさせられ偽りの名前を『えられ。娘と呼ばれながらも、わたしの立場は伯爵の娘でした。そしてほとんどの間ここに監禁され教育だけを受けていました。」

ミニーは、全てをぶちまけるように語る

「もう私には、家族も生れた村も名前すらありません私には、何もないのです。確かなものが、信じられるものが、なら愚かであるとのこの国の王女でいなければ私は何なんですか？教えてください私は何なんですか？嘘で着飾った私は何者なんですか？」

空虚な顔に涙を浮かべた彼女を見ながら思つた。

この子は俺に似ている。

一度世界との繋がりをすべて失い自分のことがわからず、とても不安定になつてゐる。

違うのは、俺は自分で選び、ミニーは奪われた。

「たしかに君は何者でもないのだろ?」

「ツ、そう、ですよね」

絶望に打ちひしがれるミニーに俺は近づき脇に手を入れ抱き上げる。

「な、何ですか？」

できるだけ声に力を入れて話しかける

「何者でもないのなら、何者かになれば良い、まずは名前を『』えてやる。これから一生使う名前だ。」

「名前?」

「そうだ。そうだな・・・・・・・今から君はフェリスだ。」

「フェリス?」

「そうだ。フェリス何か好きなことや得意なことはないのか?」

「えつえつ」

この時女の子は、ジンの勢いに呑まれていた。

「何があるだろ?」

「えと、料理が好きです。」

「上手い?」

「と、得意です。」

「なら俺のところで料理人をしないか?」

「え、なんで」

「俺の仲間で料理が得意なやつがいなくてな。」

「そうじゃなくて・・・なんで、そこまでしてくれんですか?」

「俺も似た経験がある。その時、俺はすぐにソフィアたちに出会えたから大丈夫だった。」

「え?」

「だから、俺が居場所になつてやるよ、名前もやる、だから新しい人生を歩んでみないか、君には未来も自由もある、これから君は何でもできるんだよ。確かに君は一度終わったのかもしない。だけど、もう一度俺の側で始めてみないか?」

「あつ、わたし」

フュリスの目から涙が溢れる

「いいんですか?」

「おいで」

フュリスになつた女の子は、ジンの胸に顔を埋めて

「わあ――――」

大きな声で泣き出した。

「はじめよつ、新しい君を」

フェリスは落ち着つくと

「ありがとうございます。それで、そのお願いがあるんです」

恥ずかしそうに

「あのジンちゃんの」と、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「えつ」

「ダメ？」

「いや、いいよ」

それだけで、顔を輝かせてくれた。
ティリエル、なんて言つかな。

「フェリス仲間になってくれる？」

「はい」

新しい仲間が加わった。

そこで外の皆を呼び戻した。

あらためて自己紹介をした。みんな名前が変わったことに驚いていたがフェリスが名乗った時にとても嬉しそうに笑ったのを見て、なにも言わなかつた。

ただ、ティリエルは

「お兄様は、私のお兄様です」

「お兄ちゃんになつてくれるつていつたもん。だからお兄ちゃんは、
私のお兄ちゃんだよ」

フェリスが子供っぽくなつてゐる。こちらが素なんだうな

「む~」
「う~」

「いひ、二人とも仲良くなさい。」

二人を左右に抱き抱えキスをする。

「お兄様」

ティリエルは、うつとりしていつたが

「~~~~~ツ」

フェリスは、言葉にならない悲鳴を上げ、顔を真っ赤にしていつる。

フェリスは、初々しいなと和む。

「そついえばアッシュに話通さないとな。ついでに皇國に帰ぬ」と
も話すか、皆それで良いか?」

「はい。いいですよ。」

ソフィアが返事をして他の畠も頷く。

「セリィえーはレティーシアは、じつあるんだ？」

「私も戻る。事務仕事は苦手だ。」

うん、アッシュも期待していなかつたみたいだしね。
今日は、もう遅いから帰るのは明日だな。

「よし、畠で夕食にしよう」

「はー」

アッシュに、フェリスは俺が預かることになったことと明日京都に戻ることを伝えた。戻ることを伝えた時泣きそうになっていたが男の涙なんかに興味はないので無視だ。

27話 新しい我が家

異世界36日目

皆で朝食を取つてゐる時に

「そういえばフューリスの位置付けってどうなつたのだ？」

レティーシアが聞いてきたので

「料理人兼メイドだな。」

「まあ、メイドはなんとなくわかつていたけどね。あの格好だしね」

俺の隣のフューリスは、メイド服を着ていた。少々幼いが服装は正統派のメイド服だ。ちなみにイリヤも対抗してメイド服を着用している。一人とも可愛い、フューリスは小さなメイドでイリヤはエルフメイドに仕上がつている。

「料理得意なんだ」

「はー」

「IJの料理もフューリスが作つたんだぞ」

「え、そうなの。いつもの料理と比べても遜色ないよこれ」

「はい、とってもおいしいです。」

「すういのね。まだ小さこのこと」

「小さいは、余計です。」

そつ言いながらフヨリスも満更ではないらしい、頬が緩んでいる。

食事も終わった頃に、アッシュが訪ねてきた。

「やあジン、お密さんが来てるよ」

「お久しぶりです。ジンさん」

そこには、ギルド職員のクレアさんがいた。

アッシュにクレアさんを皇国に送るように頼まれ何がなんだかわからぬまま城を出ることになった。
道中何をしに行くのか訊くと

「ギルドマスターは基本一国に一人なんです。普通は戦争などで国が潰れたり増えたりした時に採めるんですけど、今回はうちのマスターがあっさり降りたんです。そしてギルドマスターがいるところが冒険者ギルドの本部になるので、それで皇国のギルドの方といろいろ調整するためにわたしが赴くことになったんです。」

「大変だな。わざわざ皇国を行き来するなんて」

「いえ、そうでもないですよ。もともと皇国には興味がありましたし、それに向こうに住む予定なんです。」

「え、住むの?」

「はい、まだ住む家は決まっていませんけどね。」

「またなんで?」

「毎回報告に戻るのも面倒ですし、それに興味があるんです。英雄様に」

「ぬ

「む

「あらあら

「一名様追加

「なはは

女達の反応はそれ、それだな。最近の英雄といえば俺しかいないからな。

「あ～まあよろしく。」

「ええ、よろしくお願ひします。」

異世界38日目

皇国の城についた時、俺達は国賓待遇でもてなされた。召し使い達が左右に立つて道ができるている。

「ジン様、ご無事で」

たぐわんのお迎えの中からリコトさんが出でて迎えてくれる。

「皇帝がお待ちです。」カラビビツ。

クルト皇帝の執務室に案内された。

「よつくりと久しぶりだな。」

「ジンくん、ありがと。君のおかげで問題がいくつも解決したよ。単純な意味での脅威であったグーロム王国を潰してくれたのをはじめ、グーロム王国内の奴隸推奨派の貴族達の殲滅、ラシード将軍の引き入れに奴隸の解放これらすべて君がいなければなしえなかつた。」

「といつても、まだ問題は残つているだる。一応戦場の貴族と王城の貴族はすべて始末したが残党はいるだる。ラシードだけにグーロムの軍を任せるわけにはいかないしな。元王国領が落ち着くのはいつ頃になりそうなんだ?」

「半年以内には一先ず終わらせたい、他国に集まつてもらうのに時間がかかるからな。それまでには終わらせないと魔物の大侵攻に対して動けないかもしれないからね」

「半年か、実際に元王国領を立て直すのまだ先になるのだろうな。一先ずといつのは、本当に緊急の要件だけを片付けるのだろう。」

「まあそれまで俺はゆつべつさせてもらひよ。」一ヶ月忙しかったしな。」

「おおそろかゆつべつするのか、そこでだ、どうだねジンくんゆつ

くつするためには自分の屋敷など欲しくはないかね？」

「なんだよ、突然」

「いや、君への報酬を考えていたんだよ。先程言つたとおり君の戦果は計り知れんそれで報酬に関して悩んだ結果、その候補のひとつが屋敷になつたんだよ。どうだね？」

「そうだな、ありがたく貰つておこうかな。」

「あれ？ 意外だな。君はどこかの国に肩入れするのは嫌がると思つていたのだが」

「まあな、でもいつまでもどこかの宿屋に泊まるのも問題だし、それに屋敷は報酬なんだろ。それに帰る所があるつていうのは良いことだからな」

帰る家があるのは、割と重要だと俺は考えている。

「そうかい。それはそれとしてレティーシアについては、考えてくれたかい？」

「俺としては、歓迎なんだが國としてどうなんだ？」

「たしかにすぐに結婚というわけにはいかないな。だから今は一緒に屋敷に住ませてやつてくれないか？」

「ち、父上！」

縁談は以前にきいていたが今度は同居の話まで出てきたのだ黙つて

いられない。まあレティーシアは、怒っているとこうより恥ずかしがつてているようだが。

「俺は構わないが、屋敷は大きいのか?」

「まあまあ大きいよ。それでレティーシアは、どうするんだい?」

「わ、わたしは」

「ジンくんの側には魅力的な女の子がいっぱいいるようだが、このままでは出遅れてしまうぞ」

「うへへ、・・・・ジン殿そのへ厄介になつてもいいのだろうか?」

「もううひん

「よし決まりだ。それじゃあ、屋敷の場所は、ミリアが知っているミリアに案内してもらつてくれ」

「わかった」

そして俺達は、ミリアさん先導のもと俺達の家になるところに向つた。

「「「でかい」「
「「「大きい」「
「

「確かにでかいな。」

「ミコアを見ているんですか！」

ソフィアに怒られてしまつた。

「ミコアさんの胸」

「確かに大きいですけど、今はそつちじやありませんお屋敷のことです」

大きいを連呼されミコアさんが赤面している。

「皇帝が言つてたじょん大きいって」

「ですがこれは」

田の前には、豪邸と呼ぶにふさわしい建物だった。軽く迷子になれる大きな大きさだ。皇族のレティーシアはともかく、ほかの女達は、萎縮してしまつてゐる。

「それだけの仕事をしたつてことだよ。」

「でもそれはほとんびり様の手柄で」

「なに言つてんだよ。俺はお前達がいるから頑張れるんだ。お前達のおかげで俺は孤独にならずにすんでいるんだからな。俺が住む以上俺の女が住むのになんの問題もないさ。」

「うへん、わかりました。」

まだ、不服そうだがその内なれるだろ？

「それでもこの規模だと掃除が大変だな」

「それなら大丈夫ですよ。私がジン様のお世話をさせていただくな
とになったので、掃除等はお任せください。」

これには、焦った。

「いやいや、それはさすがに悪いだろ。せっかく皇族付きなんだし、
それにいくらミリ亞さんでもこの規模を一人で管理するのは」

屋敷を見ても慌てなかつた俺が、ミリ亞さんという個人が関わつた
瞬間焦りだしたのを見て。

「　　あはは　　」

ミリ亞さんを含めみんなに笑われてしまった。

「主らしげです。」

テツよ、どうこう評価なんだそれは。

「ふふつこれは、私から志願したんですよ。レイトといつ名前を覚
えていりますか？」

「ああ覚えてる、戦闘奴隸一千を解放したとき一番最初に解放した
やつだ」

「レイトは私の弟です。」

そうだったのか、そういえば俺が皇女を助けた時、ミリアはどうしてもグーロム王国との交渉に行きたそうだった。弟が奴隸だったからなのか

「ジン様、弟を助けていただきありがとうございました。この恩を返すために私は志願したのです。」

言ひきつた後顔を赤らめて

「あと、その、気になるのでしたら、わ、私の胸を好きにして下さつてもいいですよ」

女達は、少し呆れ顔だ。俺としてはうれしい、ミコアさんの胸は、この場では一番大きいのだ。

「それでは夜にでも」

ポカ
ビシッ

フェリスにパンチされレティーシアにチョップをくらった。
その後その二人を何故か周りの女達が諭していた。
内容を聞いてみると内、ジンと一緒にいるなら早くなれなさい、
いつことらしい。

「でも一人だと大変だろ」

「私も手伝いますよ」

「私も」

ジンのメイドをやつているフュリスとイリアが名乗りを上げる。

「それでも三人だしなあ」

「それも大丈夫です。ジン様が解放された奴隸の方達から志願した人を国で雇つて屋敷にいれるので大丈夫ですよ」

至れり尽くせりだな。

「出来れば屋敷内は女の子だけがいいなあ。俺の女をジロジロ見られるのは嫌だし。それはそうと、いろいろありがとうございます。それじゃあ改めてようじへ//コアさん

「私はもうあなたの物です。//コアと及びください」

「わかった。//コア」

そうして俺は、新しい我が家に入った。

その夜に、ジンの寝室に//リアが訪ねてきた。

「本当に来てくれたんだ」

「来ちゃいました」

「本当にいいのか？恩とこつても弟を助けたことだろう」

ミコアははにかみながら

「ふふっ、お忘れですか、レティーシア様を助けに来て頂いた時わ
たしも助けてもらつてるんですよ」

「まあ、 そうかもしけないが

「それとも魅力ないですか？」

そういうながらミリアは服を脱いでいくそして下着姿になり。胸
を強調している。

明らかに体に自信があるし余裕もある。ならば

「いや、かなり魅力的だよ。」

そう言つてミリアを後ろを向かせて胸を両手で包む。そして氣と電
氣を使って一瞬でミリアを絶頂に導く。
この世界に来てから少しずつ性技を練習していたのだ。ミコアの余
裕は一気に消え去つた。

「寝かさないからな

「あ、ちよ、まつ、~~~~~ツ

異世界38回目

食事中にイリヤが

「これからどうするのですか?」主人様

「そうだな、今は聖痕が使えないから、使えるようになるまで、家で束の間の休みを楽しむことにする」

「それでしたら皆ちゃんと順番に楽しむところのはじりですか?」

それいいな、個人と一緒にいられる時間少なかつたからな。

「それ採用」

「わたしも賛成です」

声が膝の上から聞こえる。フェリスが俺の膝の上で食事を一緒にとつてているのだ。

料理人の特権だそうだ。毎日すると皆が怒りそうなのでほどほどにしよう。

皆と遊ぶといつことはお金を使うな今の残金は

それほど大きな買い物はなかつたがお金は消費するものなので、これまでに細かいところで使つたのが1000ギル、フェリスの服類

に1000ギルの2000ギルを使ったので

45000ギル - 2000ギル = 43000ギル

皇国軍と一緒に行動していたのであまり出費はなかったようだな。

でも「これ俺だけの金じゃあないんだよな。まあ、なんとかなるか。

・レティーシアの場合・

お昼すぎにレティーシアが俺の部屋に現れた。

「ジン殿、ぐじ引きの結果最初はわたしになつたのだが、・・・」
何をしよう?「

「確かになほとんど考える時間なかつたからな

「うーん、・・・あつ、そうだジン殿手合させをしないか、一度やつてみたかったんだ。」

「休みじゃあなくなつているが、まあいいか。中庭でやひつか

「やつた」

レティーシアが嬉しそうにしてくれているならいいか。

中庭に出て俺は木刀を、レティーシアは木剣を構える。

「はじめ」

途中で捕まえたメイドさんに合図をいてもらつ。捕まる時に手を掴んだら赤面された。メイドのほとんどは俺が奴隸から解放した人たちで、恩を感じている人が多い、中には好意を持っている人もいるらしい。

打ち合いを始める。

打ち合つてわかつたがレティーシアの剣はリリスのような戦いの場で鍛えられた剣ではなく誰かにならつたのだろう技があり型があるようだ。何かの剣術なのだろう動きが洗練されている。ただし単調で型に嵌つてている分俺にはやりやすい。

フェイントで釣つた所に懐に入り足を引っ掛け肩で押し倒す。あつさり転倒してそこに木刀を突きつける。

「負けたか」

ちょっと不満そうなレティーシアを立ちあがらせる

「しかし、依然見たときはもつと早かつたと思つただが」

それで不満そなのが、手加減したと思われたか

「手加減したわけじやないぞ、普段は精靈にいろいろ助けてもらつてるんだ。さつきのが俺本来の力だよ」

「そなのが、それでも私は負けたのか」

今度は、落ち込んでしまった。

「まあ俺の師は、刀神つまり神様だからな」

「か、神が師なのか羨ましいな」

「そつでもないぞ、あいつの修行つて滅茶苦茶だつたし。なんど死を覚悟したことか、おまけに期間が短いからつて一時期は、朝晩、飯時、寝てる時も風呂の時も不意打ちしかけてきやがつて。風呂の時なんか壁壊して女子風呂と繋がつてしまつて闇の精霊王と鉢合つし。」

「ちょっとアラウマになつていろらしい。少しトリップしていく。

「ジ、ジン殿帰つて来い。そ、それより私に対してなにか指摘はないか?」

「あ、ああそだな攻撃が単調に感じたかな、俺も未熟だからよくわからないけど、少なくともレティーシアの攻撃を受けていて驚きはなかつたな。まあその分まだまだ強くなれると思うが。」

「やうなのか、ジン稽古に付き合つてくれないか?」

「いいよ。存分にやるわ」

二人で夕方まで汗を流したが、全くといつていいくらい色気のないすゞじ方だなレティーシアらしいが。

-ソフィアの場合-

レティーシアとの稽古が終わりレティーシアに先にお風呂入つても
らつてゐるヒ、

「ジン様、次は私の番ですよ。」

「こんな時間からでいいのか?」

もつ口が沈んでいる。あまり時間もないとと思うのだが。

「大丈夫です。さつき中庭の稽古見ていたんですけど汗を搔かれて
いたので、その、一緒にお風呂に入りませんか?」

なんだこの展開、レティーシアとは正反対にとても色氣のある展開
になつてゐる。まあ断る理由もない

「じゃあ俺からもお願ひするよ

「ジン様、お邪魔します。」

レティーシアがあがつた頃に浴室に向かい、先に入つて待つてゐると

タオル以外なにも身につけていないソフィアが入ってきた。髪を頭
の上で団子にしてゐるのが新鮮で可愛らしい。

「お風呂お流します。」

「ああ、頼むよ。」

ソフィアに背中を流してもらつた後で

「次は俺が背中を流そう」

「えついいですよ。そんな」

「いいからいいから」

「ジン様手つきがいやらしいです」

「気にするな」

「あつ」

しつかりソフィアの背中を流してもらつてちょっとだけいたずらした。

体を洗つたら二人でお湯入る、もちろんタオルは外して入るので全裸だ。

やつと恥ずかしさが薄れてきたのかソフィアが

「ジン様見てください」

精靈術で作った見事な水の鳥を見せてくれた。

やっぱりソフィアの制御は、すばらしいな。この能力があったからこそ奴隸兵5万を押し流す決心が出来たのだ。
ソフィアは俺をすゞいと言つがソフィアも少しは自身を持つてもいいと思うのだが。

「すゞいなソフィアは、俺も何か作つてみようかな」

そこからは、一人で精霊術を使つたり精霊術の話をしたりして時間をすごした。

そろそろあがれうかと思ったときソフィアが型に頭を寄せてきた。

「私村にいた頃は、こんなことになるなんて思いもしませんでした。ずっとあの村で巫女をやりながら精霊術で農作業を手伝つて暮らすものと思つていました。ジン様のおかげで世界を見られました。ありがとうございました。ジン様といひつい・・ま・・・・す」

バシャ

言葉が尻すぼみになつていつて最後には顔から湯船に顔を落としました。

すぐに抱き起しすと真つ赤になつてゐる。完全にのぼせている。体を拭いて服を着せ自分の部屋で介抱していると

「うへん

「起きたか？」

「あ、ジン様申し訳ありません」

状況も理解できていないようだ。

「駄目じゃないか無理しちゃ」

「だつて」

ソフィアが口の辺りまで毛布を上げて

「ジン様と一入つきりで話すの楽しかったんですね」

可愛いなオイ

「まあ、まあそれじゃあ仕方ないな、うん」

「ジン殿いますか?」

レティーシアだ

「どうぞ」

「失礼します。よかつたソフィア殿は気づかれたのですね」

「ああ、ついにやつせな」

「それでですねジン殿、その、夜は私とソフィア殿が闇を共にすることになつてゐるのですが、よろしいでしょつか」

そんなことになつていたのか。明日もそうなるのだろうな。

「もちろん、歓迎するよ。もともとソフィアは、動かせなかつたしね」

その夜は、俺を中心に川の字で寝ることになった。ソフィアとレティーシアは、二人とも疲れていたのだろう（一人は、手を繋いできた程度で静かな夜をす）した。

29話 女達との休日 2回目

異世界39回目

・ティリエルの場合・

「あの、お兄様はお空のお散歩に行きませんか?」

朝にティリエルが訪ねてきた。

「うーん、今聖痕は使えないからなー難しいな」

「いえ、私の背に乗つてくださいさればいいです。」

「いいのかい?前乗つたときはかなり疲れていただろう」

「わたしも成長していますし、そんなに早く飛ばなければ大丈夫です。」

「ティリエルがいいならいいけど」

「じゃあ行きましょ」

俺とティリエルは、朝のお散歩に空を飛んだ。

以前に乗せてもらつた時は、とても速くて余裕がなかつたからあまり楽しいとは思わなかつたが、実際龍の背に乗つて空を飛ぶのはけつこう楽しい。前の世界では夢想でしか出来なかつたことがこの世界では出来る、じついう時異世界に来てよかつたと思つ。

ティリエルに乗つて皇都を一週してから屋敷に戻る。

「あ、ティリエルそのまままでいて」

「どうしたんですか、お兄様？」

「龍の姿のティリエルの世話をしてみたくてさ」

龍の姿のティリエルは、とても綺麗だ銀の鱗に覆われていてすべて本物の銀のような輝きを放つていて。そしてその光が不快にならないのだ。そんなティリエルを世話したくなつたのだ。

メイドさんに頼んで、タオルを持つてきてもうひ。持つてきてもうつたタオルでティリエルの体を拭く。

「気分はどうだ？」

「気持ちいいです。もつと強くして下さつても」

「やつか」

ティリエルにどうして欲しいかを聞きながらお世話をさせてしまつた。

ティリエルの世話が一通り終わりティリエルも人の姿に戻る。

今は膝の上で遅めの朝食を取つていて。昨日フエリスが膝の上で食事しているのが羨ましかつたようだ。
食事をしていると突然ティリアルが

「お兄様、どうして私は夜伽に呼んでくださらんですか？」

「「ホ、「ホ」

むせてしまつた

「どうした突然？」

「私だつてもう十五ですよ、前の世界はよくわかりませんが、この世界では結婚だつて出来ます。」

ティリールの見た目は、少々幼いフェリスほどではないが、アルベルトと話してからと考えていた。答えに困つてると悲しそうな聲音で

「やつぱり見た目ですか？」

「やつぱりじゃないけど」

「じゃあ私のことがお嫌いなのですか？」

「それはありえない。愛してる」

「なら」

「・・・わかつたよ。やつだな16歳になつたら、俺の方から呼ぶよ、俺の国では女性は16歳から結婚できるんだ。頼む俺はティリエルを大事にしたいんだ。」

「・・・わかりました。今はその言葉で我慢します。ただ一つお願ひがあります。」

「なんだい？」

「キスをしてください」

「わかった」

そう言つて俺はティリエルにキスをする。するとなんとティリエルが舌を入れてさうに舌を絡ませてきた。俺もそれにこたえる。

少し長めのキスが終わつたとき

「『ルナリナ』までした。」

うつとりした表情のティリエルがいた。

その言葉は、朝食の終わりともう一つの意味をもつていた。

・テツの場合・

ティリエルとの食事が終わり部屋でくつろいでいると

「主、私の番」

「どうして足音を殺してきたんだ。」

テツが音もなく現れた。

「主を驚かせようとした。けど、驚かなかつた足音聞こえた？」

「いいや聞こえなかつた。ただ精靈が教えてくれるんだよ、不自然

な行動を取ればわかるんだ。」

「主に奇襲は効かないの？」

「少なくとも俺個人には、奇襲は無意味だな。」

「主す”」、さすが私の主です。」

「はは、ありがと。テツは、何をするか決まったのか？」

「決まらなかつた。主何かない？」

「せうだな、・・・街に出よつか」

「街に？」

テツの頭を撫でながら

「何か楽しいことがあるかもしないだろ」

「はい、行きましょう」

今は、テツと手を繋いであってもなく街を歩いている。テツは、歩いているだけなのに楽しそうにしてくれている。だからといって何もしないわけにはいかないよなあ、装飾品店が見えてきた。テツは、女の子だし鉱石を吸収する、興味があるかもしない。

「テツ、あそこに入るひ

テツを連れて店に入る。

「わあ、主寶石がいっぱいです。」

よかつたテツは、興味をしめしてくれた。テツと店内を見て回る。

「主ありがとうございます。」

テツが小走りで展示品を見て回る。テツのこんなにはしゃいだところは、はじめて見たな。

「この穴は、何でしょう？」

テツが見ている者は銀細工の首飾りで翼を模して作られているようだ。二つの翼が重なるように作られていて、翼に一つずつ穴がある。店主に聞くと

「その穴に宝石を埋め込むんです。プレゼントでよく使われていて受け取る側と渡す側で宝石を選ぶんです。」

その説明を聞きながらテツは、ずっとその首飾りを見ていた。気に入つたようだ。

「お値段は？」

「付ける宝石によつますが付ける石自体は小さいので、2000ギルから2500ギル程度になります。」

「テツは、何を付ける？」

「いいのですか？」

「いいよ、初めてのデートのプレゼントだよ」

「ありがとうございます。」

テツはダイヤモンドを俺はブルートパーズを選んだ。俺は、確か前の世界で、トパーズの石言葉でいい感じだった気がしたから選んだ。テツにダイヤモンドについて聞くとダイヤモンドは、硬度がとても高いのでテツのような存在には特別であるらしい。

「どうですか主？」

「似合つているぞ」

「えへへ～～」

今日はテツがよく笑つてくれるのが嬉しい、テツはあまり表情をださないから笑つていていうことは本当に楽しんでくれているのだろう。

いつもは、落ち着いていているからか見た目より大人っぽく見えるが、笑うと雰囲気が見た目相応に幼く見える。笑顔のテツと腕を組んで俺は帰路についた。

テツの首には銀の首飾りが揺れていた。

これ以降テツが小太刀の姿になった時、柄の下の部分に銀の装飾と一つの宝石が輝いていた。

43000ギル・2400ギル＝40600ギル

- フェリスの場合 -

「テツさんが笑顔で部屋の方に歩いていっていたんですが、お兄ちゃんがないところで笑うなんて結構珍しいですよね。お兄ちゃん、テツさんと何してきましたか？」

「テツとは、街でデートをしていたんだ。それより、フェリスは何をするか決まった？」

「デート羨ましいですね。私がしたい事はですね、わたしといえばやつぱり料理なのでお兄ちゃんの故郷の料理を再現したいです。」

「・・・ありがとう、フェリス」

思わずフェリスを抱きしめてしまう。フェリスは、顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに

「それで、その、食材のお買い物に一緒に行きませんか？」

「いいよ、それじゃあお買い物といつものおデートにいきますか？」

「い、いえデートとかそんなのじゃあ・・・デートなのかな？・・・デートかあ」

最初は狼狽していたが、最後の方は嬉しそうに頬を緩めていた。

出る前に料理を決めるのが意外と悩んだ。出来そうな物でこの世界で似ている物がなく、かつ俺が食べたい物となると意外と少ない、この世界の食べ物は、異世界人の俺が不自由しない程度には、前の世界と似通っていた。

結局作るのは、ハンバーグになつた。この世界では、基本的に肉は焼くだけだつたのだ。

「お兄ちゃんの話を聞くと混ぜるお肉と野菜が問題ですね、香辛料はなんとかなりそう。」

「いくつか買つて帰つて試そつか?」

「せうしましよう。余つたお肉は、別のときに使えばいいですし

「それじゃあ行こうか」

まずは、肉屋だ。聞くところの世界のお肉は、魔物の肉が多いらしい。一応牛や羊は、いるらしく放牧もしてはいるがそれは毛や乳を得るためだ。魔物の危険があつて大量に家畜を飼つのが難しいらしく、家畜を潰して食べることはまれらしい。ちなみに豚はいの魔物にずいぶん昔に絶滅させられたらしい。

「それじゃあ牛型の魔物のお肉を一種類と猪のお肉に猪型の魔物のお肉をお願いします。」

四種類のお肉で挑戦することになつた。
おじちゃんが話しかけてくる。

「嬢ちゃん、家の手伝いかい?えらいねえ、」おじちゃんがお兄さんかい?」

フエリスは、今メイド服を着ていないので家の手伝いと思われたらしい。

「いいえ違います。」

「あれ？でもお兄ちゃんって呼んでなかつたっけ。じゃあ近所のお兄さんかい？」

「違います」

「じゃあ親戚」

「うへ、ちがうもん

フエリスの素が出てきて泣きそうになってしまった。理由がわからぬ理由がわからぬので慰めることも出来ない。おじひやんもお姫を泣かせたことにかなり焦っている。

「あんた、なにお姫泣かせてんだーーー。」

「こや、俺もよくわかんなへどよな」

「まったく、この一人は『トーント』の途中だつたんだよ。それをあんたは、妹の枕に押し込めよつとして」

「そ、そうのかい嬢ちゃんそれは悪かった。この鳥肉もおまけするから許しておくれ」

おじひやんが慌てて謝罪を口にする。

「いえ」迷惑をおかけしました。大丈夫です、私のほうにも問題がありましたから

居心地が悪くなつたので店を出る」とあります。

「お兄ちゃん、私たちってデートしてるのは見えないんだね」

「周りの田なんか気にするな実際はデートをしているし、俺はフェリスを大事に思つてこる。それでいいじゃないか、それにその内、気にならなくなるさ」

「どうしてですか？」

「俺は、精霊界で長く過ごしていたから体質が変化して少し自然そのものに近くなっているんだ。そのおかげで俺は長寿で歳を取るスピードも遅いんだ。水の精霊王の話では300年は生きられるらしい」

フェリスの頭を撫でながら

「三年後には、しつかり連れ合いに見えるわ」

「嬉しいんですけど、それだと私のほうが先におばあちゃんになつてしまいそつです。わたしも冒険者になろうつかな」

「どうしてそつで冒険者になるんだ？」

「冒険者的人はある程度強くなると少し長寿になるらしいんです。能力ランクA以上必要らしいですが」

251

「へ～それなら同じ時を過ぎさせるかもな。」

「はい、がんばります。」

フエリスがやる気になつてゐる。まあいか護身にもなるし

「それじゃあ残りの食材を買ひに行こうか」

「はい」

後は、混ぜる玉ねぎとかの野菜だなこれは、もうフエリスにお任せ
だつた。

家に帰り、フエリスと一緒に夕飯を作ることに手間のかかる挽肉は
俺が担当した。

結果ハンバーグは牛型の魔物のお肉と猪型の魔物のお肉が一番おい
しかつた。

その夕食には食卓にハンバーグが並び、フエリスはいつも以上に幸
せそうに俺の膝の上で食事を取つていた。

その夜

「　　「今日は私たちです。」」

やつぱり、寝室に二人娘がやって來た。ティリエルとテツとフエリ
スだ。

ティリエルの抱き付き癖に対抗するようにほかの一人も抱きついてきた。

一番小さいフェリスが体の上でティリエルが右、テツが左に抱きついたままの就寝となつた。三人ともやわらかかった。

異世界40回目

・ミコアの場合・

「（レ）主人様失礼します。」

「どうしたんだ、ミリア急に（レ）主人様なんて」

前までジン様だったのに

「ジン様は私の主になりましたので、わたしもイリヤさんを見習つて（レ）主人様とお呼びしようと思いまして。」

「いやまあ、俺はいいんだけどね。それよりミコアは、どうするのか決まった？」

「それが決まらなくて」

「？・・・なんで」

「私は、使用者としての教育を受けていたので自分の主だと思つと何かを頼むのも気が引けるといいますか」

生真面目だなミコアはそこもいい所だが。

「それじゃあ、ミコアの仕事を見守させてもらおうかな。」

「見学ですか？それは楽しいのですか？」

「やつと楽しけり」

そして今、俺とミリアは普段使わない部屋を掃除していた。これは、通常の仕事ではない、そもそも一人でやる仕事でもない。何故こうなったかといふと

ミリアと話し、やることは決まったが、問題が発生した。仕事がないのだ。今日ミリアは、オフなので仕事を入れていなかつたのだ。他の人の仕事をとるわけにもいかない。
そこでミリアが出した案が

「空き部屋をお掃除しましょう。」

といふことになつた。元々ミリアの仕事は掃除が多いらしい。
食事をフェリスが、掃除をミリアが担当して周りのメイドはその手伝いをしていくやうだ。

さすがに一人で片付けるのは大変なので俺も、手伝つことにしたのだ。

「ご主人様は、ご主人様なのですから、あまり他の人の仕事を取らないようにしてくださいよ。」

まあ、仕事を取ることが悪いのは何となくはわかる。仕事がない使人人は肩身が狭くなるようなのだ。

「わかつたわかつた。でも今日はミコアと共同作業がしたかったんだ。」

「「」、「」主人様」

「おお、照れてる照れてる。

「せり、外に出たらあまつミコアに会えないかもだろ

「あっ、そうですね。」

「ミコアが少し落ち込んでしまった。落ち込んでくれるのなら提案ぐらいはしてみよう

「フーリスにも話したんだけどミコアも冒険者登録をして一緒に旅をしないか?少し危険だから断つてもいいんだが」

「いえ、行かせてください!。私でつきり置いていかれると思つていたので、誘つてくださつて嬉しいです。」

「そこまで、嬉しいものなの?」

「だって誘つてぐだかるところとは、わたしを側に置きたいと思つて下をついているところことで、それが嬉しいはずがありません。」

「そ、そつか。それじゃあ明日でモギルドに行くか

そつ言わると少し照れるな。ミコアは興奮した様子で

「はい、それでは、引き継ぎなどをしないことだけないので、ひょりと行つてきます。」

行つてしまつた。掃除の途中だつたがまあいいか、まだ終わつていなかが切りは良いのだ、後は本職に任せよう。

-リリスの場合 -

お昼を過ぎたころリリスが部屋になつて來た。

「リリスは決まつた？」

「私も手合わせ・・・と言いたい所だけどそれじゃあ、つまらないから一緒にお出かけしよ」

「わかつた。何処に行くんだ？」

「武具屋」

目的地に向かう道すがら何故武具屋なのか訪ねると

「実は、ノワールサイと戦つた時ので、レイピアの損耗が激しくて新しい武器が欲しいから下見をしたくて」

「そんなんに前からか、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。すぐには折れないと思う

「それならいいが」

「ついでにいふことに皇國の武具屋の一つに着いた。

「前の武具屋では、武器を見るのに付き合へなかつたんだよな。リ
リスは今回もスピード重視なのか?」

「やのつもつだからレイピアにしようつと黙つただけど」

惱みながらレイピアの棚を見るリリスに

「ちょっといいか?」

「なに?」

「リリスって基本刺突がメインだよな」

「やうだよ、なんで知つてゐる? 手合させしたことないよね?」

「リリスのことば、よく見てこらねからな」

「あ、ありがと」

顔をそらしながら礼を言つてゐる、照れてるようだ

「それならエストックなんかどうだ、刺突を重視した武器だからリ
リスには合つと思つんだ」

エストックとは両手用の刺突重視の武器だ。エストックは、剣身の

断面は菱形で、先端になるにつれ狭まり先端は鋭く尖っている。レイピアと違い両手で突ける分威力が期待できる。

「リリスのスピードは申し分ないし少しはパワーを求めてみたらどうだ。ノワールサイのよつたな固いやつに出会つたら大変だろ」

「エストックかあ、みてみよっか」

エストックは、刀同様数が少ないので奥に仕舞われているらしく表には並んでいない。

店主に奥から持つてきてもらいエストックを見てみると、全てに目を通した結果一つのエストックを手に取った。

「これが一番いいかな」

そのエストックは、軽量化の魔法を始め、一重強度強化と雷を纏わせて貫く力をかなり高めた物だ。かなりの業物だ。

「これは、いくらですか?」

「それでしたら複数の魔法をかけられているので、15000ギルになります。」

「た、高いよジン」

「確かに高いな、まあ大丈夫だろう。それをくれ

「ジン今日は下見のつもりだつたんだけど」

「いいのいいの、なあ護符つてあるか?」

「ありますよ、いくつまで？」

「一〇八くれ

40600 - 17000 = 23600 ギル

残金 23600 ギル

「ジンは刀見ないの？」

「テツがいるだろ？」

「ふふん、レティーシアとの稽古を見ていた時に気付いたなんだけ
どジンって本当は、二刀流だよね。」

「・・・気付かれたか。皆を驚かそうと思つて黙つっていたのになあ。

」

「他には、誰も知らないの？」

「テツは、知ってるよ、なんせ俺の小太刀だからな。話さない訳に
はいかないし、自分で気付いていたしな」

「少し妬けるなあ。」

「そういうなよ。そうだな、気付かれたんなら、ちょっと見てみる
か」

店主に刀も見せても、『うが

「やつぱりテツに釣り合つ刀はないか」

刀を戻し店を出る。リリスが腕を組んできた。リリスの感触を楽しんでいると

「ジン今度一刀流見せてよ。」

「機会があればな」

・イリヤの場合・

最後の一人が、夕食と入浴の後に部屋にやつて来た。

「『う』主人様、私が最後になりました。」

「いらっしゃい、でも今から何をするの?」

以前この時間帯に来たソフィアは、お風呂を共にしたが、今日はそれも終わっている。

「『う』主人様もお掃除とお買い物でお疲れでしょうからマッサージをさせてください。」

「俺には、願つたり叶つたりだが、イリヤはいいのか?」

「はい、『う』褒美です。させてください」

「そこまで言つなりお願ひするよ」

そのまま座っていたベットに横になる。ベットに寝転がる俺にイリヤが跨りマッサージを始める。

イリヤはマッサージに治癒魔術と一緒に使うようかなり気持ちいい、蕩けそうだ。

「（）主人様、質問してもいいですか？」

「なんだい」

「（）主人様はどうしてこちらの世界に来たのですか？」

「言わなきや駄目？」

「駄目ではありますん。ただご主人様の女の一人として知りたいのです。」

「わかつた。話そう、そつだな理由は、いくつかあるんだが結局俺のためなんだよな」

「ちゃんと教えてください」

「そつだな簡単なのは、神が言つには、俺でなければいけなかつたらしいんだよ。」

「（）主人様でないと？」

「精靈との相性と人格らしい、次の理由は知つてしまつたからだな」

「何を知つたのですか」

「俺が行かなければこの世界が滅ぶことを知つてしまつた。俺は他人の命を粗雑に扱える人間ではなかつたんだよ。三つ目が・・・・・」

「三つ目は？」

「たぶん三つ目が、本音だらうな。俺は前の世界で物事に本気になれなかつたんだよ。物事にあまり興味を持てなかつし、興味を持つたものでは優秀な成績を収め、すぐにやる気もなくなつた。」

「・・・・」

イリヤは、黙つて聞いていた。

「生き甲斐がなかつたんだよ。前の世界では、大事な人たちはいたけど毎日が退屈だつた。だから退屈が嫌で異世界行きを決めたんだ。だから前の世界に未練はない。ちゃんと別れを伝えられたからな。ほらな、自分のためだろ」

「そのおかげで私たちは生きていられます。」

「そうだな俺は、この世界でお前達に出会つた。俺は生き甲斐との世界大事な者を手に入れた。そして目標を持てた俺は今とても充実している。ありがとうイリヤ」

「ならどうして奴隸を解放するなどと」

「奴隸制度が気に入らないんだ。それに神は俺に好きにしろと言つ

てくれたからな。俺は、今の世界を壊し新しい世界を造ることしたんだ。」

「『ご』主人様はどうのような世界を求めているのですか

「それはだな、人と人が仲良くなつて奴隸制度がなくなりあらゆる種族が手を取り合えるそんな世界を造りたいと思つてゐる」

「とても素晴らしいと私は思います。」

(『ご』主人様あなたは、やはり素晴らしい人です。この世界に来たきっかけは退屈しのぎだとしても、精霊界での修行も、私たちを救つてくれたことも、奴隸を解放しようとすることも、この世界を導きまとめようとすることも、あなただからこそなのですよ『ご』主人様。ですからどこまでもお供します『ご』主人様)

イリヤはこの人と共に歩むことを改めて心に誓つたのだった。

その夜

「ジン」「『ご』主人様」

リリス、ミリア、イリヤの三人が部屋に現れた。まあここまでの一
日の夜でわかつていただ。

ほかの一曰と違うのはその夜がとても濃厚なものになつたことだろ
う。

三人を同時に愛し合つことになつたが、先に力尽きたのは三人の方
だつた。三人ともジンの性技によつてイキまくり失神してしまつた
のだ。

三日目の夜は、疲れ果てていた三人をベットに押し込み裸の三人を抱えて一緒に寝ることにした。

3-1話 方針と新たな仲間

異世界41日目

朝起きると。

「ご主人様お客様が来ています。」

「誰?」

「アッシュ皇太子様です。」

「アッシュ?」

グーロム王国で、わかれでから一週間もたっていない。とても元王国領が安定したとは思えないのだが、何かあったのか?
不安に思いながらアッシュの待つ部屋に向かう。

予想通り問題が発生していた。俺達は、王城で奴隸の解放を宣言したが、数日たつて奴隸を隠し持っているやつらが目立ってきたのだ。
しかし、安易に軍を動かせば、証拠隠滅のために奴隸が殺されてしまう。

そこで個人で、貴族や商人を潰せる俺に白羽の矢がたつたのだ。

「わかった。俺の方で対処しよう。」

「ありがとうジン。できる限り手助けはするよ」

アッシュは、俺の返事を聞くとすぐに元王国領に戻つていった。
朝食後アッシュの話を踏まえて、これからのことの決めるためにみんなに集まつてもうつ。

そこで元王国領の状況を話す。

「そのようなことになつてゐるのですか」

反応はそれぞれだったが、以外とフェリスの反応が一番大きかった。
顔は青ざめて俯いている。

「大丈夫か？」

フェリスの肩を抱きながら話しかける。

「その、私、お城の奴隸の扱いを知つてて、とてもひどいことを」

顔は上げてくれたが、その目には涙があつた。フェリスには城の生活そのものがトラウマなのだろう。

「大丈夫だフェリス俺達はその奴隸を助けに行くんだからな、それにはこの俺が行くんだ絶対大丈夫」

「はい、・・・はい」

フェリスは、一番身近に奴隸がいたんだな。イリヤとリリスは一度奴隸になつたが、奴隸を体験する前に俺が助けているから体験はし

ていない。

フェリスの、記憶から王城の生活を忘れるのは、まだ時間がかかるな。

フェリスが落ち着くのを待つて話を続ける。

「俺の簡単な方針をこれから話す、

一つ目

元王国領の奴隸解放

二つ目

元王国領の残党の殲滅

三つ目

俺達自身の強化

四つ目

お金を稼ぐ

この四つがおおまかな方針だ。質問はあるか?」

「フェリスちゃんやミコアさんも連れていくのですか?あとレティーシャ様はどうするのですか?」

「ああ、一人共同行する。このあと冒険者登録をしにギルドに行く。レティーシャのことは、皇帝に聞かないとな」

「それなら大丈夫だ。アッシュが、同行していいと言っていた。」

アッシュのやつ俺より先にレティーシャに話していたということが、俺が断らないこと前提だったなあの野郎。三人の同行に反対などはなかつた。

フェリスとミリアに護符を渡す。ちなみに、ティリエルとレティー

シアは護符を元々持つていた。

レティーシアは、姫騎士と呼ばれているから不思議ではなかつたし、ティリエルはアルベルトが持たせたようだ。テツは、氣力と魔力を持たないから使えない。

「よし皆でギルドに行こう」

「み、皆ですか？」

確かに俺達は、9人と多人数だしな。

「今日だけだよ。ギルドカードの更新もしたいし依頼も受けるから。

一応は納得してくれたので、俺達はギルドに行くことにした。

「へえ、ここが皇国の冒険者ギルドか、大きいな。グーロム王国のギルドって本当に小さかったんだな」

俺たちがギルドに入ると騒がしかつたのが一瞬静かになつたが、すぐにはまた騒がしくなつた。しかし、中には元の場所に戻らず俺達に、正確には俺の女達に近づいてきた。こつちでもあるんだな通過儀礼なのか？

顔立ちは整つているが、どうも軽い感じがする金髪のにいちゃんだつた。

「ねえちゃん達俺と遊ばない。依頼が終わつてぱっかりで今結構お金あるんだよね。」

男がミリアに触れようとしたので間にいる

「彼女達は、俺の連れだ。手をだすな」

「オイオイそれを決めるのは彼女達だろ?」

「それでしたら話しかけないでください」

「喋るな」「雑魚」

「私達はジン様のものです」

「死ね」「消えろ」

穏やかなものもあるが、暴言のほうが多い。

「な、なんで、そこまで言われないといけないんだ。」

まあもつともだな。

「悪いな。皆も挑発するな。だが」「こいつらは俺の女だ。もう一度言う手をだすな」

「・・・ちつ

舌打ちして男は去つていった。

「『』はグーロムじゃないんだから、もえす』し穏やかに断つうな

「ハーアイ」「

「ジン!久し振り」

大きな声で呼ばれた。周りにも聞こえたのだろう。さつきの男もギ

ヨツと顔を強張らせた後、胸を撫で下ろしていた。手を出さなくてよかつた、とでも思つてゐるのだろう。

「あいつが『英雄ジン』なのか、じゃあ、あの水色の髪の女が『水災の魔女』なのか？」

「『水災の魔女』ってなんですか！？」

ソフィアが悲鳴をあげている。その引きがねになつた男が側に来た。

「久し振りだなジーク」

「もうギルドは君の噂で持ちきりだよ。やつぱりジンは、すごいな」「そうでもないよ。それよりはソフィア達を送つてくれて助かつた。ありがとう」

「いひつて。そうだカイル～ちょっと来てくれ」

ジークは、相方を呼びよせ

「お久しぶりです、ジンさん」

あれ、カイルの口調が変わつてゐるよつな。

俺の疑問が解決する前に、さらに意外な申し出があつた。ジークが真剣な顔で

「ジン、俺たちをジンのチームにいれてくれないか？」

何故俺のチームなんだ、普通は女ばかりで入りづら」と思つんだが

「ジーク達は俺達の目的を知らないだろ。なのに何故チームに入りたいんだ？」

これに答えたのは、意外にもカイルだった。

「私達は、昔騎士だったのです。ですが私達は、戦争で主君を失いました。そして新しい主君を探していたのです。そして私達はあなた様に出会いました。仕えさせていただけないでしょうか？」

やつぱりカイルの言葉使いが変わっている。それだけ本気なのだろうか。チーム"仕えることになるのか？"だがチームの増強も必要だそれに彼らは信用できる。俺が数少ない知り合いの冒険者だ。

「わかった。チームに迎えよう、ただ俺は男には厳しいぞ」

「「ありがとうございます」」

新たに二人の仲間が増えた。その後二人はジン達の目的を聞いて。「やはりあなたを選んでよかったです」と感慨深げに呴いていたとか。

手早く冒険者登録を済ませ
新しい仲間とギルドカードを見たことがない人達のカードを見る
とになった。
まず新しい登録組の

名前	フェリス	女	12歳	人間
ギルドランク	G			
能力ランク	総合E	気力F	魔力C	

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

フェリスとミリアは、完璧に魔術師タイプだな。これでは、後衛に偏ってしまうな。

新しい男どもは

名前 ジーク 男 21歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合 C 気力A 魔力D

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

ありがたいことに、三人とも前衛タイプだった（ジークも前衛だった）。これなら、チームのバランスがよくなるな。それにしてもジンの女ってずいぶん直接的なつたな神の野郎。残りのメンバーもカードを出す。

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

「ジン様『私『水災の魔女』じゃないですよ』」

ソフィアの称号が増えていた。水災の魔女については、かなり不満そうだ。ソフィアは、あの時危ない人を助けていただけだからな。

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 テイリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

三人のカードには、変化はなかつたが、ティリエルのカードを見たときには新しい男二人は、かなり驚いたようでティリエルを長い間凝視していたので

「ティリエルを見すぎだアホども」

目潰しをしてやった。

二人は、悲鳴をあげながら地面を転がつた。

「ここまでするか普通?」

「言つたら、男には優しくないって」

「厳しいって言つてたよ!」

「細かいことは気にするな。最後は俺だな。」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 「世界を結ぶ者達」

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隸の解放者 精霊術師

『英雄』が増えている。後前からあつた称号が変化している。まあ主ではないしな。

さつきまで騒いでいた二人は絶句している。そんな二人は放つておいて次は依頼だな

依頼を見に行くとまた、顔見知りがいた。クレアさんだ。

「クレアさん久し振りってほどでもないか」

「そうですね」

「家は決まりましたか?」

「それがなかなか決まらなくて、今はギルドの空き部屋を使わせてもらっているんです。」

この時、しばらく留守にする屋敷と暇になるであろう使用人達を思いだした。それならと

「クレアさんいい物件がありますよ

俺は、屋敷を使うように勧めた。最初は、遠慮していたが、屋敷の主要人物が全員出るので信頼のおける人に任せたいことと使用人が暇になることを話してやつとクレアさんは頷いた

「それなら、『厄介を申すつもり』ますね。ありがとうございます。
ジンせん」

後ろの女達からは冷たい視線が送られてくるが気にしない。

細かいことを話したあとクレアさんと別れる。

今度こそ依頼を受けに行くぞ。

32話 新しい依頼と第一皇女

「それじゃあ依頼を受けるわけだが」

「だが？」

「何人かに？マークが浮かんでいる。

「この人数で一つの依頼を受けても時間がもつたいたいからいくつかのチームに分ける」

テツと男二人以外の仲間の顔に影がさしたので慌てて付け足す

「分けるといつてもそのチームが中心になつて受けた依頼をやるつてだけで、基本皆一緒に行動するからあんまり気にするなよ」

テツ以外皆安堵していた。まあテツは、小太刀だから俺と一緒に行くなつて決まつているからな。

結局皆と相談した（各自の思惑も混じつて）結果こうなつた。

- Aチーム 僕とテツ
 - Bチーム ジークとカイル
 - Cチーム レティーシアとミリア
 - Dチーム リリスとソフィア
 - Eチーム イリヤとフェリスとティリエル
- というチーム分けになつた

受けた依頼は、

Aチーム ランクA 岩窟竜一頭の討伐 5万ギル 無期限 モル

ド伯爵領

Bチーム ランクC 牛鬼五体の討伐

1万ギル 一月以内 元

王国領南部

Cチーム ランクD ゴブリンの群れの討伐

4000ギル 一週間以内

元王国領の西街道付近

Dチーム ランクD 生熱の種の採取

30個 5000ギル 半年以内

元王国領北部に生息

Eチーム ランクF 魔物五十四討伐

2000ギル 一月以内

ニビルの森

このほかにチームとして特別クエストとして元王国領内の魔物の討伐依頼を受けた。

この依頼は、元王国領を立て直すためにクインント皇国が出した依頼で制限がない代わりに報酬は少ない、一応受けておくという依頼だ。これのおかげで冒険者が魔物討伐に積極的になるらしい。

この依頼は、ギルドカードのチームの下に

A・000 B・000 C・000 D・000 E・000

F・000

と表示されていてチーム内で混同されているらしい。

「それじゃあ、今度は武具屋だな」

フェリスとミリアの魔法を使うための媒体を買いに行つた。二人ともソフィアやイリヤのしている指輪をジンがプレゼントした物だと知つていて

「わたしも指輪がいいです」

「こうことになり二人に別々に媒体としての指輪をプレゼントした。

フェリスの指輪は、黒い魔石の付いた指輪で魔力増幅に重点を置いた指輪だ。フェリスの指輪はシンプルなデザインだ。黒い魔石は黒真珠に似ている。

ミリアの指輪は、緑と黄色の魔石を付けたもので風と雷の魔法が使いやすくなる指輪だ。ミリアの指輪は、魔石が二つながら凝っているが派手さはない上品な指輪だ。

あとティリエルの武器だが、ティリエルは、ダガーを2本選んでいた。二重強度強化がかけられた物だ。

指輪が4500と5500で1万ギル、ダガーは一本2000ギルだった。

23600 - 14000 = 9600ギル

武器の次は魔具を取り扱う店に行くことにした。

以前の討伐依頼の時にリリスを失いそうになってしまったことがあった。森のランクに相応しくないランクAのノワールサイが現れたからだ。それらの不測の事態に対処するためにいくつか考えていたのだ。そのひとつが魔具に頼ることだった。リリスに話は聞いたがそれだけではわからない、俺が欲しい物があればいいのだが。

入ったのは、レティーシアがお忍びでよく使っている魔具屋だ。

魔具屋といつても魔具といつてもいろいろで、魔術を込めた装飾品、使い捨ての魔符（魔術を込めた符）などあらゆる物を扱っている。魔具以外にも魔物の一部や魔石などの素材などもある。

俺が探しているのかは装飾品だ、武具屋にもあつたが、武具屋のも

のは、ほとんどが戦闘用だった。

この世界の字が俺は読めないので、店主に話して探しても「う」とした。

田当ての物は、見つかった。

『絆の腕輪』といって登録した相手の居場所がわかり、自分の危機を伝えることができる。

チームがバラバラに動くときにつけたり、お金に余裕のある家庭が子供につけたりもする。

腕輪に少し細工をしてチームの証にすることもある。

これを、人数分買う。細工はいつかしたいと思つ。

11×500=5500ギル

9600-5500=4100ギル

店を出たあと、旅の準備をジーク達に任せ先に宿に戻る。準備のお金は、ジーク達が払うことになった。もうチームの一員だし腕輪のお礼も兼ねてらしい。お金もずいぶん少なくなったのでありがたい。

皆を先に帰らせて俺は、城に向かう。馬車を借りるためだ。今の馬車では、六人ぐらいしか乗れないからだ、金もないから依頼主に借りることにしたのだ。

顔パスでお城に入る。

しかし、皇帝は今忙しく待つことにした。

庭で暇をもて余していると、城の方から女が一人歩いてきた。驚いたことに、第一皇女とレティーシアの影武者だった人だ。

「どうしたんだ、アリシャちゃん」

「む、私の方が年上」

「いいじゃないか、こんなに可愛いんだから、えっとそつちま？」

「レイシアと申します。」

「名前交換してたんだ」

「はい、レティーシア様の希望でなんど自分の名前に反応しあうつなつたか」

笑顔でレティーシアの愚痴を言っている。田舎だったのだらうな。

「ハハ、レティーシアらしい、話は戻るけど、じんとうひじゆうしたんだ？」

「あなたがいるから会つに来た。」

「俺？」

「興味がある。あなたのこと教えて」

「条件がある」

「なに？」

最初は馬車を頼もうかと思ったが、自分の話を馬車と同じにするのは気が引けた、だから

「君のこと教えて」

「えつ」

「俺の」とを教えるから君の事を教えて

「わ、わかった」

その後、一人で会話を交わした。俺の世界の「」とアリシアの思い出などあらゆることを聞き話した。

「じゃあアリシアは、ハーフエルフのハーフなのか

「やうし私は、エルフのクオーター」の容姿は、そのせいだと想ひ

自分の平らな胸と身長を指しながらアリシアは言つた、そのアリシヤは今では、俺の膝の上で会話をしている。レイシアさんは、少し後ろで微笑んでいる。そんな楽しい時間に水を指すやつが来た。

「アリシア姫そんなところで何をしていらっしゃる

高圧的な喋りかたで騎士風の男が近づいてきた。明らかにこじらを見下す表情で

「そのよつなゞいの馬の骨ともわからぬ男と話しては、姫様が汚れますぞ」

「お前と話す方が穢れる」

「アリシャー」いつは誰だ?」

アリシャは苦々しそうな表情で

「第六師団長で私の元許嫁」

師団長といふことは、ゲオルグよりは下だな。師団長は、所詮將軍の指揮下にある。

「おい平民、元ではない。父達が勝手に解消しただけだ。」

「こつはアホなのか、許嫁は親が決めるものなんだから親が解消してもおかしくないだろ?」

「アリシャなんで解消になつたんだ?」

「こつの素行不良、いくつか罪も犯してる」

よくそんなやつに師団長を任せているな。ゲオルグに相談しようかな。

「そんな『ミミ』みたいなやつに、可愛いアリシャを任せることにはいかないな」

一人の反応は、似ているが正反対だった。

アリシャは、無表情ながら頬を染めて恥ずかしがり。ゴミは、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「貴様俺を侮辱してただで帰れると思つなよ。」

「なんだ、土産でもくれるのか?」

「殺されたいらしくな」

「やれるならやってみる」

「言つたな、貴様に決闘を申し込む」

「ジン止めた方がいい、これはランクA。あなたの精靈術はすごいけど決闘には不向き」

「ゴミは、何気にアリシャが物扱いしたこと気に付かずに

「姫様は、よくわかつている。謝るなら今のつちだぞ平民」

「アリシャ大丈夫だよ。俺は剣術もやるからな、こんな三下すぐこ倒せる」

「ならば、受けのだな」

「ああ受けてやる、ありがたく思え、師団長」

33話 決闘 英雄VS師団長

「ただ決闘するのもつまらないな、やつだな賭けをしよう!」

「賭けだと?」

「そう賭けだ。俺の方からは、そうだな・・・俺が勝つたら今後一切アリシャに近づかないで貰おうか」

「ふん、いいだらう。その代わり俺が勝つたら、お前を奴隸にして売り払ってやる」

奴隸だと、皇国で禁止されていることを当たり前のよう、適当な時に潰しておおか、その方がこの国のためになりそうだ。

「これよりジン殿とラウル殿の決闘を始める。攻撃防御は、持った武器のみ魔術や精霊術などの使用は禁止とする。急所への攻撃も禁止、急所に当たた場合当たたほうの負けとします。それでは・・・
・始め」

合図をしてくれたのは、訓練場で訓練をしていた他の師団長だ。審判をお願いした。

こいつラウルって名前なんだ。そういうばこいつの名前聞いてなかつたな、まあ興味もないしじどうせすぐ忘れるいいか。
俺が使う武器は短い木刀、ラウルが使うのは長めの木剣だ。

驚きの速さでラウルが間合いを詰め、左から木剣を横に振るう。ジンはこれを木刀で受け止める。ラウルは、すぐに木剣を引きなんど

も突きを放つてくるがこれらをジンはすべて弾いてみせる。次にラウルは上段から木剣を振り下ろすが、これは後ろに飛び避ける。

「どうした、攻撃してこないのか、それとも手も足も出ないか」

「以外だつたよ、もう少し雑魚っぽいと思つてた。」

実際すべて防いでいるが、ラウルの攻撃は一連の流れになつており切り込む隙がない。今までこの世界でまともに打ち合つたことがあるのはラシードとレティーシアだが、少なくともレティーシアよりも強いだらう。

だから、まずラウルを一度蹴り飛ばして距離をとる。

「ぐつ、だがこれくらいで」

「ちよつと確認したいんだけど、いい？」

「なんだ命乞いか？」

「いや、ただあんたに本氣でやつていいか聞いつつ思つてな」

「貴様ふざけるなよ、これは決闘だぞ本氣でやれ」

「いいぜ、レイシアさんこそ木刀投げてくれ」

「ふえつ、・・・」、これですか？」

突然呼ばれて驚いたレイシアさんが近くの壁に立てかけてあつた通常の長さの木刀を持ち上げる

「そうですね。投げてください」

投げてもいい

「ありがとうございます」

「なんだ武器の長さの問題だとでもいうのか」

ラウルが嘲るような表情を浮かべる

「ああ違う違う」

投げ入れてもらった木刀を右手に、下からあつた木刀を左手に持つ

「俺は、二刀流だ。」

「なんだと、は、はつたりだ」

「なんだ評価は、下方修正だな。俺まだ左腕しか使っていないんだぜ」

「なつ」

「俺が刀神から習つた、神双流は左の小太刀で攻撃を防ぎ、右の大太刀で攻めるのが基本、見せてやるよ俺の本気」

本氣で相手に踏み込む。左の木刀で迎撃のための木剣を受け流し右の木刀を首に添える様にギリギリ止める。

一つの動作を同時にを行うことでたつた一度の攻撃で決着をつけた。一つの武器を持ったことで動きが遅くなるどころか、重心が安定し

て動きの速さも上がっていた。

「ま、まいった

「もうアリシャに近づくなよ。師団長殿

ラウルがその場に倒れてしりもちを付く。
ジンが、ラウルに背を向けアリシャたちの下に歩きだすと、後ろの
ラウルがブツブツ眩いで

「・・の・・ほの・・せ・・・焼き肉へ须くせえ——『フレイム・
バレット』『

無数の小型の火球がジンに向かって放たれる。ラウルが、逆上し魔術で攻撃してきたのだ。審判役の師団長が止めようとするが、間に合わない。それに、このコースはアリシャたちの巻き込まれるコースだ。

しかし、俺の近くにきた炎の玉は、すべて俺の手前でしぼむように消滅した。

「な、ぜ」

「精霊術で壁を作つただけだ」

風の精霊術で真空の壁を作つたのだ。炎では、これを『じぶる』とは出来ない。

「今の攻撃、アリシャたちにも当たるコースだつたな、少しあ仕置きが必要だな」

ラウルに精靈術の雨を降らせる。

火で髪の毛を炙り
水で息できなくし
風を圧縮してぶつけ
土で下から土の槍で突き
雷で感電させたりした。

服は燃え、鎧は砕け、髪の毛はちぢれ、体中を痛打される。見るも無残な姿になつていくラウルに、審判をした師団長だけではなくアリシャやレイシアまで同情の眼差しを向けていた。

ラウルがボロボロになり気絶したのをみてお仕置きをやめる。同情の眼差しをラウルに向ける師団長に

「師団長ちょっとといいか」

「は、はい、な、なんで」「やれこましちつ

すつじい慌てよづだな、そんなに怖かったかな？

「さつきの賭けの話、広めておいてくれるか。これがアリシャに今後近づかないよう」「たゞ

「△△のようになつたラウルを指しながらお願ひする。

「はい、わかりました。」

「頼んだよ、アリシャ庭に戻ろつか」

「わかつた」

庭に戻つて、もう一度アリシャを膝の上に乗せる。

「ジンって、結構怖い？」

「敵でせらりと男なら、どこまでも残酷になれるな。だけど女には基本優しくすることにしておる。」

「よかつた。それにしてもジンは強い」

「ありがとう」

「わたしもあなたに・・・」

「俺に?」

「な、なんでもない、そ、それよりジンは、お城には何をしこ?」

急な話題変換だなまあいいか、何しに来たかだつたな・・・

「ああ――――、すっかり忘れてた。馬車を借りに来たんだった」

「馬車? 何故?」

「近いところに旅に出るんだよ、アッシュの頼みで

「兄上余計なことを」

少し機嫌が悪くなつたような気がする。

「どうかした？」

「なんでもない」

しばらくアリシャがなにやら考ふ込んでいた。

「馬車だつたら私の頼みを聞いてくれたら用意する」

「頼みによるなあ」

「大した事じやない」の指輪をつけてほしい

アリシャの指についている物と同じ指輪を差し出してきた

「指輪？いいけどなんで？」

「あなたの、腕輪と同じような物、この指輪は特注品、相手と会話
が出来る。」

「つまり、たまに話がつてこと？」

「ククク

アリシャがすゞい勢いで頷く

「姫様その指輪は

「レイシア黙る」

「は、はい」

アリシャがレイシアを黙らせている。何かありそなうだが危険はないだろう。

それに会話をしたいと思つてくれることは少し嬉しい、だから受けとることにした。

アリシャの手で指輪をつけてもらつ

「対呪、や氣力、魔力の増強などいくつか効果がついている」

「そんな便利な物をいいのか？」

「いい、ただ」

「ただ？」

「その指輪は、私以外には外せない」

「えつ何故？」

後で試したが、俺の契約破棄の力でも外せなかつた。契約とは違うようだ。

「その内わかる。馬車はレイシアに頼む。馬車が来るまでお茶にする。私の部屋に来て」

アリシャに連續で喋られ言葉を返す暇もなく、部屋に連れられて行くことになつた。

アリシャの部屋には本がいっぱいあつた。本棚で左側の壁が埋まつ

ているし机にも本の塔ができる。い

「本好きなのか？」

「好き、人は面倒だから」

「たしかに、皇女となると面倒だらうな」

とてもドロドロした人間関係になりそつだ。

「でもあなたは、どこにも所属していないし対等に話しても問題ないからとても落ち着く」

アッシュも同じことを言っていたな。

部屋に入つたからだろうか、やわらかい表情を見せてくれた。普段無表情な分面白いに可愛い。

その後も一人でお茶をしながら他愛もないことを話してすごした。日が傾いてきたので帰ろうとする

「使いを出す、問題ない、それより一緒にご飯を食べる」

「わ、わかつた」

またアリシャの勢いにのまれてしまい、そのまま食事を共にすることになった。

「大丈夫」

その後も何度も屋敷について話すと大丈夫が返ってきて、途中から屋敷ことを話すと大丈夫が返ってくるようになっていた。

暗くなり、やすがに帰らなこと、と説得する。

「私と一緒にはイヤ?」

「イヤじゃないけど、このこの急で」

「だつて、ジン旅に出るか?」

「やつこえばやうだな。やつこつことなら今日べりこまアリシャに付
やくひつ」とにするか。

翌日アリシャと朝食を食べ終わった後、城を出る」とい

「あの馬車は?」

レイシアさんに尋ねると

「やつには屋敷につけていますよ」

不思議そうな顔のレイシアさん。

騙された。

まあいかにも可憐いウソは許せる。

屋敷に帰ると指輪について聞かれたが、とある人からプレゼントされ

たとだけ説明した。

皆気になるようだが、俺が答えないで諦めた。ミコアは、なにか

感づいていたようだつたが追求はなかつた

異世界44日目

「魔の火よ、眼前の敵を燃き尽くせ、『ファイア・ボール』」

指輪で増強された魔力でフェリスが、直径1メートルぐらいの火球がハイウルフに命中する。

「できた。できたよ、お兄ちゃん。褒めて褒めて」

「すごいぞ、フェリス」

誉めながらフェリスの頭を撫でてやる。

ジン達は、今別れて行動している。Bチーム、Cチーム、Dチームでゴブリンの群れ討伐に出ている。

そして余った、Aチーム、Eチームは実戦経験のないフェリスの魔術の練習することになったのだ。

今は、Fランクの魔物しかでない森にいる。

ミリアは、元レティーシアの付きのメイドだったからか、今のギルドランクの依頼ぐらいなら問題ないそうだ。

ここには、俺と小太刀のテツ、ダガーの練習をしているティリエルと教師役のイリヤと生徒役のフェリスがいる。

俺も将来的には魔術も使うつもりだから、イリヤの説明をフェリス

と一緒にしつかり聞く。

「体内にある魔力の源は、基本無色と言われていますが、これを魔力に変換する時に、色が付く人がいます。」

「色ってなんですか？」

「この場合の色は、視覚的な意味での色ではなくて、魔力の質のことです。赤だと火の、緑だと風の魔術に使えます。」

「へえ」

「変換するときに色が付く人は、その色の魔術に関しては、詠唱短縮、威力増加などいくつかの利点がありますが、その代わり他の魔術を扱いづらいです。」

イリヤなんだか楽しそうだな。教えるのがすきなのだろうか？

「ちなみに、私は薄い白で治癒術が得意です。ちなみに赤の色を持つ人を炎術師、緑の色を持つ人を風術師、私の治癒術師等と呼ぶこともあります。ミリアさんは、変わっていて緑と黄色の二つを持っています。」

「それで、ミリアさんの指輪は、一つ魔石が付いていたんですね。」

「そうですよ。フヨーリスさんは無色のようでしたので增幅の指輪にしましたね。」

「じゃあ、私は得意な魔術ないんだ。」

「

フェリスが落ち込んでしまった。イリヤが慌ててフォローする。

「大丈夫ですよ。得意なものはなくとも不得意なものもありませんから。」

「器用貧乏?」

「はうー!?」

見事なカウンターが入った。

「フェリスあまりイリヤで遊ぶな」

「えへへ~」めんなさい、イリヤさん天然で面白いんだもん

「それは認めよ!」

「『主人様』」

イリヤが、可愛いらしい非難の目を向けてくる
うん、可愛いだけだな

こんな感じで緩くフェリスの練習または修行を続けた。

「プリンの群れは問題なく討伐できたらしいです。

次の依頼

モルド伯爵領の、依頼主であるモルド伯爵に岩窟竜討伐の補足事項について聞きにきたのだが

「貴様らは、岩窟竜をさしきと倒せばここのだ」

「こればかりだ。

「ですから、討伐で5万その場から移動させるだけでも3万と依頼にあるのでその確認をですね」

補足事項とは、街道から移動させれば必ずしも討伐する必要はない、といつものだった。

「知らん知らん、たゞひとあの邪魔者を討伐してここ

「では、この依頼は、破棄されるのですね?」

「そんなことひつひつおらん、ええい、貴様らは黙つて聞いてときめか

「話になつませんね。私たちはあなたの部下ではあります。そういうことでしたら、ギルドのまつに再申請してください。」

「ちが、席を立つと

「ま、待て、わかった。その依頼の通りでいい

「わかりました。」

胸ぐそ悪い屋敷を後にする。

今は、Bチームが牛鬼討伐に出でているので、周りは女ばかりだ。

「『』主人様、何故あのよつた者に会いに行かれたのですか？」

「岩窟竜を説得ができるなら戦う必要がないだろ」

「り、竜を説得ですか」

「ティリエルがいるから可能性はある。それにアッシュの情報で、あいつは奴隸を持っている可能性があるんだ。」

「でしたら、その、何故捕まえないのですか？」

「目撃情報はあるんだが、奴隸そのものが見つからないんだ。今も精霊術を使って探していくんだが見つかなかつた。」

「ガセつてこと？」

「まだわからん、もう一度屋敷に入るためには、依頼を終わらせないとな」

ティリエルだけを連れて、岩窟竜に会いに行くことに。

岩窟竜は、モルド伯爵領が使う大きな街道を塞いでいた。確かに邪魔だな。

討伐されないのは、基本無害だからか？

岩窟竜から攻撃はしてこないそうだし。村の人間は、山賊がいなく

なつたと喜んでおりいた。

岩窟竜は、巨大な岩のよつな竜だつた。その体は、ノワールサイヨリさらには硬く柔軟らしい。竜ならブレスも扱うだらうから本来ならアランクの依頼だ。それがアランクなのは岩窟竜が本当におとなしいのだろう。

岩窟竜の頭部と思われる場所に移動する。（わかりづらー）

「ティリエル話せんづ？」

「はい、といいますか、たぶん」

ティリエルが、何故か反応に困っている。

「ワシと話がしたいのか？」

「つか、びっくりした。喋れたのか」

それでティリエルが困っていたのか。

「ワシは、これでも長く生きておる。人の言葉くらいは扱える。それにしても珍しい組み合わせじゃな、銀龍の嬢ちゃんと、うーん・・・人間か？」

「一応人間だ。話ができるなら、手っ取り早い。单刀直入に聞く、じーさんはなんでここにいるんだ？」

「あ、お兄様。古龍と言つてもいい方に、じーさんはちょっと」

「じいさんかそれも悪くないが、ワシの名前はストルと言つ。」

「やうか、ならストルさんと呼ぼう。俺はジン、救世主をやつてい
る」

「わ、私は、ティリエルと申します。」

「救世主？まあよからう、よろしくの。さてワシがここにいる理由
じやつたな。」

あつさり流されてしまった。まったく動じない。

「ワシは、とある村で縁あつて小人族を守つておつたのだが、一ヶ月ほど前に村の小人族が三人ほど人間に連れ去られての。特殊な方法で追いかけ、あの屋敷にいることがわかつたのだが、攻撃して事を大きくしては、小人が殺されかねん。それで、ここに陣取つてジンくんみたんなのか、屋敷の誰かが交渉に来るのを待つておつたのだ」

「小人族・・・そういうことかあのゲス野郎！、連れ去られた小人族が心配だ。ストルさんこちらの要件を話させてもらつ」

小人と聞いて、何故見つからなかつたのか、わかつた。

要件を話し終え、ストルさんは、しばらく黙考して

「ジンくんの申し出を受けよう。これは、友好の証だ受け取つてくれ。」

ストルさんがくれたのは、きれいな丸い石だった。蒼くて透明で宝石のようだった。それを三つくれた。それがなにか知っているのだろうティリエルが

「よろしいのですか？これほどいの物を三つも

「それだけの価値が君たちにはあるとワシは判断した。」

「ティリエルこれは、なんなんだ？」

「『竜宝珠』、地に属する竜にだけつくることのできる宝珠でつくるのに長い時間を必要とします。地の竜にとって家宝のようなもので、人にとっても市值で最低でも50万ギルはします。それにこの竜宝珠はとても純度が高いです。」

ティリエルが、興奮している。

「ストルさん一つテツに『えていいか？』

「その不思議な小太刀のことか構わんよ

氣付いていたか、小太刀の姿なのによくわかるな。アルベルトとどつちが強いんだろう？

それでも、ありがたい

テツを抜き宝珠と重ねる、今までの吸収で一番強い光を放った。

「主、これすごい。力が溢れます。」

テツは、突然人型になつた。顔を見ると頬を上氣させている。瞳が蒼っぽく変化している。落ち着くのを待つて

「テツ、小太刀になつてみてくれるか」

テツに小太刀になつてもらい持つてみると、その存在感がまるで違つた。見た目は小太刀なのに大剣以上の存在感だ。斬らなくてもその鋭さが格段にあがつているのがわかつた。刀身にあつた白い龍の紋様が変化して、青い龍と白い龍が絡み合つた紋様になつていて。

「【主私を両手で持つてみてください。】」

「いづか」

テツが光だした、光が収まつたとき一振りの小太刀が握られていた。左の小太刀に白の龍が、右の小太刀に青の龍の紋様が浮かんでいる。

「【隠し機能その二です。】」

「はは、すいいな」

「【長さもその内変えられるかもしないです。ただ力は半々になつてしまします。】」

「それでもすいよ。せっぱりお前は最高だテツ。」

「【ありがとうございます。・・・そして私はもう餓えた『鉄餓刀』ではありません。主のおかげで『黒龍刀・鉄』へと成長しました。これで私は、主のための主だけの刀になれました。】」

「俺だけの」

嬉しさを噛み締める。

一通り感動したあと。

「ストルさん一度ここを離れてくれないか、そつしたら壁敷にすんなり入れるんだ。」

「わかった。ジンくんティリエルちゃんそれにテツちゃん後は頼んだよ」

「任せてくれ

「まーーーばーーー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887w/>

聖痕使い

2011年10月9日22時56分発行